介入

M

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
介入

【Ｎコード】
Ｎ４７４４Ａ

【作者名】
Ｍ

【あらすじ】
新一の知り合いの中学生が、突然少年探偵団に入りたいと言い出してくる。正体がばれないよう警戒していたコナンだが、その中学生は、実はある悩みを抱えていた…それに深く関わる事件の真相とは？

1．寄り道（前書き）

もし、新しい人物1人を「コナン」の世界に「介入」させるとするなら・・・

今まであまり出ていない中学生がいいのでは？　という考察の下・・・というのは嘘で、この話の構想が固まったときに自分が中学生だったから、そうしただけなのですが・・・

例えば、その中学生が新一の知り合いだったとして、そして少年探偵団に入って活躍してくれるとするなら・・・

などという妄想の下（これは本当です）、そんな妄想やら、頭の中だけで考えたトリックやらをかき集めたのが、この連載です。

文章は至らないとこだらけで、実はこの前書きも当初の原形をとどめないほど修正しているのですが（それほど前の前書きが支離滅裂だったので）・・・

精一杯頑張るので、お付き合いいただければ幸いです。

２００７年８月２７日　前書き大幅に改訂

作者　Ｍ

1．寄り道

人生、何が起こるか分からない。

言うのは簡単だが、起こって欲しくない一大事だって、すぐそこに迫っている。テストとか？　そんなものではない。これはもっと、ずっと深刻な話。

現にたった独りで、大事な人を待ち続ける者だって、いるのだから。

某日の米花町。
少年探偵団がいつものように帰路をたどっている…はずなのだが？
「めずらしいですねえ、歩美ちゃんが寄り道したいって言うなんて。」
「そうね。」
「いつもは『途中で買い食いしてたらブタさんになっちゃうよ』って言うのにな。」
「おまえにだけだろ。」
「ちぇ。」
「「あはは！」」
今のやりとりで分かる様に、今回寄り道を提案したのは歩美だった。
確かにいつもは『途中で買い食いしてたらブタさんになっちゃうよ』と『元太に』言っている。
さて、何のために寄り道するのか？
みんなが質問する前に歩美が言った。
「あのね、みんなに紹介したい人がいるんだ！」
みんな絶句した。

「しょ、紹介したいって…だ、だれですか！？」
『彼氏』でも紹介すると思ったのか、光彦が最初に声をあげた。
「えっとね、歩美の近所の人で３丁目に住んでるの。」
（…３丁目？）
コナンが顔色を変えた。
「どうしたのよ工藤君？」
「いや、おれも３丁目に知り合いいるから…」
哀は儀礼的に、あ、そう、と呟く。
「それで、前その人と話しててね…」

『少年探偵団？』
『うん！』
『へぇ…面白そうだな！　入ってもいい？』
『いいよ！　あ、でもその前にみんなに紹介しなきゃ！』
『頼んだよー！』

「…ってさ！」
みんな、へえ、という顔をした。…コナン以外。
「探偵団に新戦力ってことですね！　名前はなんていうんですか？」
「えっと、帝丹中１年の…」
とたんにコナンの顔が曇ってきた。
「是枝榊（これえださかき）さんて言う人だよ。」
（まじかよーーーーーー！！！）
顔のみならず、全身から血の気が引いていくのが分かった。
「うーん…女の人ですかね、元太君？」
「へへへ、女だったら美人だといいなあ。」
（おめーら、おれはそれどころじゃねーんだよーーーーーーーーー！！）
コナンは心の中で声にならない叫びをあげていた。

勘がいい人はお分かりかと思うが、ずばり「榊」が「新一」の知り合いなのであった…

コナンの百面相を見て事を察した哀がぼそっとつぶやいた。
「何があるか知らないけど…あなたも色々大変みたいね工藤君…」

かなりショックを受けているコナンをよそに、どんどん米花町３丁目は近づいてくる。
どれくらい歩いたか、歩美が指を指した。
「あ、ねえねえ、あれだよ！榊さんの家！」
見れば１００メートルほど前方にちょっと古そうな鳥居がある。
（くっそー、やっぱりかよ！）
ますますコナンが落ち込む。
それも気にせず元太がいきなり提案した。
「おーし、競走しよーぜ！」
「「おー！」」
むろん、返事をしたのは歩美と光彦のみである。
「え、ちょっと待てよおめーら！」
あわてて哀とコナンも駆け出した。

「さーかっきさーーーーん！」
歩美が元気良く声をあげた。
そこにいた人物は竹ぼうきを持って境内を掃除しているところだった。
「おー！来たか歩美ちゃん！」

【是枝榊　（１３）】

そいつはＴシャツに半袖のジャケット、ジーパンをはいていた。
髪は黄色っぽい茶髪で、伸ばしかけらしく揃っていない肩までのそ

れを、後ろの一番下のとこで乱暴にしばっている。泉心高校の沖田の髪型を想像すれば手っ取り早いかもしれない。身長はざっとみて１５０センチあたりか。
信じたくなかった現実を目の当たりにして、またコナンが落ち込む。
　実は英理の次に苦手な人物だったりする。
元太が言った。
「なーんだ、男じゃねーか！」
と次の瞬間、元太が宙ぶらりんになっていた。襟首をつかまれている。
「あたしは女なんだけどさ…」
口が引きつっていて額に青筋が浮かんでいる。
「わ、わわ、悪い・・・」
元太も別の意味で口が引きつっていた。
「もー、失礼だよ元太君ってば！榊さんは男の人に間違われるのがすっごい嫌なんだからー！」
そんなこと知り合いのコナンには分かりきったことだった。
「それにしてもお前小１にしちゃ重いなー！」
「確か小嶋君は４０キロだったかしら？」
「そーでしたね」
「おいおい、あたしと同じじゃねーか！」
「えー、やっぱり太りすぎだよ、ダイエットしなきゃー！」
「うるせー！」
「「あはははは！」」」
ふてくされる元太に皆が笑ったが、コナンは、４０キロある元太を軽々と持ち上げる榊の腕力の恐ろしさに皆早く気付け、とやきもきしていた。
「おい、みんな名前なんていうんだ？」
元太を下ろした後に、榊が訊いた。
すかさず歩美が答える。
「えっとね、元太君と光彦くんと、哀ちゃんと、コナン君だよ！」

哀とコナンの名前を言う時だけ表情がひときわ明るいように見えたのは気のせいか？
「コナン？　変わった名前だなあ。」
（…悪かったな！）
コナンは榊に見えないようにこっそりと眉をひそめた。
「じゃ、元太と光彦と哀ちゃんとコナンだな！」
（ハハ…呼び捨てか…たいてい男にはそっけないんだよなこいつは…呼び方だって前は「お兄ちゃん」だったのにそのうち「お」がとれて「兄ちゃん（にいちゃん）」になるし、今なんか読み方が変わって「兄ちゃん（あんちゃん）」だもんな…）
「今」といってもコナンになる前の話だし、コナンとして会うのは初めてである。

もうすっかり打ち解けたのか、コナン以外は楽しそうに話をしていた。
コナンは初めて（新一として）榊と会った時のことを思い出そうとしていた。

「新一」が榊と会ったのは新一１０歳、榊６歳の時だった。
新一はその時暇でしょうがなかったので、たまたま通りかかった榊の家の神社の境内で一人でリフティングをしていたのであった。
その時榊はなんとなく気が向いたので、外で何かして遊ぼうか、と思って外に出た。
「早く帰ってくるんですよ。」
「分かってます、母上。」

と、古風な呼び方をして母親に笑顔を向け、勢いよく引き戸を開けた。思えばこの時から、榊は時代劇にかぶれた変わった子供だったのである。
見慣れない顔の少年がいるのを見つける。
（ボール蹴ってる…誰？）

（あれ？　誰か出てきたな…）
引き戸の音がして、新一はふと本殿よりも奥にある家へ目を留めた。茶髪の子供が駆け寄ってくる。
「ねえ、お兄ちゃん、何してんの？」
「あ、これ？　見てわかんねーか、サッカーの練習だよ。」
「サッカーって…何？」
「え？」
あいにく、榊は野球しか知らなかった。
「いいか？このボールをだな…こーやるんだよ！」
と、先ほどと変わらず、手馴れた様子でリフティングをする。
「ふーん、やってみていい？」
ボーン！と音がして、ボールが高く舞い上がったかと思うと、次の瞬間には境内の木の枝にあえなく引っかかってしまった。
「あ…ごめんね、お兄ちゃん！」
「いいよ、今取ってくっから。」
眉を八の字にした榊の頭にぽんと手を乗せた後、新一が木に軽々と登っていく。
「ほら取れた…」
と、にっこりとボールを掲げて声をかけた時、枝が折れた。
「うわっ！？」
「お兄ちゃん！」
榊は腕で落ちてきた新一を受け止めようとした。完全にキャッチとまでは行かなかったが、十分な軟着陸になった。
「お…お前力あるなあ…助かったぜ」

思わず、戸惑いと情けなさと安堵が入り混じった苦笑が浮かんだ。
新一を下ろすと、突然榊が泣きだした。心配させてしまったか、と思ってうろたえていたら、
「うわーん！　お兄ちゃん、ご神木の枝折っちゃった！　ばちあたりー！」
「…は？」
よく見たら新一の登った木はくすのきで、しめなわが巻いてあった。
（なーんだ、これか…）
新一はふっとため息をつき、苦笑いした。

それからしばらくして、初詣。新一は蘭と園子を神社に連れてきた。
「ここに、榊ってやつがいるんだ。」
「へー…どんな子だろう？」
「まあ、やんちゃなガキってとこだな。」
境内の入口には榊がいた。…よく見れば巫女姿。
「あ、お兄ちゃーん！」
やはり何度見ても榊。新一はしきりに首をひねった。
「こんにちは、あなたが榊ちゃん？」
「はい！　こんにちは！」
「ずいぶんしっかりしてんじゃない…わたしは園子、こっちは蘭よ！」
その時、黙っていた新一が、言ってはならないことを言ってしまった。
「お前…女だったっけ？」
何かが切れる音がした。榊の背後に炎が燃え上がった…ように見えた。
「へえー…今までずっと…あたしの事男だと思ってたんだ…女だと分かってくれてるって信じてたのにー！」
「え…いや、だって」

いくらなんでも、女子が近所のガキ大将に喧嘩で勝つとか、チャンバラに興じている等とは思ってもみなかったのだ。というか、『あたし』という一人称は初耳なのだが。
「ちょっとそれひどいわよ新一！　榊ちゃん、やっちゃいなさいよ、私が許す！」
「あ、私も！」
「ええ！？」
次の瞬間新一は数メートル後ろに吹っ飛んでいた。
　その時以来、『お兄ちゃん』は『兄ちゃん』に格下げになった。

…ここまで回想してコナンはおもいっきり大きなため息をついた。あまりいい思い出は無かった気がする。思いっきり吹っ飛ばされてるし…

むこうでは榊がものまねをしていた。
「2番、ライト、嶋。背番号、55。」とか、
「次はー、西多摩ー、西多摩ー。」とか。
榊はこういうのが上手い。歩美たちには、似てる似てる、と結構うけていた。
　哀が話しかけてくる。
「ねえ、どうしたの、そんな顔して…知り合いに久しぶりに会ったっていうのにあまり嬉しくなさそうね、工藤君？」
「そーだよ…嬉しくねーよ」
「あら、否定しないのね。」
「できることなら少年探偵団には入って欲しくねー。」
「？」
哀が首を傾げて、コナンの次の言葉を促した。

「あいつはな、人一倍勘がいいんだよ。それに俺のことはよく知ってるし…一緒に行動してて、もしばれたらどーすんだ。」
「ふーん…あなたがそう言うならそうなんでしょうけど、あなたが気をつければいい話でしょ？　私はあのコ嫌いじゃないわね。とてつもなく明るいから、こっちも明るくなってきそうじゃない？」
いたずらっぽく笑う。哀はコナンほど深刻に、いや、まったく深刻に考えていないようである。
「おい、ばれたらあいつは俺を何メートル吹っ飛ばすかわかんねーぞ。」
（いや、今俺ただでさえ縮んでるし…骨が1，2本折れるかも…）
コナンはどんどん深刻になっていく。
「いつものあなたらしくないじゃない。しっかりしてよ。」
コナンはどうすれば歩美たちが榊を入団させる気がなくなるかを必死に考えていた。

と、その時、
「きゃあああ！！」
みんなが一斉に声のする方向を見る。
「ひったくりー！！」
「何！？」
男がハンドバッグを抱えてこっちに走ってきた。
「ど、どうするんですか！？」
「どうするっていってもよー！」
元太達が躊躇している間に、コナンは男を止めようとした、が。
「よーし、お前ら下がってろ！」
「へ？」
コナンを抑えて犯人の前に出たのは榊だった。
「おい、そこの野郎！　か弱い女の持ち物を力ずくで奪おうなんざ、不届き千万！」
威勢よく叫ぶその台詞は、どこかの時代劇かなにかの真似事なのか。

「観念しやがれ、神妙に…」
「ど、どけー！」
犯人も意表をつかれたようだが、それでも相手は中学生くらいなので突き飛ばして進めばいいと思ったらしい。第一後ろからは女性があきらめずに追ってくる。
「話聞けよ…」
榊は顔を不愉快そうにしかめると、持っていたほうきを持ち替え、バットのように構えた。
「止まれっつってんだよこの野郎ー！」
ゴキッと嫌な音がした。顔面直撃。男はのけぞってその場に倒れた。
「っしゃあ！」
榊が勝ち誇ったようにハンドバッグを男の手から引き剥がした。
「あ、ああ、ありがとうございます！」
戸惑いながら深々と女の人がお辞儀した。
その女の人を含め、みんな呆気に取られていた。コナンは、『バケモノ』の健在ぶりに背筋が寒くなるのを感じながら。

近所の交番の警官が女性から事情を聞き、男を引き連れていった後、
「…榊さん！　入団決定ですよ、これは！」
と光彦が言った。
（な！？）
コナンはちょっと待て、と言いたかった。が、言い訳が見つからない。
「うん！　犯人捕まえちゃったもん！」
「すげーお手柄じゃねーか！」
「ええ、そうね。」
（は、灰原まで！）
コナンの口は金魚のようにぱくぱくと動くばかりで、声が出ない。
「ほんとか！？　ありがとな！」
榊が顔をほころばせる。

（えええええ！？）

コナンは再び顔面蒼白になった。

――ここで今一度確認しておこう。一応榊は戸籍上においてもれっきとした女子であると。

1．寄り道（後書き）

作者より　さて、あらためてこちらのサイトで小説を書かせていただきます。
手直ししてあるので、もとのより文章が少しでもましに（＾＾；）なっていれば幸いです。
この小説ともども、よろしくお願いします。

2．放課後の事件

（あ～、くそ！）
コナンは榊が少年探偵団に入ってしまったのでだいぶ落ち込んでいた。
それ以来、いつ正体がばれるか分からないので（柄にも無く）びくびくしていたのだった。

「ねーねー、榊さんの中学校行かない？」
いきなり歩美が放課後切り出した。
「あ、いーですね、それ。」
「もしかしたらそっちに依頼きてるかもしれねーしな！」
「中学校もいいかもね・・・」
もちろんコナンは『絶対にいやだ！』と、いいたいところなのだが、怪しまれかねないのでしかたなく断念した。

帝丹中の玄関口、
「榊さーん！」
と歩美が明るく呼びかけ走っていく。
「おーう！」
と顔を覗かせ気さくに応える榊とは裏腹に、コナンの気はまたまた重くなった。

よってたかる4人とは別に、コナンと哀は榊から1歩距離を置いていた。
「・・・そんなにあの子が苦手なの？」
「あいつはな、昔からだいたい女の肩持つやつだからな・・・俺が蘭を待たせてるって知ったら『蘭の代わりに』殴られそうなんだよなー・・・」

コナンは乾いた笑みを浮かべた。
「まあ、とりあえずしばらくはこうやって距離を置いて、、あまり顔をじっくり見られないようにするのが得策だな・・・」
「そう・・・」
哀が聞き流しながら答えた。

「早く行こ、榊さん！」
「待ってろ、今靴履くからなー・・・」
榊が靴をはこうと下駄箱を開けると・・・
ドドドドドと音を立てて雪崩れる手紙の山。
「わ～！すごい手紙！」
「榊さん、もう、探偵団の宣伝してくれたんですか！？」
「いや、まだだけど・・・」
「おーい、その手紙ほとんど裏にハートマークがついてんぞ！」
元太が気づいた。
「これ、それじゃ、ラブレターなの！？」
なんか歩美はうらやましそうな顔をした。
しかし榊は苦笑いをして、１個１個差出人を確かめているようだった。
全部見終わったとこで、榊の頭に怒りマークが５，６個ついた。
「ちくしょー！！！！！！なんでいつも差出人全員女子なんだよ～！！！！！」
（ハハハ・・・んなこったろーと思ったぜ）
コナンはあきれた様子だ。
榊は思いっきり封筒を床に叩きつけようとしたが、それでは乱暴だと思い直したらしく、仕方なく全部カバンに詰め込んだ。
「こっちはどうなの？ハートマークはついてないわね。」
「あー、開けてみな。」
手紙の文面は・・・
『サッカー部より　ぜひわが部に入部を（以下略）・・・』

『野球部より　（以下同文）・・・』エトセトラ・・・
「ちくしょー、しつけーんだよ「男子」部員～～～～～！」
今度は遠慮なく、封筒もろとも破きまくった。
「ハハハ・・・」

学校を出て、しばらく一行が歩いていた時だった。
ある家の前で、榊がふと立ち止まった。
「どうかしましたか？」
「いや、今、何か変な物音がした気が・・・」
その次の瞬間だった。
誰かの叫び声と、その場から逃げる足音。
６人は顔を見合わせた。
「「行くぞ！」」
コナンと榊が同時に叫んだ。

玄関のドアを勢いよく開け中に入ると、その家の部屋には人が倒れていた。
「きゃあああ！」
歩美の叫び声が部屋に響いた。

コナンたちの通報で、まもなく救急車とパトカーが家の前に止まった。
しかし、被害者はすでに手遅れだったらしい。
今、コナンたちは、目暮警部からおおまかな事情を聞かれている。
「学校から帰ってたら、近くの家から『ぎゃあ』って悲鳴がしてよー！」
「それで、私たちが家の中に入ったら・・・」
「そこの奥の部屋に女の人が倒れてたんですよ！」

元太、歩美、光彦がしゃべっている。
「おや？一人多くないか？」
無論、榊のことである。
「是枝といいます。」
と軽く会釈をする。
「ああ、工藤君から君の話を聞いたことがあるよ。」
「はあ・・・」
榊はあいまいに答える。
歩美たちがひそひそ話をしだした。
コナンには「幽霊屋敷の・・・」という言葉だけが聞こえた。だいたい想像がつく。
目暮警部が続ける。
「男の子のような活発な子だとな。」
「へー、そうなんですかー・・・」
コナンは榊の頭に怒りマークを発見した。榊は「あのやろ～！」と思っているに違いない。
（正体ばれたらやばいぞ、まじで・・・）
哀がそれを見てくすっと笑った。

「被害者は、田辺五月（たなべさつき）さん、３５歳、独身で、この自宅で琴の教室を開いていました。」
高木刑事が言った。
「そうなの、どうりで琴が家の中にゴロゴロしてるわけね。」
佐藤刑事が相槌を打った。
「死因は、頭部強打によるもので、凶器は被害者のそばにあった灰皿かと・・・」
「血も付いてるから間違いなさそうね。」
「即死ではなく、殴られた直後少しは息があったそうです。」
「つまり、こういうことかしら？犯人は被害者を殴った後、あわてて玄関から自分の靴を持って裏口まで行き、そこから逃走した・・・

裏口が開いていたしね。」
「ええ、室内に足跡がありませんからね。と、いうことは、犯人は金目当てで偶然入った泥棒ではなく、被害者の顔見知りだった・・・」
「そういうことね。とりあえず被害者の交友関係を洗わないとね。頼んだわよ。」
「はい！」
（どうやら佐藤刑事の言う通りみてーだな・・・ん？なんだこれ？）
コナンはそばに落ちていた紙を拾った。
（・・・暗号？）
思わずコナンは笑みを浮かべた。

高木刑事が帰ってきた。
「容疑者は、被害者の妹の田辺弥生（たなべやよい）さん、被害者の友人の坂下葉月（さかしたはづき）さんの二人に絞れました。二人とも金銭関係でトラブルを起こしていて動機は十分です。そろそろ部下が連れて来る・・・」
ちょうどその二人が入ってきた。長い茶髪で、ゆるくパーマをかけた人と、短い黒髪の人だ。高木刑事が事情を話しに行っている。
部屋の写真立てには茶髪の女性と被害者の姿が収まっていたのでどうも妹の弥生らしい。
その弥生が叫んだ。
「何ですって？私は確かに姉とは仲が悪かったけど、私は、姉がこの家に住み始めてから、ここには1歩だって入ったこともないのよ！坂下さんなら何度も入ってたんじゃないの！？」
「何言ってるの、だれが殺すもんですか！」
「失礼ですが、1時間ほど前はどちらに・・・？」弥生が答えた。
「家で本を読んでたわ。内容まで覚えてたら、証拠になるでしょ？」
哀が口を挟んだ。
「本なんていつでも読めるものだし、証拠にならないわよ？」

弥生は訝しげに顔を背けた。
「じゃあ私もだめね・・・家でテレビドラマを見てたんだけど、それ再放送だから・・・」
と葉月が諦めた様子で答える。
その時、やっとコナンが口を開いた。
「ねえ、刑事さん、これ、さっき拾ったんだけど、ダイイングメッセージじゃなーい？」
「「え！？」」
佐藤刑事と高木刑事が叫んだ。
コナンが持っていたのはさっきの紙だった。
「コナン君、ちょっとそれ見せてくれるかしら？」
「うん、いいよ。」
コナンは持っていた紙を差し出した。
その紙がどんな紙かというと、

・パソコンの画面くらいの大きさの横長の紙
・横長のマス目がいっぱいある
・そのマス一個一個に漢数字（もしくは空白）がある
・漢数字は手書きでなくすべて活字
という具合である。

佐藤刑事が言う。
「印刷の具合から見てどうもコピーをしたものみたいね。」
「一番右にも何か書いてあったみたいですが、血で見えませんね。」
「書いてある数字は、右上から縦に読むと、
七七八　七七八　七八九八　七八七六（以下省略）・・・あら、
『七八九』だけ、血で丸をしてあるわね。」
「君はこれがダイイングメッセージだと思ったんだね？」
「うん！」
目暮警部が口をはさんだ。

「しかしその『七八九』どころか、その紙自体、何のことだかさっぱり分からんな・・・最後の方には漢数字だけじゃなく漢字も書いてあるぞ。」
その通りだった。最後の方に、
「十斗巾為斗　十」と書いてあるのだ。
少年探偵団達も覗き込む。
「語呂合わせで『七八九』を読もうとしてもだめですね。」
「えーと、ひらがなの七番目、八番目、九番目は・・・」
「『き』と『く』と『け』だよ、元太君！」
「アルファベットだと『G』と『H』と『I』・・・これもだめみたいね。」
（じゃあこの文字は、一体何を表しているんだ・・・）
コナンはちょうど現場の指紋を採り終えたトメさんに話しかけた。
「あ、ねえねえトメさん、指紋はとれた？」
「おう、ボウズか・・・いや、あったにはあったけど、どれもふき取った跡があって、誰のものかは判別できそうにないんだ。」
（指紋も無し、か・・・今のところ、ダイイングメッセージを解くしかなさそうだな・・・）
コナンは考え込んだ。
（待てよ、あの『斗』と『巾』と『為』ってどこかで・・・）
コナンは、はっと気が付いた。
（そうか！これで説明が付く！これは犯人の名前だったんだ・・・しかし、ここで大立ち回りはできねーし、眠らせても服部の時みたいになりかねねーし・・・）
コナンは榊に正体がばれるのを心配していた。
（待てよ、確か榊は音楽は得意だったな・・・よし・・・賭けてみるか・・・）
「佐藤刑事、ちょっと貸してね」
コナンは佐藤刑事から紙をひったくると、榊の方へ駆け寄った。
「ねえ、さ、榊、ね、ねーちゃん・・・」

年下のヤツを「ねーちゃん」と呼ばなければならないのは、かなり抵抗があるようである。
「ん？どうした、コナン？」
「あのね、ボク、こんなの見つけたんだけど、榊ねーちゃんなら分かるかも・・・何だと思う？」
榊が紙に目を通し、そして、にやりと笑った。
「分かったぞ！」
「ホ、ホント、榊ねーちゃん！」
「ああ！」
榊はコナンに紙を返した。コナンが笑みを浮かべた。
（頼むぜ榊・・・）

2．放課後の事件（後書き）

作者より　やっと2話目です。ちょこちょこ事件が起きますが、トリックや、ここに出てきた暗号は、本で見たことや、自分の経験から「かき集めた」という感じです。（＾＾；）よし、暗号できた、と書いていると、ふと、青山先生がコナンドリルでおっしゃっていた「動機を考えるのが難しい」という言葉がなんとなく分かるような気がする今日この頃です。
次回もよろしくお願いします。

3．解決・・・？

「この紙が何なのかが分かったっていうのは。本当かね？」
目暮警部が聞いてきた。
「ええ！」
榊がはきはきと答える。
榊はもう一度コナンから紙を取り、警部や佐藤刑事たちに広げて見せた。

「これ、実は楽譜なんですよ！」
「「「ええ！？」」」
元太たちが声をあげた。
「だって、オタマジャクシ（音符）がないじゃねーか！」
榊が振り返り、言い聞かせるように喋った。
「いいか、これはな、楽譜は楽譜でも、ただの楽譜じゃねえ・・・琴の楽譜なんだよ！」
「そうか、被害者は琴の教室を開いていたんでしたね！じゃあ、血で見えなかったのは曲の題名・・・」
高木刑事が声をあげた。
「でも、何の曲なの？」
歩美が聞く。
「まあ、見てなって。すいません、手袋お借りできますか？」

榊が一つ琴を運び出し、床に置いた。
「琴には１３本弦があって、一本一本名前が付いてるんです。奥の弦から順に、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、それから斗、為、巾。」
「へえ・・・」
「で、」

榊が何か親指にはめた。
「これが、弦を弾くための『爪』です。本当は人差し指と中指にもはめるんですけど、この曲は親指だけで弾けますから。・・・それじゃ、この曲を弾いてみますよ。」
手馴れた様子で弦を弾く。
♪～♪～♪～～　♪～♪～♪～～・・・
「あ、これ聞いたことあるわね。」
佐藤刑事が言う。
「『さくら』ですよ。『さくら　さくら』ということもありますけど。」
（そうそう・・・）
コナンは距離を置いて成り行きを見ている。
「なるほど、その紙が琴の楽譜だっていうのは分かったよ・・・それで、ダイイングメッセージはどうなるんだい？」
高木刑事が聞いてくる。
「うーん、たぶん、歌詞を当てはめるんだと思います。」
すこし榊が考えた。
「これの歌詞は・・・
♪さーくーらー（七七八）、さーくーらー（七七八）、のーやーまーもー（七八九八）、
さーとーぉーもー（七八七六）♪・・・だから・・・
『七八九』に当てはまるのは、・・・えーと・・・『のやま』・・・？」
「でも、ここには、『のやま』という人はいませんよ？」
光彦が言う。
「そうね、ここに来た容疑者の名前は・・・田辺弥生さんに、坂下葉月さん。」
「それじゃあ・・・？」
榊が少し考え込んでしまった。
（もう少しヒントが要るな・・・）

コナンが榊に呼びかける。
「ねえ、ねえ、榊ねーちゃん！」
「え？」
「あのね、ボク本で見たことあるんだけど、その『さくら』っていう曲、さっき榊ねーちゃんが歌ってた小学校の教科書に載ってるような歌詞の他にも別の歌詞があるんだって！もしかしたら、そっちの歌詞じゃないかなあ？でも、ボク覚えてないんだ・・・」
榊がはっと目を見開く。
「そ、そっか！えーと、
♪さーくーらー（七七八）、さーくーらー（七七八）、やーよーいーのー（七八九八）、
そーらーぁーはー（七八七六）♪・・・
『七八九』は、『やよい』だ！」
「それじゃあ、犯人は・・・」
高木刑事が言う。
「被害者の妹の・・弥生さん！？」
弥生は突然名前を呼ばれ、動揺した。
「なっ・・・いいがかりよ！！証拠がないじゃない！」
「・・・」
その時、コナンが何かを見つけた。
「あれれー、何かなぁ？ホラ、高木刑事の足元にあるの・・・」
「へっ！？」
いきなり呼び止められ、バランスを崩して倒れそうな高木刑事を間一髪のところで元太たちが支えた。
コナンが何をつかんだ。
よく見れば、それは、ゆるくパーマのかかった茶髪だった。
いつものように『子供』のふりをして言う。
「あれれ～、この髪の毛弥生さんのとよく似てるね～・・・どうして、この家に入ったことがないって言ってたのに、髪が落ちてるの？・・・そっか、きっと女の人ともみ合った時に髪の毛が抜けちゃ

ったんだね！」
「・・・！」
榊が後を続けようとする。
「鑑識にまわせば、はっきりするよ・・・
あの、でぃ・・・」
榊が言葉につまった。英語だの横文字だのはどうも苦手なのだ。
「でぃ、でぃー・・・えーと何て言ったっけ・・・」
「ＤＮＡ鑑定のことでしょ？」
哀が呆れた様子で助け舟を出す。
「そう、それ！」
「・・・調べれば分かるでしょうな、あれがあなたの髪の毛かどうか・・・」
目暮警部に言われ、弥生はしばらく呆然としていたが、やがて口を開いた。
「そんな・・・そんなつもりはなかったのよ・・・！」
取り乱した様子で、ヒステリックに声が震えている。
隣で、葉月は弥生の顔を目を見開いて見つめる。
「言い争いになって・・・それで、気がついたらあの女が床に血まみれになって倒れてたわ・・・証拠は出来るだけ消したつもりだったのに・・・」
ふっと笑って言葉を続ける。
「あの女は最期まで狡猾だったようね・・・あんなメッセージまで残して・・・最期まであたしを・・・」
その言葉を哀がさえぎった。
「じゃあ、なんであの人は直接名前を書かなかったの？」
「え・・・？」
弥生が顔を上げる。
「あなたが犯人だと言いたかったなら、名前を書けば済んでたってことよ・・・それに、あの琴の楽譜は被害者の手元じゃなく、少し離れたところに落ちてたから・・・たぶん書いた後、自分で投げた

んだと思うわ・・・できるだけ見つからないように」
弥生の声が震えはじめた。自分の前髪を手でくしゃっと握る。
「あ・・はは・・・冗談はよしてよ・・・なんで、あの女がそんなことしなきゃいけないのよ・・・」
「・・・警察が犯人を突き止める前に、あんたに自首して欲しかったからじゃないのか？」
榊が言った。
「・・・」
「・・・自首して・・・」
と、静かにその言葉を繰り返す。
榊の目は、目の前にいる弥生でなく、何か、別のものを見ているようだった。
（榊・・・？）
コナンが横目で顔を見上げる。
・・・どこかで、見たような表情・・・

「・・・思いとどまれなかったんですか？」
光彦が続けた。
「たった1人のお姉さんなんでしょ？どうして・・・」
「死んじまってからじゃ後悔してもおせーんだぞ！」
弥生は自嘲気味に息をついて言った。
「・・・そんな綺麗事たくさんだわ・・・あの女が？私に自首して欲しかったですって？ふっ、冗談でしょ？誰がそんなことするもんですか・・・後悔？・・・してるとすればあの女にみすみすダイイングメッセージを書かれてたのを見過ごしたことぐらいだわ・・・ええそうよ・・・あの女が・・・」
少しの沈黙が続く・・・
「本当にそう思ってるの？あの人の事」

口を開いたのは、いままで黙っていた葉月だった。
「ねえ、私が今こんな事言うのもなんだけど」
弥生は目を見開いて葉月の横顔を見ていたが、葉月は弥生のほうを振り返ろうとはしなかった。
「あの人ね、私がこの家に来るたびにあなたの話ばっかりしてたのよ・・・あの写真立てを見ながらね」
短い髪をかきあげて棚の上の写真を目線で示す。
さっきコナンも見つけていた、2人で写っている写真だ。

『ねえ葉月？どうして私素直になれないのかしら・・・分かってるのに、自分がただ意地張ってるだけって』
『素直じゃないのは妹さんのほうじゃない？・・・なーんてね』
『やだなあ、そんな事言わないでよ、あの子は、ほんとはいい子なんだから』
ふっと息をつき写真立てに目を写す。
『いつから、こうなっちゃったんだろ・・・でも・・・あの頃はよかった、なんて言っててもしょうがないわよね？・・・私が、素直にならなきゃ』

「本当にあの人の事、そういう風に思ってるの？・・・あの人が言ってたことはでたらめだったの・・・？」
弥生の顔が、眉の吊り上った顔から、何かに驚いたような表情に変わる。
葉月から目線をそらし、焦点の定まらない目で下を向いた。
「何よ・・・今更・・・そんな事言って・・・それが・・・本当だとしても・・・もう・・・どうしようもないじゃない・・・」
唇が震え、言葉が出ない。
「姉さんは・・・帰ってきやしないじゃない・・・わ、たし・・・殺しちゃったんだもの・・・」
床の上に、水が落ちる音がする。

「ねえ・・・ほんとに・・・私のことそんな風に・・・いい子だなんて信じてたの？・・・うそよ・・・私・・・姉さんを殺してしまったじゃない・・・そうよ・・・姉さんは意地っ張りよ・・・素直じゃないわよ・・・そういう事は・・・面と向かってちゃんと言いなさいよ・・・言ってくれたら・・・せめていい子の振りだけでもしてあげられたのに・・・・・・姉さん・・・」

それから少しして、弥生はゆっくりと立ち上がり、両手を差し出して、逆らうことなく警官に連れられて家の外へ出て行った。
コナンは写真立てにもう一度目をやった。
写っていたのは、どれくらい前のものだろうか、肩を並べ、屈託のない笑みを浮かべた五月と、弥生の姿だった。

その家を出て歩きながら、歩美たちが口々に言った。
「すごかったよ、榊さん！」
「ええ！なんたってあの暗号をあっという間に解いちゃったんですから！」
「ええ、そうね・・・」
哀も褒めている。
「歩美ちゃんも哀ちゃんも、ありがと！」
榊が満面の笑みを2人に投げかける。女子には、こんな風にそこそこ優しいのだが・・・
「コナンより目立ってたよな！」
（うるせーな、目立つわけにはいかねーんだよ・・・）
「あはは、そ、そうか？」
榊もちょっと照れていた。
「今日の演技は８０点ってとこかしら？・・・お疲れ様」

「サンキュー、灰原」
コナンはどっと疲れが出たようで、うんざりした口調で言った。
（あー、ずっとこんなことしてなきゃいけねーのかよ・・・）

しばらく歩いていると・・・
「へっくしゅん！」
「あれ？いきなりどうしたのコナン君？かぜ？」
（ハハ・・・ストレスだな、こりゃ・・・）
とコナンが苦笑いをしていると、榊が急いでコナンの額に手を当てた。
「あー、ちょっと熱もあるみてーだから、あたしの家でちょっと休むか？」
（ゲッ・・・）
せっかく、顔を見られないよう距離を置いていたのに。
「い、いーよ・・・って、うわあ！」
コナンの抵抗もむなしく、あっという間に背中にコナンを背負う。
「なーに、遠慮は無用だぁ！」
「だ、大丈夫だよ、事務所は近くだし・・・」
「・・・事務所？」
「あ・・・えーと・・・」
まずいことを言ったかもしれない。
「毛利探偵事務所に居候してて、蘭さんっていうきれいなお姉さんがいるんだよね！」
「あ、ちょっ、歩美ちゃん・・・」
慌てたコナンだが、歩美と榊は構わず話を展開する。
「おー。蘭さんなら知ってる知ってる！ここんとこ会ってないけど、どうしてるかな・・・へー、お前、居候だったんだな、コナン」
「あ、あはは・・・」
「さてと、長話はこれくらいにしてだな」
「あ、だから、・・・」

かまわず榊は、その足でもって神社のほうへ走り出した。
「じゃあまた明日なー！」
と榊は走り去りながら背中を向けて元太たちに手を振った。
「ばいばーい！」
と歩美がコナンに手を振る。コナンは苦笑いでしか応えられない。
哀が目で『とりあえず頑張ってちょうだい、工藤君』と合図を送ってきたのが小さく見えた。

すぐに神社についてしまった。
「よーし、着いた」
と榊がコナンを下ろして、境内を歩く。
「いっけね、忘れてた」
と榊は本殿に引き返して、賽銭を入れる。
榊が手を叩き、じっと目をつむっている。
コナンは傍らでそれを見ていて、ふと首をかしげた。
（前は、こんな日課はなかったはずだけど・・・）
しばらくして、榊が顔を上げる。無表情だったが、開いた目が爛々として、何かをじっと見ているようだった。
何か決意したような・・・
いったい、何だろう、・・・この表情は。

「ねえ・・・何をお願いしたの？榊ねーちゃん」
榊はコナンの顔を見て、ふっと微笑んだ。
「『待ち人来たれ』・・・ってとこだな」
「え・・・？・・・誰を・・・？」
「・・・うーん、どうしようかな・・・話してやろうかな・・・お・・・っと、また忘れてた」
とぶつぶつ呟いて、境内の隅っこに駆け寄る。
・・・そこには布でぐるぐる巻きにしてある丸太が一本立っていた。

・・・ぼろぼろだ。
（え・・・まさか）
コナンのいやな予感はまもなく的中した。
「やーっ！！」
丸太相手に突きや蹴りを次々と入れる。・・・表情からして、本気である。
「すっ、すごいねぇ榊ねーちゃん・・・いつもこんな事してるの？」
コナンが青ざめながら聞く。
「ああ、蘭さん空手やってるだろ・・・だから・・・このっ・・・見習ってだな・・・うりゃ・・・こういうことはちゃんとしとこうと・・・」
（おいおい、んなトコ見習わなくていいっつーの・・・）
なおも丸太を殴り続け、蹴り続ける。
自分があんなふうにされたらと想像すると・・・怖いので、コナンはそこから考えるのをやめた。
しばらくして、榊は腕組みをして一歩後ろに下がり、さらにぼろぼろになった丸太を見て満足げに頷いた。
ふと、上を見上げる。雨粒が顔に落ちてきた。
「降ってきやがったな・・・ほら、風邪こじらせちまうだろ、遠慮はいらねーから上がれ上がれ」
榊は家の引き戸を閉めると、台所のほうへ歩き出した。
廊下には日本刀だの弓矢だの薙刀だの木刀だのが飾られている。
（ハハ・・・麻酔銃用意しといたほうがいいかもな・・・もしものときのために）
本降りになったようで、雨音が家の中まで聞こえる。
「夕立かもな・・・あ、そういえばさ・・・お前、暗号好きだろ？」
「え、どうして？」
「だって、あの暗号の紙・・・楽譜だけど・・・拾った時のお前のあのうれしそうな顔っていったらなかったぞ、徳川埋蔵金でも掘り出したみたいな・・・」

「あ、はは・・・」
「あたしの知り合いにもな、お前みたいに暗号だの事件だののため
なら、たとえ火の中水の中って感じの兄ちゃんがいるんだよなー」
「え？」
いきなり「新一」の話を持ち出され、思わず体が硬直する。
「ま、それはおいといて」
一気に力が抜けた。
（お、おどかすなよ・・・）
ともかく一安心、と思ったのもつかの間、
「で、だいたいお前ぐらいの子供っていうとな」
「え？」
「普通、自分の手柄は独り占めして、人に自慢したがるもんなんだ
よなぁ・・・例えば、『テストで１００点取った』とか『カブトム
シ捕まえた』とか」
コナンは黙ったままだった。何を言うべきか思いつかない。
「お前は、自分で見つけたあの楽譜、あたしに渡したけど、わざわ
ざ会って間もないやつに『ねーちゃんなら分かるかも』なんて言わ
ないよな、あたしのこと何も知らない『はず』なのに・・・」
遠くから小さく雷の音が聞こえる。外は厚い雲に覆われすっかり暗
くなっていたが、ときおり明るく照らされる。
「それに、元太が言ってたことからすると、『普段は』お前は事件
となると、どうしたのどうしたのって、出しゃばるような奴らしい
し」
「や、やだなぁ、そんな事無いよ・・・」
「そうだ、そのしゃべり方も」
「へ？」
コナンは思わず口元に手をやった。
「お前、歩美ちゃんたちと話してるのと、あたしや、大人に向かっ
て話してるのじゃ、話し方が違いすぎる・・・あんな小学生いねー
ぞ、今時」

小さかった雷の音がはっきり聞こえるようになって来た。
「結論付けると、お前はあたしに隠し事をしていて、気を使いすぎてるってこと・・・そんなに色々気を回してちゃ、疲れるだろ・・・なあ？」
やや優しい声だったが、明らかに挑発するような語調だった。じろっとコナンの顔を睨み、少しの沈黙・・・
「そう、お前は猫を被ってたんだ・・・」
「え？」
「しかも、ただの猫じゃねぇ・・・日本一賢いメスの三毛猫だ・・・」
家の中まで雷が照らす。
「そう、その猫は自分で推理を披露したりはしないが、何気ないしぐさで周りの大人たちに事件の真相に迫る鍵を与える・・・」
光と音の感覚が短くなってきた。雷が近づいているらしい。
「おまえ、そっくりじゃねーか・・・赤川次郎の小説に出てくるあの猫と」
9秒、8秒、6秒・・・
「いつから『三毛猫』の方に鞍替えしたんだ・・・？」
地響きのような雷鳴。

「平成の『ホームズ』さんこと・・・兄ちゃん？」

完全に閃光と耳をふさぎたくなるような雷鳴が同時だった。廊下には電気がついていなかったのに、はっきりと榊の陰が床に伸びている。
（やっべぇ～～～！！！）
コナンの顔は真っ青だった。
嫌な汗が流れる。

（・・・あせるな！）
ここからがコナンの演技力の見せ所である。
「や、やだなあ榊姉ちゃん、どーしたの急に・・・」
あらん限りの『子供の』笑顔で言う。
「へっ、どーしたもこーしたもあるかい！」
榊は容赦ない。というか完全に男言葉である。
ここでぼろを出すわけにはいかない。しらを切り通すべく、笑顔を崩さず続ける。
「ねえ、さっき何て・・・」
「兄ちゃんって言ったんだよ！」
こ、・・・怖い。
「兄ちゃんって誰の事・・・？」
苦笑いのまま聞くコナン。
「お前の事だろ、工・藤・新・一！」
（こりゃーはったりじゃなさそーだな・・・）
確信を持っている。そう思ってコナンは方針を変えた。
「やーだなー、ボクが新一兄ちゃんのわけないじゃない！」
「へぇ、兄ちゃんの事知ってるのか・・・」
まだ榊は怖い顔を変えない。
「え・・・っとね、蘭姉ちゃんから聞いたんだ・・・いーっぱい事件解決したんだってね！」
「で、そいつがお前なんだろ？」
（・・・強引だなオイ・・・）
榊はなおも続ける。
「赤の他人がこんなそっくりなわけねーだろ！」
眼鏡をとられた。
慌てないように、動揺を見せないように、コナンがすばやく答えた。
「あのねー、新一兄ちゃんのお母さんのお爺ちゃんのお兄さんの娘さんの従兄弟のおじさんの孫がボクなんだってー・・・だから、ボクと新一兄ちゃん、親戚なんだよー・・・えーっと・・・だからち

ょっと似てるのかも・・・あはは・・・」
そこまで一気にしゃべり終わると、榊はちょっと驚いた様子で目をぱちくりさせた。
「・・・へー、そーだったのか？知らなかったなぁ、どーりで似てるわけだ。」
（ふう・・・何とかごまかせたか・・・？）
「よーし、変なこと言って悪かったな、それじゃあ粥でも作ってやるから食べるか！」
「わーい♪」
「・・・って言うと思ったら大間違いだぜ！」
笑顔を豹変させ、コナンに迫ってくる。
（え〝・・・）
「この眼鏡度が入ってねー。何の理由も無く小学生が伊達メガネをかけてるわけねーよな？考えられる理由は一つ・・・変装・・・お前、『自分が兄ちゃんに似てる』と自覚してる上に、自分が『親戚だ』と、似ている理由までちゃんと説明できるくせに、必要以上にその顔を隠すのはおかしい」
（やべ・・・）
「それに、まだ決定的な証拠はある。」
榊は向き直った。
「お前一人っ子か？」
「え・・・う、うん。」
「よーし、言ったな？」
「ど、どういう意味？」
「お前、さっきの現場で言ってたよな、『さくらって曲には、小学校の教科書に載ってる歌詞の他にも別の歌詞がある』って」
「え、それが・・・？」
榊が勝ち誇ったように言い放った。
「はっはっは、ぬかったな！米花小学校で使われてる一年の教科書には『さくら』は載ってねえ！さすがに１０年も前の事はよく覚え

てないし、まじめに教科書開いてないみたいだな！」
（な・・・！？）
「さーて、吐いてもらおうか、何のためにそんな格好になったのか！？家に電話かけても留守だし、どこ行ったと思ってたら、蘭さんとちゃっかり一つ屋根の下とはなぁ・・・」
ずいっと顔をコナンに近づける。
「もし、理由が、そういうような不純な目的なら・・・」
榊が指をぼきぼき鳴らし始めた。
「ぜ、全部言うから、落ち着け！！」

外で鳴っていた雷も少し落ち着いたらしい。
一通り話を聞いていた榊が腕組みをし直して言った。
「・・・ふーん、なるほど・・・？『人の口に戸は立てられぬ』・・・工藤新一が生きてるって話が広まらないように、正体を明かすのは限られた人たちだけってことだな？」
「ああ・・・にしても、お前、よく『コナン』がオレだって分かったな」
「『なに、初歩的なことだよ』新一君？」
『新一』の口調を真似して指を振る。
「まず、江戸川コナンっていう名前を聞いたときから、あからさまな名前だなって思ったし、さぞ兄ちゃんが気に入りそうだなって思ってからお前の顔を見てみれば、あーら不思議、兄ちゃんにそっくりじゃねーか・・・」
おどけて講談でもやっているかのように両手を大げさに広げる。
「さらによく見てみれば伊達めがねだし・・・それから、さっき言ってた『口調の豹変』に気づいたって所だな・・・観察力は探偵の基本なんだろ、兄ちゃん？」
「やれやれ・・・『鵜の目鷹の目地獄耳』は健在だったってわけか・

・・変わってねーな、お前」
「ああ・・・それよりさっきの話だけど、そんなことならさっさと黒尽くめとやらを潰しゃあいいじゃねーか。」
「だから、・・・それができりゃあ苦労しねーんだよ。」
「・・・蘭さんを泣かせてんじゃねーだろーな。」
「・・・」
言葉に詰まる。
「そうなんだな？」
無言で頷く。
「ずっと待ってんだろ？兄ちゃんのこと・・・」
「分かってる・・・」
「本当に？」
「・・・？」
「わかんねーもんだぜ、同じ立場になってみねーと・・・いつ帰るか分からないような人を待ってる時の気持ちなんて、なおさら」
肩をすくめて榊が言う。
「ったく、こんな厄介な事情を抱えてるなんてなぁ・・・他にも兄ちゃんに言いたいことはあるんだぜ？殴られる前に避けるとか出来なかったのかとか、蘭さんとの関係がじれったくてしょうがないとか」
「お前な・・・」
「でも、あんまりそういうことは言わないことにする。」
「へ？」
「こっちもそういう事情知らずに勝手に『蘭さんを待たせやがって』なーんて思ってたからな」
「おいおい・・・いつからオメーそんなに性格丸くなったんだ？てっきり『問答無用』って殴られると思ってたのに」
雨音を除けば、不気味なほど家の中は静かだった。
「あん？じゃあ殴られたいってのか？」
「あのな・・・」

言いかけて、ふと榊の顔を見た。
目が、微妙に別のところを向いている。
コナンの後ろのほうの何か。先ほど、田辺邸で見せたような表情・・・
後ろにある家具といえば箪笥ぐらいの物だったが・・・と振り向きかけたが、榊が何事も無かったかのように取り直して、突然思い出したように言った。
「あ、蘭さん家に電話しねーとな。」
「あ、ああ。」
榊は受話器をとってダイヤルを回した。
（まだこいつの家黒電話だったのかよ・・・）
と呆れながら、ぼんやりとやり取りを聞く。
『はい、こちら毛利探偵事務所。』
蘭の声だ。
「あ、もしもし、是枝です。ご無沙汰してます。」
『あっ、榊ちゃん？久しぶりー、元気？』
「ええ。あ、今コナン君をウチにおいてるんですけど、これから送りましょうか？」
『うん、ありがと。博士から聞いてる。』
「それじゃすぐに・・・あ、コナン君が替わりたいって。」
（え？）
榊が咳払いをした次の瞬間、
「あ、蘭ねーちゃん？」
（何～～～～！？）
コナンの声そっくりだ。
「あのねー、蘭ねーちゃん前家の仕事忙しいって言ってたよねー。」
家事が忙しいという話は、さっきちょっとコナンが話したのだ。
「榊ねーちゃんが手伝ってくれるんだってー。」
『え、ほんとに？じゃあ榊ちゃんの時給決めなきゃ・・・』
「ねー、どうする榊ねーちゃん？・・・『おかまいなく』だってー。

」
（な・・・）
「それじゃあこれから榊ねーちゃんと帰るねー。」
コナンが驚いていた間に、榊が電話を切った。
「お、おい・・・」
「ああ、上達しただろ？あたしの物まね。いやー、宴会芸にでもと思ってやり始めたけど、似てた？よーし、次は蘭さんの声でも練習するか・・・」
「だ、だからなんで俺の声で・・・」
「ああ、なんか直接言うのは気が引けたしなー」
「おい！それだけの理由で人の声使いやがって・・・」
「さー帰るぞー。」
「おーい・・・」

「た、ただいまー・・・」
ぐったりしてコナンが部屋に入る。
「お帰りコナン君！榊ちゃんも久しぶりー！」
「あ、今料理してるんですか、なんなら・・・」
「だいじょうぶ、ひと段落ついたとこ。コナン君、また私とお風呂入る？」
「へっ・・・」
コナンが顔を赤くして戸惑っていたのもつかの間、
「あっ、私が入れときます！」
「へ？」
榊はコナンをかっさらって風呂場の前で止まった。
「・・・どういうつもりだ？」
「へー？一緒に入れないのがそんなに悔しいか？『また』って言ってたなあ、蘭さん・・・そう何回も蘭さんと風呂に入らせてなるもんか、ってつもりだよ。家事を手伝うのも、兄ちゃんを見張るため・

・・何変な事考えてるか分からねーからなぁ」
「・・・言っていいか？」
「ん？」
「『猫を被ってる』のはお前のほうじゃねーか」
「あん？なに人聞きの悪いこと言ってるんだよ！あたしは、ただ蘭さんを尊敬すべき女性の一人としてだな・・・」
「その蘭と同い年のオレは尊敬するに値しないってか？」
「まあそういうことだな」
「おい、少しは否定しろよお前！」
「さー入った入ったー。」
さらりと受け流して榊はリビングに戻っていった。
「あれコナン君は？」
「あ、やっぱり一人で入るって言ってました。」
浴室に入ろうとする前にそんなやり取りが聞こえてきた。
ドアを閉めると、ほとんどリビングの声は聞こえなくなった。
（これからどーなるんだ一体・・・）
コナンはため息をつくしかなかった。

（けど、何だったんだ、あれは・・・）
あの、どこかで見たような・・・出来ることなら見たくない・・・
悲痛な表情・・・

『コナン君が新一なら・・・よかったのにね・・・』

（え？）
ふと蘭の顔が思い浮かんだ。
（ああそうか・・・あの顔だ・・・）
・・・でも榊がどうして？
榊があんな顔をしたのを見たことが無い。
いや、１度ほどあっただろうか？思い出せないが・・・

・・・どうして？

雨音がまた強くなってきた。
コナンがリビングに入ると、小五郎は、何処かで飲んだのだろう、ソファで酔いつぶれて寝ており、蘭はテーブルのそばで玄関のドアをじっと見ていた。
「・・・榊ねーちゃん帰ったの？」
「あ、うん・・・ついさっきね」
「・・・何かあったの？」
蘭の寂しそうな顔が気になって尋ねた。
「さっき、榊ちゃんと話してたんだけどね・・・」
一度は止んでいた雷が遠くで鳴り始めた。
「実は・・・」

「え・・・？」

雷が家の玄関を照らす。
何も無かった玄関に榊の靴が置かれた。
「よーし、明日の授業の用意は、っと・・・」
明るい声が部屋に響く。

「・・・もう寝よ」
独り言を言って布団に入りかけたが、思い直したように箪笥のほうへ歩いていった。
置いてある写真立てを手に取ると、その場に立ち尽くした。
今度の独り言は、口には出さなかった。

人間、いつ、何が起こるかわからないって・・・
頭では分かってたのに・・・
人の気持ちが分かる人間にならなきゃって、
言われてたのに・・・
でも、自分だけはそうじゃないなんて・・・
そんな風に心のどこかで思ってたから・・・
ばちが当たったんですか？・・・
ねえ・・・そうなんですか・・・？
どうすればいいんですか・・・？

写真立ての3人の顔がゆがんで見えた。
目にたまった涙を、流れる前に拭う。

背後に、雷が近づき、逆光を浴びた。

もう涙なんて溜めていなかった。
目にこもっていたのは、ただ1つの決意だった。

また1つ、外で雷が落ちた。

3．解決・・・？（後書き）

作者より　今の私の心境・・・「ああ、よかった。」時間かかったけど、無事3話目を投稿することができました。筆が遅くてごめんなさい（＾＾；）このつたないものを読んでくださっている方、ありがとうございます。

ところで、このへんでぼちぼち裏話、のような話を1つ。この「榊」の家は神社ですが、なぜそうしたかっていうと、たんに「日本っぽいから」だけだったりします。「十字路」を見て京都が好きになった私の独断でしかありませんがご了承ください（＾＾；）
榊の名前の由来はというと・・・読んで字のごとく、言わずもがなということで。（おいおい）

そうそう、榊がウグイス嬢のまねで、（カープの）嶋選手が2番と言ってましたが、これは、はじめにこの小説を書いたとき2番だったのをそのままにしていたものです。

いろいろと修正を加えながらの執筆なので更新は遅いですが、これからもどうぞよろしくお願いいたします。m（＿＿）m

4．悪夢～その1

コナンが、いつものように蘭の携帯に電話をかける。
変声機を構えて、呼び出し音を聞く。

しかし、出た時から蘭の様子がおかしかった。
「おい・・・蘭？」
「どうしてよ・・・」
「へ？」
「いつまで待たせる気なのよ新一ぃ・・・」
「お、おいバカ泣くなって！言っただろ・・・！」
慌てるコナンをよそに、電話の向こうで泣き声が聞こえ始めた。
（勘弁してくれよ・・・）
そう思う間もなく、背後から大きな影が自分にかぶさっているのに気づいた。
「へ？」
振り向くと、今の会話を一番聞かれたくない奴が仁王立ちになっていた。
「さ・・・かき・・・お、お前どうしてここに・・・」
「あん？この事務所に料理手伝いに来たに決まってんだろ？」
「は、はは・・・そうだったそうだった・・・」
「でも、予定が変更になったなぁ」
両手の指をぼきぼきと鳴らし始める。
「蘭さんを泣かせやがって・・・」
「ば・・・っ！おい、待て！落ち着けって・・・」
それには答えず、榊が反動をつけて突進してくる。
間違いなく、拳が顔に向けられて・・・

「うわっ！！」
やられた、と思ってがばっと起き上がると、教室にはチャイムが響き、周りの同級生はランドセルを背負ってがやがやと帰り始めていた。
「・・・」
一瞬自分がどこにいるのか分からなくなった。
（・・・夢かよー・・・）
ため息をつきながら脱力し、再び机に突っ伏す。
（にしても、洒落にならねーって、あんな夢・・・ハハ・・・）
どうやら「帰りの会」の途中から寝ていたらしい。
小林先生が気づかなくてラッキーだった。
「おーい、何やってんだコナン！帰ろーぜー」
「おー・・・」
元太たちに急かされながら、自分も荷物を担いで教室を出た。

「そういえば、どうなったの、あの子の事」
唐突に哀が切り出す。
「ん？・・・あー、榊のことか・・・だめだった」
「・・・ばれたのね？・・・まあ、少しは肩の荷が下りたんじゃない？」
「オメーよくそんな楽観的なこと言えるな」
「やっぱり女の勘っていうものは侮れないのね」
「あのなぁ・・・」
「気をつけないと、本命にもばれるわよ」

「う・・・」
言い返せない。今まで蘭には何度も疑われていた。
「まあ、もうばれてしまったものはどうしようもないし、信用がおける子なら大丈夫だと思うけど？」
「そりゃあ、あいつは口は堅いし義理堅い奴だけど・・・なあ、もし新出先生の時みたいなことになってたらどうする？おまえ」
「あら、それならあなたが彼女の顔の皮を引っ張ってみれば？」
「・・・おまえ、オレを殺す気か？」

「じゃあ今日も榊さんのところに行こうか？」
「また中学校まで行くのかぁ？」
「いいじゃないですか元太君！近いんですから。それに榊さんも少年探偵団の一員ですよ！ねえコナン君！」
「あ、ああ・・・」
「あら、・・・どうかしたの？」
「いや、昨日、蘭から聞いた話なんだけど・・・」
と言いかけた時、帝丹中のグラウンドの方から榊の大声が聞こえてきた。
「しまっていこー！！」
「・・・何でしょう？」
「行ってみよーぜ！」

「おほん、『４番、サード、新井。背番号、２５』！」
榊が制服姿で、カバンを脇に置いて野球部のバッターボックスに立っていた。ファーストの男子が呼びかける。
「なあ是枝ー、『４番サード』って言ったら『長島君』じゃないのかー？」
「細かいことは気にせんの、栗原！」

「山中だよ・・・」
今度はレフトが声をあげる。
「ってか、誰だよ、栗原ってー・・・」
「何よーるん（言ってるの）前田ー！野球部が野球選手の名前知らんでどーすんの！」
「ファルコンズの木暮とか有藤とか・・・ジャガーズの清松なら知ってるけど・・・ってか俺、田中だよ！」
「つべこべ言わんと（言ってないで）、ほら、打つけん（打つから）構えんさい（構えなさい）！」
右手にバット、左手にボールを持ってキャッチャーのほうを振り返る。
「本当に１０球ノックしたら帰してくれるんじゃろーね、石原？」
「はいはい・・・斉藤ですよ・・・」
それには答えず、さっさとボールを放り投げて打ち始めた。
「一塁！二塁！三塁！はい、ピッチャー返し！次ショート！ゲッツー取れんといけんよー！左ー！中堅ー！ほら、走れー、取れるぞー！右！ほら、ぼーっとせんとき、キャッチャー、取って！」
そんなやりとりを、５人は呆然と突っ立って見守っていた。
「あの助っ人のお願いの手紙にはすっごく怒ってたのに・・・」
「なんだ、野球好きなんじゃねーか」
「そうですねぇ」
「ああ、あいつは昔から野球だけは好きで・・・」
「・・・なんでコナン君が知ってるんですか？」
「え？・・・あ・・・」
哀がコナンの脇腹をひじで小突いた。
「ホントに気を付けてるの？」
「へいへい・・・」
苦笑いしながらグラウンドの方に目線を戻すと、榊が最後の１球でホームランを打ち、鼻歌交じりにダイヤモンドを一周している所だった。外野手が三人がかりでグラウンドの端へボールを拾いに行く。

「～♪・・・おーい！見てたかー？」
こちらに気づいたらしく、バッターボックスの脇に置いていたカバンと、小学校の頃から大事に使っているらしい黄色い傘を取ると手を振りながら駆け寄ってきた。

「はー、すっきりした♪・・・天気予報は朝から雨って言ってたけど、外れたなぁ」
「あのー、ちょっと気になったんですけど・・・」
「ん？」
「榊さんって、どこ出身なの？」
「広島だよ！5、6歳くらいまで住んでて、父上の仕事の都合でこっちに来たんだよ・・・向こうでも神社やってたけど、こっちのは遠い親戚がやってたのを引き受けた形だな」
「じゃあ、さっき喋ってたのは、広島弁って奴か？」
「まあな・・・こっちに来てからはあんまり喋ってなかったけど」
「どうして？」
「からかわれたりでもしたんですか？」
「・・・勘だよ」
「「へ？」」
「周りの奴らの、あたしを見る目つきだよ・・・すぐに分かったんだ、なんか馬鹿にされてるなって・・・文句があるなら、正々堂々、面と向かって言えってんだ、なぁ？」
と言って、握り拳を作る。
「まあ、あっさり引き下がって標準語にしちゃったあたしもあたしだけど」
肩をすくめて苦笑いする。
「でも、今までその方言を捨ててこなかったのはいいことだと思うわよ？」
「え、そうか？」
「ええ、それには、あなたがそこで生まれ育ったっていう・・・」

「大切なものが込められてるんですよね、灰原さん！」
「あら、覚えててくれたのね」
「はっ、はい！ボク、とってもいい言葉だと思います、ねえ、歩美ちゃん！」
「うん！」
「ありがと・・・」
顔を赤らめて熱弁する光彦を見ていた榊は、何やら勘付いた様子で
「ふーん・・・」
とつぶやいた。
（またこいつ、妙なことに勘を働かせやがって・・・）
コナンが横目で見て、乾いた笑いを浮かべた。
「でも、俺たちは方言なんて気にしないから、どんどん使えよ、なぁ、そうだろ？」
元太が光彦たちに呼びかける。
「もちろんですよ！」
「そうそう！」
「まあ、分かる範囲でね・・・」
不意に、榊が歩美達を４人まとめて腕で抱きかかえるようにした。
下手すると頬ずりでもしそうな勢いだ。
「く～っ、元太も光彦も歩美ちゃんも哀ちゃんもみんないい奴じゃなー！」
「お、おう・・・」
「恐縮です・・・」
「でも、・・・コナン君は？」
「ああ・・・ああいうやつはな、おだてるとろくな事にならないからな」
（オイ・・・）
「それにしても、あのころ、今くらいに神経が図太かったらなぁ」
（いや、それも困る・・・）
「なんか言ったか、コナン？」

「別に・・・」
正体を知ってからも、人前で榊は「コナン」と呼び捨てで、子ども扱いしている。
状況からすれば怪しまれることがないのでありがたいことだが・・・
（けど、やっぱり気に食わねー・・・）
榊の顔を睨むと、
（文句あるか！？）
といった顔で睨み返された。
（ハハ・・・まあ、「工藤」って連呼されるよりはずっとマシだよな・・・）
この時、大阪の色黒男がくしゃみか何かをしたかどうかは定かではない。

歩美達は、歩きながら、学校であったことなどを色々話していた。
「それで、今日小学校でね、『大きくなったら何になりたいですか』って聞かれたの」
「榊さんは何になりたいですか？」
「そーだなぁ、色々あって決められないんだけど・・・」
「あら、いいわね、たくさん夢があって」
哀がすこしからかう。
「例えば、なに？」
「えーっと、演歌歌手だろ、かるたクイーンだろ、時代劇俳優、日本舞踊、華道、茶道、書道、・・・」
「日本趣味っていうやつですか？」
「おいおい、『時代劇』専門なのかよ？」
「ちょっと待て、まだあるんだよ、えーと、能に歌舞伎に狂言に落語に浄瑠璃、講談師・・・」

「・・・まだあるの？」
「あるある、空手、柔道、薙刀、剣道、弓道、合気道、・・・こんなもんか？」
「・・・おい待て、最後のほうものすごく物騒じゃなかったか？」
と言って苦笑いするのはコナンだ。
「まあ、ひっくるめて言うと、『大和撫子』・・・かな？」
（・・・無理だって・・・）
「あら、コナン君、何か言いまして？わたくしの聞き違いならよいのですけれど」
（ハハハ・・・）
「えーと、話を戻すと・・・あとは、その仕事とか、競技とかをして、・・・何て言うか、誰かがちょっと幸せになる、とか、笑顔になる、とかいうのが重要だな」
「剣道や空手でか？」
「うーん、まあ落語とか、笑ってもらうことが仕事の分は言うまでも無いとしてさ、自分が仕事なり何なりやってる所を見て、誰かが、『自分も頑張ろう』っていう気分になってくれたら、いいかなあ・・・なんてな・・・ちょっと無理かな？」
「無理じゃないですよ！」
「榊さん、とっても面白いもん！」
「あのモノマネは傑作だったよな・・・なんだっけ？」
「おほん、『え、次は、奥穂ー、奥穂ー、お降りの際は、足元にご注意ください』」
「それそれ！」
子ども達がげらげら笑い出す。
哀もくすくす笑っていたが、一番笑っていなかったのはコナンだった。
ひと段落ついたところで、今度は榊が質問した。
「ところでさ、みんなの将来の夢って何？」
「オレはなー、日本中のうな重を食べ歩く！」

「グルメリポーターになればいいんじゃないですか？」
光彦が苦笑して応える。
「歩美ちゃんは？」
「歩美はね、お嫁さんになる！ね、コナン君！」
「・・・はい？」
いきなり話題を振られて返答に詰まる。
隣では哀が笑いをこらえていた。
「あ、そうそう、コナンの夢は・・・早く大きくなることだよなー？」
にやにやと笑って榊が問いかける。
「あー、はいはい・・・」
と、コナンはあいまいな返事をした後、何か思い出したように、にこっと笑った。
「ねえ、榊ねーちゃんは日本が好きなんだよね？」
「・・・それで？」
「だったらさ、日本のいいところを・・・」
と言って榊のカバンを開けて何か探している。
「外国の人にも伝えられなきゃね！」
榊の目の前に開いて見せたのは英語の教科書だった。
「げっ・・・！おい、は、早くしまえ、こっちに向けるなってば！」
「はーい♪」
にこにこしながら教科書をカバンに戻す。
「へー、榊ねーちゃん、英語が苦手なんだねー・・・知らなかったなー」
（こ、この・・・知ってたくせに・・・）
教科書がカバンの中に収まったのを確認すると、榊は目を覆っていた手をやっとのけた。
「ったく・・・」
カバンをコナンの手からひったくる。
哀がコナンに尋ねる。

「・・・あれは、苦手と言うより拒否反応って言ったほうが正しいわね・・・何かあったの？」
「ああ、何年も前の事だけどな・・・」

神社の境内の前で、まだ小学生だった榊がいつものように掃除をしていた。
『よう、榊、元気にしてるか？』
『あれ、兄ちゃん？』
『おはよう榊ちゃん、今日はわたしも新一も朝練なのよ』
『あ、蘭さんおはようございます』
と、ぺこりと頭を下げた次の瞬間、榊の背後に大男が立っていた。
ぎょっとして振り返り、何とか冷静を保とうと口を開く。
『あ、あの・・・何か・・・』
『Ｅｘｃｕｓｅ　ｍｅ．』
『！？』
聞き慣れない、明らかに日本語とは違う言葉を聞いたこの瞬間、榊は瞬時に警戒心を抱いた。
『あの・・・もう一度・・・』
『Ｗｅｌｌ，Ｉ　ｗａｓ　ｇｏｉｎｇ　ｔｏ　ｖｉｓｉｔ　ｍｙ　ｆｒｉｅｎｄ'ｓ　ｈｏｕｓｅ，ｂｕｔ　Ｉｄｏｎ'ｔ　ｋｎｏｗ　ｗｈｉｃｈ　ｗａｙ　ｔｏ　ｇｏ．　Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｈｅｌｐ　ｍｅ？』
『～！？』
まだ小学生だった榊は外国のことは今まで考えたこともなかったらしく、英語も一言も理解できなかった。
『うーっ！！』
急いで新一と蘭の後ろに隠れた。
『うわーん、何て言ってるんだよー、この人ー！！』

『おいおい・・・』
『？・・・Ｗｈａｔ's ｗｒｏｎｇ？』
その男性もどうして怖がられているのか分からず肩をすくめた。

「・・・トラウマってわけ？」
「ああ、俺の知る限りあいつの弱点はこれだけだな」
「変わってるわね・・・あなたと同じくらい」
「え？・・・なんでいっしょにされなきゃいけないんだよ」
納得できないといった感じで眉をひそめた。

６人が歩き続けていると、後ろから突然自転車が突っ込んできた。
「おーい、みんな、よけろ！」
やっとのことでかわし、ふと見ると、自転車に乗った若い男が片手に携帯を持っていた。
「おい！　危ないだろ、教則違反だぞ、片手運転は！　車道を走りやがれ！」
と榊がふらふらと蛇行しながら走り去る男の背中に向かって怒鳴った。
ところが、耳に入っていないのか、そ知らぬ様子で角を曲がり、視界から消えてしまった。
「あー、逃げやがった！」
「・・・おい、灰原、怪我してないか？」
コナンが哀の手をとって抱えあげる。
「・・・ええ・・・」
そっぽを向いて、大丈夫よ、と手を払いのける。

「光彦も、転んだりしてねーか？」
「は、はい、尻餅はつきましたが、なんとか・・・」
「榊は・・・怪我するわけないよな」
「なんだよそれー！」
やりとりを見ながら、哀はふっと息をついた。
（あなたは・・・誰にでも優しいのよね・・・自分のことは顧みないで）
そして、そんな様子の哀を見て、榊は頭をかいた。
（うーん、なんかややこしくなってるぞぉ・・・？）

「よーし、みんな怪我してな・・・」
「おーい、光彦ぉ」
「い？」
「いつまでオレの上に座ってるんだよー」
「うわっ！元太君！？なんか地面が柔らかかったと思ったら・・・」
「あーあ、すりむいちゃってるな・・・仕方ない、もうちょっと行くとあたしの家だから傷口洗っていけ！」
と、頼んでも無いのに元太を背負う。
「・・・オレと体重同じじゃなかったっけ？」
「そんな心配はいらねーよ、あたしは近所の高校生放り投げたことあるからな！」
「は、はあ・・・」
哀が青い顔をしたコナンに話しかける。
「・・・もしかして、あなた、投げられたの？」
「まあな・・・今思い出してもぞっとする」
コナンは引きつった笑いを浮かべた。
6人は神社の境内の入口のところまで来た。
「改めて見ると、木が大きいですねぇ」

「ねえ、あの木の枝、折れちゃってるけど、どうしたの？」
「あれか？あれはな、近所のサッカーバカの兄ちゃんが折りやがったんだよ」
「・・・ずいぶん言われてるわね、工藤君」
「ハハ・・・」
そうして、６人は境内に足を踏み入れていった。

4．悪夢～その１（後書き）

作者より
４話目です。遅くなりました（＾＾；）
結構時間かかるので、今度からもう少し１話分の量を減らそうと思います。

まずは、つぎの５話目投稿に向けて頑張るので、よろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ

5．挿話―追想―

6人が境内の中に入っていくと、歩美があるものを見つけた。
「わーっ、ネコさんだ！」
「けど、母ちゃんが、黒猫が前を通ると縁起が悪いって言ってたぞ！」
「いや、大丈夫、前を通ってるんじゃなくてこっちに近づいてきてるんだからな！」
と榊が笑い飛ばす。黒い子猫がとことことやってきた。
「・・・そういう問題なんでしょうか？」
「これ、野良猫なの？」
「いや、このあたりの皆で面倒見てる地域猫だよ！ほら、首輪ついてるだろ？」
「ほんとだー・・・名札もある。」
「『ぼくは地域猫です　名前は』・・・『ソーセキ』？」
「さては、名付け親はオメーだな、榊？」
「そうそう！・・・ねぇ哀ちゃん、こいつ、見てくれは真っ黒けだけど、なかなかかわいいだろ？」
「え・・・」
哀はそう言われて改めて猫をまじまじと見つめ、微笑んで抱き上げた。
「・・・ええ、そうね・・・この子の『黒』は、とってもあったかそう・・・」

私や、家族を飲み込んだ、生気のない、奈落のような冷たい『黒』とは違って・・・

「一人ぼっちでぶらぶらしてるように見えるけど、ちゃーんとみんなに可愛がってもらってるんだよな、こいつ」

「・・・そうね・・・ありがと」
ソーセキを降ろしてやると、榊のほうを向いてつぶやいた。
榊は歯を見せて笑い、猫の頭をなでてやった。
「おーい、お前幸せ者だなー、哀ちゃんみたいな別嬪さんに褒めてもらって、なー？」
黒猫も「なー」と鳴いてそれに答えた。

「それにしても、ここ、夜になったらなんか出そうだなぁ」
と元太が周りを見回す。
「出るわけねーだろ、墓場じゃねーんだから！」
「榊さんはユーレイ怖くないの？」
歩美もくるくる目を配らせながら聞く。
「ぜーんぜん！地震雷火事親父も怖くないぞー」
「じゃあ、ユーレイが出たら追い払ってくれる？」
「いやー、それは可哀想だろ」
「？」
「幽霊って言うのは、単に、あの世に行く前にやり残したことがあるとか、思い残しがあるとかで、『こっち』にふわふわ浮いてるだけなんだから・・・」
「はあ・・・」
光彦は首をかしげながら聞いている。
「そもそも、幽霊ってのがいるって考えられたのは、幽霊がいたらいいなって思った人がいたからだろ？例えば、極端に言えば、なんか良くない事があったら、『祟りのせいにしてしまえ～』、とか」
身振り手振りがおかしかったので、歩美達はくすくすと笑った。
「あとは・・・」
ふっと榊が空を見上げる。
「死んだ人に会いたい、とか」
「え・・・？」
「一度死んだら二度と会えないのは分かってるけど、でも会わずに

はいられない・・・って、そういう人、結構いるのかもな」
そう言って、前を向き直ると、
「おっと忘れるトコだった、よーし元太、さっさと手当て済ませるぞー」
と、元太の背中をぐいぐいと押した。
コナンは榊の背中をじっと見ている。哀が話しかけてきた。
「ねえ・・・彼女から聞いた話っていうのは、是枝さんに関わってることなの？」
「・・・まあな・・・」
二人も榊に続いて家の中に入っていった。

「遠慮はいらねーからあがれー！」
少し汚れた黒い傘と赤い傘が入った傘立てに自分の傘を立てると、榊は子ども達を案内した。
「すげー、なんか一杯刀とか置いてあるぞ！」
「ああ、日本刀はさすがに本物じゃないけど、他のはちゃんと使えるぞー」
「・・・使えるって・・・使ったんですか？」
「おいおい、なんだよ光彦！その疑わしい目は！竹刀とか、木刀とかで、剣道だの薙刀だの教えてもらってたんだよ！」
声をあげて笑う。
「だれに教えてもらったの？」
「そりゃあ、父上と母上だよ、父上が剣道でー、母上が弓道と薙刀だったかな？」
その会話を聞き、コナンは思わず榊を振り返った。
それに気づかず、歩美達は榊と話を続ける。
「榊さんのお父さんとお母さんって、どうして結婚したの？」
「へっ？何で？」
「えーっと、何となく知りたいなーって・・・」
「あ、あのっ、ボクも人生プランの参考として・・・」

歩美と光彦は顔を赤らめながら答え、元太は、
「・・・なんだぁ？『じんせいぷらん』って」
と怪訝な表情を浮かべた。
榊は咳払いをして5人の気を引いた。
「よし、ざっとあらすじを言うだけのと、詳しいの、どっちがいい？」
「詳しいほう」
「了解♪」
そう言って、榊は両親の高校時代の話を始めた。
「父上は東京出身で、ずっとこの辺の学校に通ってたけど、母上は京都出身で、東京に来たのは高校生の時・・・二人は高校で初めて知り合うわけだが・・・」

ざっと18年前。米花高校2年A組・・・
休憩時間、男子と女子が入り混じって雑談をしていた。
その中に、生まれつき茶髪の、メガネの男子も居た。
「今日はー、アタシ、帝丹高のカレとデートなの♪」
女子グループの1人がうきうきと話す。
「なんだよ、のろけ話か・・・」
「はいはい、うらやましいことですねぇ」
男子もそれなりの受け答えをする。
「なー、そういえば是枝さぁ、おまえって彼女とかいなかったっけ？」
是枝と呼ばれた例のメガネの男子は顔を赤らめ、広い肩を狭めて、慌ててハンカチでメガネを拭き始めた。
照れた時のいつもの癖である。
「え・・・あの・・・その・・・なんで僕から？」
「心配すんな、お前から時計回りに全員に話振るから」

「えっ！じゃあ次オレ！？」
「あー、いわれて見ればぁ、ちょっと気になるかも、是枝君の彼女」
「で、でも・・・いないから、本当に・・・」
「へーそうなんだ・・・是枝君ってけっこう顔もいけてないこともないと思うんだけど」
「・・・お前、それって結局ほめてるの？けなしてるの？」
「ほめてるの！」
「じゃあお前、是枝の彼女の立候補するか？」
「あー・・・それは・・・ちょっと・・・」
それを聞いた是枝は、たれた眉をさらにたれて、しょんぼりとうつむいてしまった。
「・・・やっぱりだめかなぁ、僕・・・」
「だっ、だめじゃない、全然！うん！」
あわててフォローする。
「なあ、是枝、じゃあさ、あいつかわいいかもっていう女子はいないか？」
「ジャガイモ畑みたいなうちの女子は外してもいいぞ」
「だれがジャガイモよっ！」
「でも、僕、そんなに友達多くないし、他のクラスの人知らないし・・・」
と、窓の外に目を移した瞬間、是枝の顔はくぎづけになった。細い目がいつもより開いて、何かを追っている。
「あ、あの人・・・」
「え、何？」
「だれだれ？」
クラスメートも窓に駆け寄る。
移動教室らしい、女子の集団が中庭を歩いていた。
「何だ、かわいい女子見つけたか？」
「う、うん・・・」
「まじ！？」

「あ、あの、長い髪の人・・・」
女子の先頭集団の中に、長い黒髪をなびかせて颯爽と歩く人物が居た。
「あー、B組の、弓道部の環(たまき)さんね！」
「あのー、それって苗字？」
「ううん、下の名前だけど・・・っていうか、知らなかったの是枝君、隣のクラスなのに！」
「あ・・・まあ・・・」
「環さんっていったら、みんなの憧れよね！目元がきりっとしてて文武両道、育ちが違うっていうか・・・大和撫子の鑑って感じ」
「・・・そんな人なら、もう付き合ってる人がいるだろうね・・・」
「いや、諦めるのは早い、まだ手を出してる奴なんかいないだろうからな！」
「ココのクラスの雑草とは比べ物にならない高嶺の花だもんなー」
「ちょっと、ジャガイモの次は雑草！？」
「まあ落ち着け、何でオレがジャガイモから雑草にしたかと言うとだな」
「・・・な、なに？」
何かいい答えを予想したらしい、女子グループが息を呑んだ。
「・・・雑草はジャガイモと違って『煮ても焼いても食えない』んだよーだ！」
「はあ！？」
「なにそれー！！」
「もう、あったまきた！何か言ってやってよ是枝君！」
「・・・雑草も七草粥にしたらおいしいよ？」
「・・・・」
男子も女子も、固まって是枝のほうを見るだけだった。
「・・・違うよ、是枝君・・・」
「ああ・・・それは・・・なんか違う」
「それを、にこやかに言っちまうところが、また・・・」

その内男子の1人が気を取り直して話を戻した。
「・・・もう1回聞くけど、お前は環さんがかわいいって思ったんだな？」
「う、うん・・・」
「付き合ってみたいと思うか？」
「そ、それは、できるなら、そうしたいけど・・・」
「よし、なら、俺たちはとことんお前に協力するからな！」
「あたし達も応援するからね！」
「がんばって！」
「あ、ありがとう・・・」
「っていってもさあ、まずは『お互いに』知り合わないとどうしようもないよな」
「おい、是枝、お前直接B組まで行って声をかける勇気は・・・」
是枝は顔を真っ赤にして激しく首を横に振った。
「無理無理無理・・・」
「ハハ・・・ない、よな」
「じゃあさ、部活から攻めてみるってのもありよね？是枝君、今帰宅部だから丁度いいじゃん」
「環さんと同じ弓道部に入るって事？」
「あ、待って、今弓道部男子一人もいないから、浮いちゃうわよ」
「じゃあ、剣道部はどうだ？練習場所は弓道部のすぐ隣だし」
「お前、ちょっと細いけど背は高いし、似合うと思うぜ！」
「いざって時に環さんを守ってあげられたらかっこいいわよね」
それを聞いて、是枝も少しその気になって来たらしい。
「うん・・・やってみよう・・・かな」
「よーし、そうと決まれば！」
「『男』を上げるためにも剣道部へ！」
「今日中に入部届け出して来い是枝！」
「きょ、今日！？」

そんなA組での騒ぎは中庭を移動中のB組の女子たちにも聞こえていた。
「なんか騒がしくない？」
「あー、A組の男子がまた馬鹿騒ぎしてるんだあ」
「何言ってんだろうね？」
「さあ、そこまでは聞こえないけど、どーせしょうもない話よね」
「え、どこですか？」
黒い長髪の女子が振り返って訊く。
「ほら環さん、あそこ」
環と呼ばれた女子は校舎の2階の窓にちらっと目をやった。

「・・・おい是枝、お前今ちょっと環さんと目が合わなかったか？」
「かーっ、うらやましいぜ！」
「そりゃ、あんたみたいな奴には目もくれないでしょうからねー」
「・・・ったく、そりゃねーよな是枝、って、おーい？」
是枝は壁に張り付くように、窓から顔だけ出して固まっていたかと思えば、顔を真っ赤にしてそのままずるずると床に座り込んでしまった。

「あーなんか是枝君もいたみたい」
「・・・是枝君？」
「あー、環さん知らない？無理も無いか、A組の中じゃ一番おとなしい男子だし」
「きっと他の男子に絡まれてたのよ！かーわいそうに」
「それありうるー・・・」
そんなやり取りをしながら、女子は中庭から去っていった。

「おーい、是枝ー、しっかりしろー」
是枝はまだ真っ赤な顔のままぼーっとしていた。
「だめだ、のぼせてる・・・」

「・・・とまあ始めのほうはこんな感じ」
「へー！一目ぼれだったんだね！」
歩美は特に熱心に聞いていた。
「・・・でも、かなり前途多難な感じね、その調子だと」
哀はあくまで客観的に感想を述べる。
「それで、その後はどうなったんですか？」
「んーと、父上は剣道部に入ってー・・・」

是枝は、無事弓道部の隣の剣道部に入部したものの・・・
環には声をかける機会が無いまま・・・
1日たち・・・2日たち・・・3日たち・・・
・・・1週間たち。

「「・・・何やってんだ！？」」
教室で、男子らに迫られ、そう言われるのは当然と言うか、必然と言うか、明白であった。
「まだ声もかけてなかったのか！？」
「何のために入ったんだか」
「ただ待っててもダメだって」
「でも・・・最近弓道部のほうが練習早く終わってて・・・」
「そこはお前、さっさと切り上げればいいだろ！」
「だ、だめだよ、その日の練習はちゃんと最後までやらなくちゃ、

上手くなれないじゃないか・・・」
「・・・うーん、お前って奴はホントにお人よしと言うか馬鹿正直と言うか・・・」
「とにかく、早く声かけるんだぞ！」

その日の練習。
今日は順調に進み、顧問の先生と練習をしていた。
「胴！そうそう、その調子だぞ！」
もうすぐ練習も終わる。
そうしたら、今日こそ声を、かけなくっちゃ・・・
そう思いながら練習を続けていると、隣の弓道場から声が飛び込んできた。
「はーい、今日はここまで！」
「「ありがとうございましたー」」
女子がぞろぞろ帰り始めた。

あ、環さんだ・・・

思わずそちらを向いた是枝は、次の瞬間、側頭部にしたたか「面」をくらってしまっていた。
「・・・よし、こっちも切り上げるか」
是枝は、周りの剣道部の男子がけらけら笑っているのも気に留めず、急いで竹刀を袋にしまい、道着入れを引っ掛け、肩にかついで体育館を飛び出した。

是枝の少し前を、環は女子2、3人と歩いていた。
大急ぎで追いかけるあまり、少し追い越してしまい、急ブレーキをかけなければいけなかった。
先に声をかけたのは環のほうだった。

「こんにちは」
と、にこやかに話しかける。
「こ、こんにちは・・・」
「今まで、剣道部ではお見かけしなかったと思うんですが、新しく入部したんですか？」
「は、はい・・・その、少しでも役に立てばと思って・・・と言うか、何か新しいことを始めようと思って」
顔はすでにまっかっかになっている。
「まあ、それはいい決断をしましたね」
「い、いやあ・・・」
と、照れて手を目元にやった時、拭くべきメガネがないのに気がついた。
あ・・・割れたらいけないから、更衣室に置いてきたんだった・・・
くるっと向きを変えて走り出す。
「あら、忘れ物ですか？」
「はっ、はい・・・」
が、なにしろ視界がはっきりしない上に舞い上がっている。
担いでいた竹刀を近くのプレハブの屋根に引っ掛けてしまい、そのままバランスを崩し、勢いよくこけてしまった。
「わっ！？」
他の女子はくすくす笑っている。
その上、こけた弾みに宙に放り出された道着入れが顔に直撃した。
「ぶはっ！」
だ、だめだ、みっともないトコ見られてしまった・・・
「大丈夫ですか？」
環が近づいて手を差し出す。
「は、はい・・・」
「けがはないみたいですね・・・よかったです」
「あ、ありがとうございます・・・」
きっと、他の人に対してだって、こんな風にやさしく接するのだろ

うな、とは分かっていたが、それでも嬉しいものは嬉しい。
環の手を借りるわけにはいかないと、慌てて起き上がった。
「そういえば、名前を聞いてませんでした・・・私は、2年B組の槻野環です。名前で呼んでも構いませんよ・・・あなたは？」
「・・・にっ、2年A組の、是枝葛彦です・・・た、環さん・・・」
「よろしく、是枝さん」

この現場を2年A組の面々がばっちり待ち伏せしてまで目撃していたのは、言うまでもない。

「と、まあこれが2人の初めてのちゃんとした出会いだったってわけよ」
榊はそう言いながら自分の机にカバンを置いた。
「なあなあ、これなんだ？」
元太が机の上の一輪挿しの花瓶を指差した。
といっても、ささっているのは木の枝だったが。
「あー、さっき話した、近所の兄ちゃんが折った木の枝だよ」
「あ、ねえねえ、これって結婚式のパンフレット？」
歩美が見つけた冊子の表紙には「是枝・槻野両家」という文字があった。
「そーだよ！また今度写真とかゆっくり見せるから」
と言ってパンフレットを本棚に戻す。
「お母さんの旧姓って、何て読むんですか？」
「んー？・・・すぐ教えるのは面白くないから、今度までの宿題な！」
「えー？自分で調べなきゃいけねーのか？」
「疑問に思うたことはとことん調べる！それが探偵じゃろ？」

広島弁で、元太を諭すように言う。
「うん、そーだね！じゃあおうちに帰ったら調べてみよーっと・・・」
めんどくさそうな元太とは対照的に、歩美はうきうきと答える。
「・・・それで・・・話を戻すけど、その後、結婚まではとんとん拍子ってわけね？」
それを聞いて、榊は頭をかいて苦笑いした。
「うーん・・・それが、そうでもなくって・・・」
榊は、再び話をし始めた。

5．挿話―追想―（後書き）

作者より　ああ、前回の後書きで「スピードアップを目指す」とか言っておいて、こんなに時間かかってしまいました（－－；）Ｍでありま す。たぶん、この連載の最後のほうの「京都編」の執筆にかまけていたせいです（－－；）遅くなって本当にすみません。

ところで、前回のサブタイトルが「悪夢その１」だったのに、今回のタイトルが違うのは、榊の両親のエピソードが予想より長くなってしまったせいです。（やっぱりあらすじだけにしておけばよかった・・・でも入れてみたかったので）　「悪夢その２」は次回に持ち越しとなっております。次回は「いったい榊に何があったのか？（３話に蘭がコナンに教えた話のこと）」について迫る予定なので、どうぞお楽しみに。

さて、どうでもいい話なんですが、今回登場、榊の両親について。榊の父親の人物像は、新出先生と京極さんと瑛祐（全員メガネ・・・）を足して３で割った感じと理解してください（＾＾；）茶髪で無口でドジなんです（＾＾；）母親のほうは平次のオカン、静香さんに近いかも。

ちなみに、今更ですが、「父上」「母上」ってのはやりすぎたかなーと感じてます（＾＾；）

この間辞書を読んでいたら、「東男に京女」と言う言葉を見つけました。粋な江戸の男の人と、おしとやかな京都の女の人はいいカップルだ、と、平たく言えばそんな感じです。偏見じゃないか、と思いきや、「伊勢男に筑紫女」「越前男に加賀女」「讃岐男に阿波女」「南部男に津軽女」「京男に伊勢女」・・・と、他にも一杯そんな言葉はあるらしいので、わりと何でもアリな感じですね。

そんなこんなで今回、「幼なじみ」でない、「東男に京女」を書いてみました。（榊の父親は「東男」らしくないですけど・・・）

私自身（恋愛には無縁ですけど）書いてて楽しかったので、このエピソード、次回にももうちょっとありますが、楽しんでいただければ幸いです。

今度こそ、今度こそ、もうちょっと早く投稿するので（^^;）次回もよろしくお願いします。

Mでした。

6．悪夢～その2

さて、話は榊の両親の高校時代に戻る。
初めて知り合い、それからしばらくして会話も増えて、二人はかなり打ち解けている状態だった。

ある日の放課後、2年A組・・・
「それで是枝君、今日『一緒に帰りましょう』って・・・」
「環さんに言われたのか！？」
「う、うん・・・」
それを聞いた5，6人のクラスメイトは口笛を吹いたりしてはやし立てた。
是枝は顔を真っ赤にして、照れ隠しにメガネを拭きはじめた。
「よかったねー、是枝君！」
「いや、部活のこととか一緒に帰りながら話しましょうって言われただけで・・・」
「またまたあ、それだけの訳ねーって！」
「他には・・・最近物騒だからついでにって言ってただけだし・・・」
「頼りにされてるって証拠よ！」
「実際に是枝が環さんを救えるかどうかは別問題だけどな」
「なー是枝、やっぱり俺たちの勧めどおり剣道部に入っててよかったろ？」
「う、うん・・・」
「ねえ、帰りに食事にでも誘っちゃえば？」
「え・・・買い食いはダメだよ？」
「あー、そうじゃなくってさあ！」
「環さんとの交際をものにするチャンスだって言ってんだよ！」
「うーん・・・」

是枝は思案顔だった。

2年B組・・・

環は荷物をまとめ始めた。

「環さーん、帰りに喫茶店寄らない？」

「ごめんなさい、A組の男子と約束してて・・・」

「えーっ、男子？まさかそいつ、意地汚く環さんを狙ってるとかしてない？」

環はくすっと笑って否定した。

「まさか、是枝さんはそんな人じゃないですよ・・・」

「・・・あー、是枝君？・・・なら分かるかも」

「しっかし、よく是枝君に、環さんと話す勇気があったわねー」

環はそんなやり取りを背中で聞きながらA組へ向かった。

「是枝さ・・・」

そう言って教室に入ろうとしたとき、是枝とクラスメイトの会話が聞こえてきた。

「それで是枝君、今日『一緒に帰りましょう』って・・・」

「環さんに言われたのか！？」

・・・

「なー是枝、やっぱり俺たちの勧めどおり剣道部に入っててよかったろ？」

「う、うん・・・」

「ねえ、帰りに食事にでも誘っちゃえば？」

・・・

「環さんとの交際をものにするチャンスだって言ってんだよ！」

「うーん・・・」

やり取りを全部、最後まで聞くと、環は無言で教室につかつかと入

っていった。
是枝達は一斉に、環の方を振り返った。
いつもの穏やかな笑顔ではない。
怒りをあからさまに出すわけでもなく、涙をこぼすわけでもなく、ただ、眉間に少ししわを寄せ、唇をきゅっと真一文字に結んでいただけだった。
それでも、少なくともいつもとは違う、厳しい空気が伝わってきた。
「・・・環さん・・・？」
恐る恐る是枝が声をかけた次の瞬間、環が右手を大きく振りかぶった。

「！」
凄い勢いで平手が顔を打ち、教室にとてつもなく大きい音が響き渡った。
是枝はいくつかの机やイスも巻き込んで、床に倒れこんだ。
叩かれた頬が赤くなっている。しびれるような感覚がする。
いまやクラスにいた全員の注目が2人に注がれていた。
環は、その場から是枝を見下ろしたまま、震える声で喋り始めた。
「・・・私は・・・私は・・・！」
肩で息をしている。
是枝は床に倒れたまま、呆然と環を見ていた。
「自分の思っていることも言えないような・・・意志が弱い、意気地のない人は嫌いです！！」
そこまで言い終わってから、環は、はっと我に返ったような表情をすると、顔をしかめてきびすを返し、そのまま走って教室を出てしまった。

「えーっ！！ケンカしちゃったの？」
歩美は信じられない、という顔をした。
６人は榊の部屋から居間に移動していた。
「こえーな、その姉ちゃん・・・」
元太は水道で傷口を洗っている。
「だから、榊さんのお母さんですってば！」
コナンは、自分が知っている榊の両親の姿を思い出そうとしてみた。
あまりひんぱんには会っていなかったので、顔は良く覚えていない。
確かに榊の母親は、いつもは穏やかだが、厳しい所もあった。
確か、髪型は高校時代とは違って、榊のように後ろで束ねていたはずだ。
もっとも、長い黒髪であることが大きな違いだったが。
父親のほうは―榊の話が正確なら―あまり学生時代から進歩していないらしい。
「それで、それで、どうなっちゃったの？」
はらはらした歩美とは対照的に、榊はのんびり救急箱を取り出している。
「まあ、そうあせるなって！」
「そうよ、現に、２人はちゃんと結婚して一人娘がいるじゃない」
「あ、そっか」
「さーて、こっからが山場だ」
榊はそう言いながら救急箱をテーブルにどんと置いた。

環が出て行った後の教室内はいつになく騒然としていた。
さっきのクラスメイトたちが是枝に歩み寄った。
「ごめんな、是枝・・・」
「俺たちがあんな事言わなかったら・・・」

「ねえ、私たちから環さんに何か言っておこうか？」
是枝は頷きかけたが、首を横に振りなおした。
「違うよ、みんなのせいじゃない」
自分の机にとって返すと、荷物をまとめ始めた。
「みんなが僕の背中を押してくれなかったら、僕は環さんに声もかけられないままだった」
カバンと、側に置いていた竹刀をつかむ。
「僕が、直接言ってくる」
「で、でも・・・」
「僕から・・・僕が、環さんに伝えなきゃ、僕は環さんが嫌いな意気地なしのままじゃないか！」
そう言うと、是枝は走って教室を出て行った。
クラスメイトは顔を見合わせた。

そのクラスメイト達の後日談によれば、恐らくその瞬間が、少なくとも是枝のそれまでの１７年間の人生の中の、自分たちが目撃した場面の内では、最も男らしいところだったという。

一方、とっくに校外へ出た環は、すすり泣きをしながらとぼとぼと歩いていた。

どうしよう・・・私は、ひどいことを言ってしまいました・・・

人通りの少ない路地に出たとき、４、５人の男たちとぶつかった。
「あ、すみません・・・」
涙を拭って顔を上げると、いかにも、といった感じのいかつい顔ぶればかりが並んでいた。
「姉ちゃん・・・ぶつかっといて挨拶もなしか？」

聞こえていなかったのかと思って、もっと丁寧に「申し訳ありません」と言ったが、他の男が、
「謝って済んだら警察はいらねえんだよ！」
と言ってきた。
曲がったことが嫌いな環には、何とも気に入らないセリフだった。
かなりありがちなこれらのセリフ、２つ合わさるとかなり不条理である。
「挨拶もなしか」、つまり「謝れ」、と言われたからそうしたのに、
「謝って済んだら警察なんていらない」とは、矛盾もいいとこである。
これは黙っていられない。が、事は穏便に収めたいところだ。
「それじゃあ、その警察を呼びましょうか？」
心の中で、「そもそも警察に捕まるのはあなた達の方ですし」とつぶやきながら環は言った。
最初の男が優しい口調で歩み寄る。
「なあに、金さえ出せば・・・」
「あいにく手持ちは１円もありませんけど」
相手が終わりまで言う前に即答した。
「帰してくれますか？」
と環が付け加えると、男たちは訝しげに言った。
「へっ、今あんたが金を持ってなくたってほかにも手はあるんだ・・・」
「いまからあんたを誘拐して身代金を頂くか・・・」
「あら、ご存知ですか？身代金目的の誘拐事件の逮捕率はほぼ１００％だって」
冷静に、やめておいたほうがいいですよ、と微笑む。
男たちは顔を見合わせると、舌打ちをした。
「・・・なら、俺たちの憂さ晴らしの相手になってもらうだけだな」
そう言われて、環は男たちの手元に目をやった。
（木刀・・・）

向こうに帰すつもりが無いのなら・・・逃げるしかない。
「逃がすか！」
手首をつかまれた。

その頃、是枝は環を探していた。
「環さーん・・・」
いっこうに見つからない。
もう家に帰ってしまったか、と諦めかけた時、耳に叫び声が飛び込んできた。
「誰か！！」
「・・・！？」

「へへ・・・放さねーぞ・・・」
「助けを呼んでもム・・・だっ！？」
環は手首をつかむ男の手に思いっきり噛み付いた。
「この野郎！」
逆上した男は木刀を振り上げ、そして・・・

ガン！

是枝が竹刀で、やっとのことで木刀を受け止めていた。
「是枝さん！」
「だ、大、丈夫、ですか！？」
いったん相手を突き放すと、少し間合いを取って竹刀を構えなおした。
「是枝さん！危ないです、逃げてください！」
「そ、そういう訳にははいきません！」
「野郎・・・なんだテメー！」
「兄ちゃんよぉ・・・その、女みたいな綺麗な顔に、傷がついても知らねーぞ！！」

「わあっ！？」
是枝は向かってくる男にひたすら竹刀を振った。
「えーっとえーっと、突きーっ！」
「ぐえっ！」
何とか当たったらしい、男はその場に倒れた。
まだ1人倒しただけなのに、是枝は息を切らして、いっぱいいっぱいと言った感じだ。
「是枝さん、もういいです！あなたは関係ないのに！」
「で、でも、まだあの人たち諦めてないみたいです・・・」
他の男たちが向かってくる。
「あなたが怪我してしまいます！是枝さんは逃げて、警察を呼んでください！」
「だめです！」
「どうして！」
「好きな人に、怪我なんてさせたくないんです！！」
「え・・・？」
是枝は、そのまま男たちを倒していった。

「はあ、はあ、・・・最後の一人！」
その最後の一人が、地面に突っ伏した。
「・・・あの、是枝さん？」
「え？」
背中にいる環のほうを振り返る。
「あの、さっきあなたが言ってたことなんですけど・・・」

『好きな人に、怪我なんてさせたくないんです！！』

「え・・・あ・・・そ、それは・・・」
「それは・・・？」
「よくもやりやがったなあああぁ！！」

いきなり、倒れた男たちの中で、しぶといやつが2、3人起き上がって襲いかかってきた。
「わっ！！」
是枝はもう一度竹刀を構えた。が・・・
スパッ！
と、いとも簡単に真っ二つになってしまった。
「え〝・・・し、真剣？」
「へ、へへ・・・これで、どうだぁ～・・・」
もう男のほうも見境がなくなっているらしい。
もう1度刀を振り上げた。

次の瞬間、環が2つになった竹刀をクロスさせ、しっかりと刀を受け止めていた。
「え・・・た、環さん？」
「あら・・・私、薙刀もやってるんですよ・・・得物があって助かりました・・・二刀流も悪くないですね」
「こ、この女ぁ・・・」
「いいかげん帰してくれますか？」
「だ、誰がぁ・・・」
やけになっているのか、竹刀でやられた時に打ち所が悪かったのかは分からないが、ともかく、もう金がどうのこうのいう事は忘れて、目の前にいる高校生をコテンパンにすることしか考えていないのは確かだ。
そんな様子を見て、環は不敵な笑みを浮かべ、突然口調を変えて喋りだした。
「どうしようもない人たちやなぁ、ほんまに・・・！」

「なっ・・・」
「はーっ！」
男を突き放し、刀を慣れた手つきで叩き落すと、切られた竹刀の切っ先を顔に突きつけた。
「うっ・・・」
いつ竹刀が顔を突くか分からない、この状況では他の男たちも動けない。
「・・・約束してくれますか？・・・あなた達の『上』にも誰かお偉いさんがいはるんやったら、その人にも伝えといてください・・・」
環は竹刀を突きつけたまま冷ややかに言う。
「こないな人を脅すようなことを二度とやらずに、まっとうに働くって・・・」
「な、何でお前に・・・！」
「私らはこれから警察に行きますよ？金銭を強要されたって」
男たちをきっと睨む。
「今言うたことを守るんやったら、今回だけ、あなた達の顔の特徴だけは伏せといたります・・・もし、またこないな形で会うようなことがあったら、その時は・・・」
環は、改めて竹刀を突きつけ・・・

「あんたら、覚悟しいや！！」
と啖呵を切った。
「お、おい、お前ら、お、起きろ・・・」
「き、今日のところは、引き上げるぞー・・・」
「っていうか、逃げましょう！」
「撤収ーーーっ！！」
わーっ、と叫びながら、男たちは大急ぎで走り去っていった。
「大丈夫ですか、是枝さん、さっき怪我とかはしませんでしたか？」

振り返って環が言う。是枝は呆気にとられていたが、我に返ったように喋り始めた。
「は、はい、大丈夫ですけど・・・情けないです、また女の子に助けてもらっちゃって・・・」
「え？」
「あ、こっちの話です・・・小さい頃家族旅行に行った先ではぐれちゃって、女の子に道案内してもらいました・・・」
「あらそうなんですか？私は小さい頃、調子に乗って知らない男の子を町中連れまわしてしまったことがあるんです・・・」
環はくすくす笑う。
「僕、あんまり情けなかったんで、よく覚えてるんですよ・・・」
「私、さっきも大人気なかったですね・・・あの時と同じ気分です」

「黒髪の長い女の子に案内されて」
「茶髪のおとなしそうな男の子を連れまわして」

・・・
「「あれ？」」

１０年前、京都・・・
『お父さーん、お母さーん・・・』
『ボク、どうしたん？』
『お父さんとお母さんとはぐれちゃったんだ・・・』
『待ち合わせしとる所はある？』
『はぐれたら清水寺に行きなさいって言われたけど・・・』
『心配せんでもええよ、私が案内する！まかせとき！』

「「あ・・・！？」」
二人は声をあげて笑いあった。

「・・・それで、是枝さん、さっき聞きそびれたことなんですけど、ちゃんと聞かせてもらえますか？」
「え？あ・・・いいんです、気にしないで下さい・・・僕、環さんにはふさわしくないみたいです・・・逆に助けられちゃって・・・」
環はくすっと笑って是枝の手をとる。
「いいえ、そんなことありませんよ・・・私は・・・あなたの言葉を借りるなら、私のことを気にかけてくれる人を、危ない目にあわせたくなかっただけです。」
「え・・・」
「さっきはひどいことを言って、すみませんでした。
あなたは意気地の無い人なんかじゃありませんね、だってこうして、私を助けに来てくれたんですもの」
「環さん・・・」
「来てくれて、うれしかったです・・・ありがとうございました！」
環は満面の笑みを浮かべた。
「・・・さて、警察に通報した後は、学校にも連絡しなくちゃいけませんね」
「え？」
「だって、是枝さんの竹刀がダメになってしまったでしょう？剣道部にちゃんと事情を話さないと」
「あ、そうですね・・・」
「行きましょう！」
環はそう言って、是枝と腕を組んで歩き始めた。是枝のほうは明らかに戸惑っている。
「た、環さん？」
「ねえ・・・あの時は、私があなたの手を引っ張って、むりやり先へ先へと進もうとしてましたけど」
微笑んで、是枝の顔を見上げる。
「これからは、二人で、並んで、一緒に歩いて行きましょうね？」

「・・・はい！」
二人は夕日の差す道を、ゆっくりと、寄り添って歩いていった。

「・・・で、その後は今度こそ、哀ちゃんが言ってたようにとんとん拍子、大学を卒業した後、結婚して広島に住み、そしてこうして東京に移り住むことと、相成ったわけでございます！」
榊が元太の手当てを終え、救急箱をしまうと同時にそう言うと、歩美達はにこにこしながら拍手を送った。

しかし、コナンは厳しい表情を崩さなかった。

歩美は興奮した様子で榊に話しかける。
「すごーい！運命的だね！」
「ハハ・・・歩美ちゃん、よく知ってるねえ、『運命的』って言葉」
榊はけらけらと笑った。
手当てをされている間、物珍しそうに部屋を見回していた元太が切り出した。
「なあ、あの、天井の近くにくっついてるのって何だぁ？」
「ああ、元太君、あれは神棚ですね！・・・何を飾ってるんですか？紙に見えますけど」
「はっはっは、何を隠そう、それはあたしの中間テストの、国語と歴史の満点をとった解答用紙なのだ！」
腰に手を当てて、子供っぽく榊が宣言する。
「へーっ！すごいね！」
「ああやって神棚に飾っておいてだな、それにあやかって、今度は期末テスト7教科で８０点以上を目指そうと思ってな！」
「国語、数学、社会、理科、・・・現国とか古典とかをまとめて国語に数えたりした場合だけど・・・それに期末だから保健体育、音

楽と技術家庭科・・・英語が抜けてるんじゃないかしら？」
「（ギクッ）は、はははは－・・・」
ちなみにこいつ、中間の英語では試験が始まって、『日本語』である自分の名前をかろうじて書いた直後にノックダウン。いや、本当にぶっ倒れて保健室に運ばれたという不名誉な『伝説』を残したらしい。当然、０点。

コナンは、部屋のたんすの上を見ていた。
榊は、あの時、何を見ていたのか・・・
今はそこには何も無いが、一箇所だけ、ほこりを被っていない所がある。
ここに置いてあった何かが、動かされたはずだ。
（・・・・・）

歩美達はそれに気づかず、榊と談笑していたが、哀は不思議そうな顔をしてコナンの背中を見ていた。

「それにしても、お前の母ちゃんって、そんなに美人なのかー？」
「歩美、一度会ってみたいなー・・・」
「今は外出中なんですよね、いつ頃戻られるんですか？」

途端に、榊の表情が曇った。
コナンが、ゆっくりとそちらを振り返る。
光彦達は、あまりにも急な、相手の態度の変化に戸惑いを隠せない。
哀は、黙りこくった榊から、コナンの方へ目線を移した。
（やっぱり、あるのね、『何か』・・・）
コナンは黙っていた。
話を促すつもりは無かった。
ただ、榊が自分の口から言うのを待った。

「今・・・この家には・・・あたし一人しかいないんだ・・・」

誰もが、次に言葉を発するのを躊躇していた。
おずおずと、光彦が口を開いた。
「あの・・・どういうことですか・・・？」
榊は、ふっと力なく微笑んで、語り始めた。

「知ってるか？・・・覚えてるか？一ヶ月前の・・・」

コナンは、無意識の内に、榊が見ていた『もの』を探していた。
・・・そして、見つけた。

それは、神棚の、テストに隠れるようにしてひっそりと置いてあった。

『待ち人来たれ、ってとこだな』

『わかんねーもんだぜ、同じ立場になってみねーと・・・』

『いつ帰るか分からないような人を待ってる時の気持ちなんて、なおさら・・・』

そう、隠れていてよく見えないけど・・・

『あれ』は・・・

あいつの・・・

榊の、家族写真だ。

「一ヶ月前に・・・米花町であった、連続ひき逃げ事件・・・」

榊は、意を決して、真相を語ろうとしていた。

そして、コナン達は聞かされることになる。

先ほどの、幸せに溢れた両親の話とはかけ離れた・・・・

あまりにも残酷な現実を・・・

6．悪夢～その2（後書き）

作者より　はい、前回の後書きで、スピードアップ＆話の核心に迫る、と宣言してました、Mであります。
さて、2つの公約は果たせたのか、検証。
前者のスピードアップは、自分では少しは出来たつもりです。（少なくとも前回よりは！）ただ、次の話はまだ執筆に取り掛かってないのでしばらくかかりそうです。（ー ー；）先に、ご了承ください
ませ。
後者の、話の核心ですが・・・やっぱり榊の両親のエピソードが長く食い込んでしまいました。この話で榊に全部事情を説明させるつもりだったのですが、また次回という事で。

では、話の内容について。核心を先延ばしにする元凶（！）となった、「両親のエピソード」から行ってみましょう（＾＾；）
えー、前回にもちょろっと書いた通り、わたくし恋愛には全く縁がないもので、コナンを読んで鍛えている（？）つもりなんですが、展開が変じゃなかったか、「いい話」になったかは、自分でも疑問です（＾＾；）それから、環が男連中に啖呵を切ってたところの最後のセリフは、某大女優さんの名台詞です。知ってる人は知っている、はず。

さて話の核心について。次回で、榊の事情がが明らかになります。こっから、じわじわシリアスが入ってくる予定です。自分は普段シリアスなことを考えない方なんですが、出来るだけ頑張りますのでよろしくお願いします。「7．悪夢～その3」に続きます・・・
それでは。

7．悪夢～その3

「・・・1ヶ月前の、連続ひき逃げ事件・・・ですか？」
榊が言った言葉を、光彦が繰り返した。
コナンも、蘭から話を聞かされたときは、同じような返事をしたものだ。

『1ヶ月前の、連続ひき逃げ事件？』
『ええ、そうよ・・・』

「そう・・・覚えてるか？」
「うん・・・ニュースでもやってたから」
と歩美が答える。
「確か、たくさんの人が怪我したんだろ？」
「ええ、親子連れがひき逃げされたのを最後に、今は事件は起こってないですけど・・・」
その光彦の言葉を聞いた哀が、顔色を変えて榊のほうを向き直った。
「ちょっと待って！親子連れって、まさか・・・！」

『確か最後に被害にあったのは、３０代の夫婦とその子供の中学生だったよね・・・まさか！？』
蘭は、ゆっくりと頷いた。
『そう、被害にあったのは・・・』

「その親子連れは、あたし達の事だ」
蘭と同じようにゆっくりと頷くと、榊は、確かに、そう言った。

1ヶ月前・・・
朝、是枝家で、三人はテレビを見ながら食卓を囲んでいた。
ちょうどニュースをやっている。
『昨日の夕方、米花町でひき逃げ事件がありました。被害者の会社員の男性は、依然、意識不明の重体です。』
「怖いですね・・・これでもう6件目でしたっけ、環さん？」
榊の父親が、そう言って味噌汁の椀を引き寄せる。
「ええ・・・しかも犯人はまだ捕まってないそうですし・・・榊、新一君なら、犯人を突き止められるのかしら？」
「さあ・・・多分あの兄ちゃんの得意分野は暗号とか密室ですから・・・第一、戻ってきてないし」
画面では、近所の人―お爺さんや親子連れ―へのインタビューが終わり、現場を検証する警官の姿が見られた。
『今回も赤い車が現場付近で目撃されていることから、米花署は、4週間前から続くひき逃げ事件の、同一犯の犯行と見て、数少ない目撃情報を頼りに捜査を進めると同時に、さらなる目撃情報の提供を呼びかけています。』
続いて、スポーツニュースが流れ始めたところで、榊の父親はリモコンに手をかけたが、榊がそれを止めた。
「あ、待ってくださいよ、昨日の野球の結果やるんですから」
『昨日のプロ野球、まずはジャガーズ対ファルコンズの試合から・・・』
「結果なら新聞に載っているでしょ？」
きょとんとする父親に対して、榊は懇願するような目と口調で言った。
「せめて選手が動いているところを見たいんですよ！」
『・・・接戦の末、ジャガーズが1点リードした直後の延長12回

の裏、2アウト2、3塁から、ファルコンズの主砲木暮の、この当たり！』
画面で打球が勢いよく飛んでいる。
『センターオーバーの2点タイムリーヒットが飛び出し、ファルコンズが劇的な逆転サヨナラ勝ちを収めています・・・』
「あ、それからこの後天気予報やりますから、まだ付けておいてくれます？」
と環が言う。画面の向こうでは、すでに指し棒を持った気象予報士が立っていた。
『・・・大陸から高気圧が張り出してきまして、東北地方から関東地方にかけて・・・』
「あら、明日か明後日にやっと長雨が止むんですって！助かりますね、洗濯物が外へ干せなくて困ってたんですよ」
環はそう言いながら魚の切り身を口へ運ぶ。
「そうだ、晴れるんだったら明日どこかへ出かけませんか？」
「本当ですか、父上！」
・・・談笑していた3人は、自分の身に起こることを予想だにしていなかった。

次の日・・・
3人は、雨の中、傘を差しながら歩いていた。
「残念ながら、晴れるのはまた明日みたいですね、母上」
「そのようね」
人通りのあまり無い交差点に出て、信号を待つことになった。
「まあ、買い物に行くだけだから支障は無いと思うんだけど・・・あ、青だ」
「早く店に行って雨宿りしたいですね！」
と言って、榊は早歩きで横断歩道を渡り始めた。
「こらこら、危ないですよ・・・」

その時、車道のほうへ目をやった環は、目を見開いた。
「！」
思わず隣にいた夫の腕をぎゅっとつかむ。
「え？どうしたんですか？」
戸惑った夫の声は彼女には届いていなかった。
（まさか・・・まさか・・・！）
道の遥か彼方、点ほどにしか見えていなかった「それ」は、刻一刻と、こちらへ近づいていた。
環は、背筋が凍るような、嫌な予感を感じ取っていた。

「榊っ！！」
次の瞬間、彼女はたまらず走り出していた。
「た、環さ・・・？・・・・・・！？」
そして、彼女の夫も、「それ」に気がついて、後を追った。

「それ」は、もう、すぐそこまで来ていた・・・

「榊ーっ！！」
「・・・え？」
ただならぬ叫び声を聞いて、榊は立ち止まり、ゆっくりと後ろを振り返った。
「早く・・・！！」
二人は、半ば傘を投げ出しそうになりながら走っていた。
榊は訳が分からず、両親のほうへ歩み寄ろうとしていた。
「・・・父上？母上・・・？」
「ダ、ダメ・・・！！」
環は、息を切らしながら、腕を、ちぎれそうなくらいに振って、歩

いてくる娘を拒んだ。

「逃げてーーーーっ！！」

榊は、両親の腕が自分に伸びてくるのを見た。

そして、その腕が自分の肩に触れた時・・・

その時、榊は初めて気づいた。

―遅すぎたのかもしれない。

視界に飛び込んできたのは・・・

―『赤い車』。

『今回も赤い車が現場付近で目撃されていることから・・・』

一瞬、昨日の今日見ていたニュースの台詞が頭をよぎった。

そして、次の瞬間には、衝撃で体が浮き上がるのを感じた。

地面に叩きつけられた時、目に映ったのは、吹き飛ばされた自分たちの傘と・・・

その向こうへ走り去る赤い車の後姿、そして・・・

アスファルトの上の鮮血。

―自分の血ではなかった。

―いや、いっそ自分の血だった方がどんなに良かったか。

「・・・父上？母上！？」

呼びかけても返事が無い。

雨が、流れる血を余計に多く見せていた。

「・・・くそぉっ！」

榊はそう叫んで、今はもう見えなくなった赤い車が去った方向を睨みつけた。

車が戻ってくる気配は無かった。

人通りも無い。―自分で通報しなければ。

榊は二人を歩道へ運びながら、救急車と警察を呼んだ。

運ぶ時は、引きずらざるを得なかった。

二人は、少しも動く素振りを見せなかった。

「・・・起きて・・・目を開けて・・・！」

榊は救急車が来るまでずっと声をかけ続けた。

それでも、救急車で運ばれるまで、二人がそれに応えることはなかった。

榊はそこまで話したところで言葉を切った。
重苦しい空気が流れている。
「・・・もしかして、探偵団に入ったのは、ひき逃げ犯を捕まえるため・・・？」
「ああ、まあな」
哀の問いかけに、榊はそう答えた。
「そうだったんですか・・・」
「ごめんなさい、気がつかなくて・・・」
「いや、いいよ、その内ちゃんと言うつもりだったし」
「じゃあ、父ちゃんと母ちゃんの仇をとるために・・・？」
と元太が言いかけたところで、榊は力なくふっと笑みを浮かべて言った。
「もしかして今の話聞いて、もう二人が死んでるって思ったか？」
「え？・・・じゃあ・・・」
「入院してるよ、まだ意識が戻ってないけどな」
「・・・それに、今のところこのひき逃げ事件の死者はゼロだ」
全員意識不明らしいけどな、と、やっと口を開いたコナンはそう付け加えた。
「そうだったんですか・・・」
光彦は同じ台詞を言ったが、先程とは違ってほっとした表情だった。
『いつ帰るか分からない人を待つ気持ちなんて・・・』
そう、まだ一命を取り留めているからこそ、榊はコナンに、『いつ帰るか分からない』という言い方をしたのだった。
「ねえ、榊さん、歩美達にできる事があったら何でも言ってね！」
「そうですよ、榊さんは探偵団の一員なんですから・・・」
「ほっとけねーよ！」

榊は歩美達を見て、にっこりと微笑んだ。
「ありがとな！・・・じゃあ、早速頼みたい事があるんだけど・・・」
と言って、榊は近くの棚の中を探し、いくつものビデオテープや新聞の束を取り出した。
「それなんだ？」
「もちろん、ひき逃げ事件の関連の報道を録画したものと、事件の記事が載ってる新聞だよ」
榊は山のようにある資料を小分けし始めた。
「近所駆けずり回って、テープと新聞集めてきたんだ・・・ほら、民放でも番組と番組の間にニュースやるだろ？そういうのも入れて編集してある・・・新聞は、他の記事にも何か手掛かりがあるかも知れないから、切り抜かずにそのままにしてあるよ・・・かさばるけど」
小分けした資料を一人ひとりに手渡す。
「あたしは大体見尽くしたから、今度は皆に見てもらって、何か気づいた点があったら教えて欲しいんだ」
五分の一に分けられたとはいえ、たくさんの資料は重たかった。
歩美達には、それが自分たちの「責任」の重さにも感じられた。強制による責任ではなく、どちらかというと使命感だ。
「うん、歩美がんばる！」
「ごめんな、たまたまウチに寄っただけなのに余計な荷物持たせちゃって」
「いえ、とんでもないです！」
「・・・そういえば思い出したんだけど、そろそろ帰らないと遅くなっちゃうんじゃない？」
哀が携帯の画面を見ながらつぶやいた。
「あ、そういえばそうだな、母ちゃんが心配しちまう・・・」
「じゃあ、そろそろ帰ろ！」

ぞろぞろと探偵団たちが廊下を渡る。玄関のあたりまで見送るといって榊もついてきた。
「・・・榊」
「ん？」
「話は蘭から聞いてたんだけど」
「ふーん？」
「なんですぐに言わなかったんだ？」
じっと、静かだが厳しい顔で尋ねるコナンに、榊はふっと笑みを作った。
「別に隠そうと思ってなんかなかったぞ？聞かれたらちゃんと話すつもりだったし、蘭さんにも、そういう風に言ったんだ・・・そういう風に、って言うのは、『コナンに聞かれたら話してやってください』っていう風に、な・・・心配すんなって！」
にっと笑うと、コナンの肩をつかんで玄関へ押し出した。

そして、一番後ろ―榊は後ろから二番目だったが―でうつむき加減に歩いていた哀の手をとった。
「・・・え？」
哀は戸惑っていたようだった。榊は優しく語り掛けるように口を開いた。
「・・・あのさ、哀ちゃん、今、色々心配事があると思うけど」
「・・・工藤君から聞いたの？」
榊は少し頷いて続けた。
「ああ・・・それで・・・何でもとは言わないから・・・話して欲しいんだ、抱え込まずに」
会って間もない榊からそんな言葉をかけられるのは意外だった。
何か、いつかどこかで感じた、くすぐったいような物を、また感じた気がした。
皮肉っぽい言葉が口をついた。
「・・・それはこっちの台詞だわ」

わたしの事を構う余裕なんてないでしょう、と、暗にそう言っていた。
榊は少し微笑んだ。哀の問いかけに『それは違う』と答える笑みなのか、自嘲的な笑みなのかは、分からなかった。
「・・・まあ、大丈夫だから！お互い様ってことで！」
今度は明るい笑みを見せ、コナンと同じように肩に手を添えて玄関へ向かった。

玄関では、歩美が木の上のソーセキを見つけていた。
「あれ？降りてこられなくなっちゃったのかな？」
「だとしたら一大事ですよ！」
というやり取りを聞くが早いか、コナンはその木に登ろうとした。が、榊が首根っこをつかんで阻止した。
「お、おい何すんだ・・・」
「だーめ、絶対ダメ」
と榊は皮肉っぽく言って、自ら登り始めた。
「おいおい・・・」
「まあ彼女に任せておけばいいんじゃない？今のあなたじゃ枝に手が届かないでしょうし」
（ハハハ・・・）
コナンは悪かったな、と言う顔をした。

数分もしないうちに榊はソーセキを抱えて木から下りてきた。
「木登りうめーなー！！」
オレはそんなに高く登れねーや、と言う元太に、榊は、
「はっはっは！木登りは何年もここや、米花公園の木で練習してきたからな！」
と答えた。

「じゃあね榊さん！」

境内の出口で歩美が振り返って呼びかける。
「ああ、また明日な！・・・あ、コナン、今日は見舞いに行くから事務所(そっち)には行けないって伝えといてくれよー！」
榊が手を振って返事をすると、向こうも手を振り返してきた。
五人の姿が見えなくなったところで、榊はしゃがんで、抱いているソーセキに話しかけた。
「・・・なあソーセキ、あんな危ないところまで登るんじゃねーぞ？」
「なー？」
「まったく、分かってるんだかそうじゃないんだか・・・いいか、人は・・・いや、猫も、自分の限界が今どこなのか、見極めておくってことが大事なんだぞ？もちろん、その限界を乗り越えようとするかは自分次第・・・」
そこまで言って、榊は思い出したように一呼吸置いた。
「・・・そう母上も言ってたんだから」
彼女からは、本当に、色々な事を教えられた。

『榊・・・』

（母上・・・）

『よく聞いて・・・いい？人の気持ちが分かる人間になりなさい・・・
いえ、どうやったってその人にはなれないからちょっと今のは無理があったかしら・・・
そう、人の気持ちを「考える」事ができる人間になりなさい・・・
「同情」とは違うの・・・例えば傷ついて悲しんでいる人がいたらその悲しみに・・・

そう、「共感」。「共感」するの。自分がもしそうだったらどうか・・・』
『わたしは励まして欲しいです』
『そう、あなたは元気良く声をかけてほしいわね・・・
もちろん、悲しい時にどうしてほしいかは人によって違うと思うけど・・・
自分の気持ちを真剣に考えてくれる人がいるって分かるだけでも、
その人はずっと気分がよくなると思うの・・・』
『逆に、僕なんかは・・・』

（父上・・・）

『「あの時」、僕が環さんに対していい加減な気持ちでいたら、
環さんがどう思うか、って、何も考えていなかったからね・・・
すっかり怒らせちゃって』
『あら！その話はやめてくださいよ・・・
あなたを叩いてしまった事を思い出してしまいますもの・・・』

そう言って、馴れ初め話を思い出しては、くすくすと微笑む二人が、
確かにいた。
自分のすぐ側に。

「なあソーセキ、あたしは・・・人の気持ちを考える人間になれてなかったんじゃろうか？」
そう方言交じりでつぶやいた榊に、腕の中の子猫は
「なー？」
と不思議そうな声をあげた。

やっぱり、自分は考えられていなかった気がするのだ。
―もし、身近な人が、突然『遠く』へ行ってしまったら。
考えたくなかったのかもしれない。
他人事だと、心のどこかで思っていたのかもしれない。

榊は、黒猫の頭を優しくなでた。
「・・・あったかいなぁ・・・」
ソーセキはゴロゴロとのどを鳴らして、榊に擦り寄っていた。
「・・・なぐさめてくれる？」
もうしてるよ、とでも言わんばかりに、双眸がこちらをじっと見つめた。
そのように感じただけなのかもしれないが。

空を見上げると、雲ひとつ無い、まさに日本晴れだった。
天気が晴れていたからといって、気分が楽になるわけではなかったが・・・
それでも、「あの日」の天気を眺めて「あの出来事」を想起するよりはずっとましだった。

7．悪夢～その3（後書き）

作者より　どうも、予告通り執筆が遅れました、Mであります。本文長めですが、これでも、短くして次回に回してるのです。（もうちょっと長い予定だったんです）次回も1ヶ月くらいかかりそうな予感・・・（おい！）一応伏線もちょこちょこ入れてるので、次話まで、読み返して暇つぶしをしていただくのも1つの手かと（^^；）

何はともあれ（？）本題に突っ込む事ができました。まだまだ続くので、よろしくお願いします。感想もお待ちしてます。短いですがそれでは。

8．不安

少年探偵団たちは、境内を出てからも会話を交わしていた。
「あんな事があったなんて、知りませんでした・・・」
「ええ・・・ニュースでは被害者の名前があまり出ていなかったから・・・」
「榊さん、自分が事故に遭ったから・・・」
「あの暴走自転車にあんなに怒ってたのかもな・・・」
榊の両親は一命を取り留めているとはいえ、探偵団の口調は自然と重くなった。
そんな雰囲気を振り払うかのように、光彦が声をあげた。
「・・・とにかく！僕たちは榊さんのためにも、他の被害者の方たちのためにも、そして米花町民のためにも、犯人逮捕に全力で貢献しましょう！」
「「「おーっ！！」」」
歩美達はその場に立ち止まって、拳を高々と突き上げた。

哀とコナンは、他の3人と別れてしばらく無言で歩いていたが、哀がおもむろに口を開いた。
「・・・あの子、大丈夫かしら？」
「・・・榊の事か？・・・『大丈夫』って言うと・・・どういう風にだ？」
「・・・まあ、とりあえず精神面で、っていうことにしておくけど」
「あいつ、『心配するな』って言ってたし、あいつがそう言うならそうなんじゃねーか？」
「あら、鵜呑みにするのね」
「まあ、あいつは昔から嘘をつかない・・・というか、つけないようなやつだからなー・・・」
「・・・人って、そんなに変わらないものかしら？」

そう言われて、コナンは蘭の言葉を思い出して思わずどきっとした。

『人って、変わっちゃうのかな・・・』

「・・・何かあったのか？」

急に深刻な顔をして自分の顔を覗き込んでくるコナンに、哀は一瞥を投げて答えた。

「そうね・・・さっき握ってきたあの子の手がひどく荒れてて・・・家事で苦労してるんじゃないかって思っただけ・・・だとは思うんだけど」

「はあ？」

まだ何かあるのか、と素っ頓狂な声をあげるコナンをよそに、哀は思案を巡らせていた。

自分でも何が引っかかるのか、まだ分からなかった。

けれど、人を安心させようとする榊の言葉に、『何か』を感じたのは確かだった。

『・・・まあ、大丈夫だから！お互い様って事で！』

思えば、あれは自分にかけられた言葉だったのか、それとも、榊自身を奮い立たせるための言葉だったのか・・・

どちらにしても、人に安心を与える言葉であるはずなのに・・・

既視感だろうか、何か、言い知れぬ不安を覚えた。

（―何？）

しばらく考えたが、納得できる答えはまだ出そうになかった。

今のところ言える事は―考えてみて思いついたことは、まだ一つしかなかった。

これが答えなのかどうかは、まだ納得できない。まだ、『何か』ある。

でも、何かの取っ掛かりにはなるかもしれなかった。

その考えを、―彼に―いつもの様にしまいこむ気分には、なぜかなれなかった。

「・・・人前では平静を装って、陰で泣いてた人を・・・もう、あなたは一人知ってるはずよね？」

それが、ようやく口を開いた哀の、『答え』への鍵。

そして、阿笠邸に入っていく前にコナンに向けた最後の言葉だった。

コナンは何も言わずに、玄関のドアが閉められるのを見ながらただ立ちすくんでいた。

しばらく後、コナンは『ポアロ』の横の、事務所につながる階段を登っていた。
大人のそれよりずいぶん軽い足音が歩くたびに響いた。
それが聞こえたのか、事務所のドアの擦りガラスに人影が映った。
ふと、コナンは先程哀にかけられた言葉を反芻した。
『人前では平静を装って、陰で泣いてた人・・・』

『人って、変わっちゃうのかな・・・』
『コナン君が新一だったら・・・よかったのにね・・・』

『おまえはいつも泣いているな・・・』
『いけませんか？』
『いや、思い出していたんだ・・・おまえによく似た女を・・・』

『平静を装って陰で泣いていた・・・バカな女をな・・・』

『あなたは一人知ってるはずよね？』

哀の目が、『言わなくても分かるわよね？』と試しているように見えた。

もちろん、コナンには、誰の事を言いたかったのか分かっていた。

痛いほどに。

「コナン君、おかえり！」

蘭が、先にドアを開けて、笑顔で立っていた。

事務所の中には、夕日が差し込んでいた。

机では、小五郎がいつものように吸殻や空き缶を散らかしたまま眠りこけていた。

「榊ちゃんは？」

「お見舞いに行くんだって・・・・」

「そう・・・ところで、それ何？学校の図工で何か作ったの？」

「ううん、新聞とビデオテープ・・・ひき逃げ事件のニュースの」
「もしかして、榊ちゃんが用意したの？」
「うん、近所の人にも協力してもらったって言ってたよ」
「そう・・・」
蘭は、ビデオテープの一つを手にとって眺めた。
その目は、どこか寂しそうだった。
「・・・探偵団の皆と、手分けして調べることになったんだ！気がついた事があったら教えてほしいって、榊ねーちゃん言ってたよ」
コナンは、目一杯の子供の声で、明るく言った。
蘭は、明るい顔に戻って、コナンの方を向き直った。
「・・・分かった。じゃあ、わたし、新聞を調べてみるわ。コナン君に読めない漢字があるかもしれないし・・・コナン君はビデオだけど、あんまり近くで見過ぎないようにね！」
「はーい！」
大量の資料がテーブルの上に置かれた。

デッキにビデオを入れて再生すると、ニュース番組の映像が流れ始めた。
『・・・今日の夕方、米花町の路上で、帰宅途中の、２８歳の女性会社員が倒れているのが発見されました。』
日付からして、２件目の事件だった。あちこちのニュースを寄せ集めて編集したので、順番はバラバラらしい。
『女性は全身を強く打ち、意識不明の重体です。』
警察―鑑識の人達らしい―が現場検証をしている様子に続いて、現場がアップで映し出された。
染み込んだ血痕が目立つアスファルトを、小雨が打っていた。
『ええ、そりゃ怖いですよ！すぐ近くですからね！私、よくこの辺を猛スピードで走る車見るんですけどね、今日も見ましたけど、ありゃあ危ないですよ！』

画面の横には『近所の人は』と言う字幕が付いており、おばちゃん―声と身振り手振り、派手な傘のしたからのぞく体型からそう思われた―が、早口でまくしたてていた。
『・・・警察では、ひき逃げ事件と見て・・・』
画面は、再び鑑識の人たちの映像に戻った。

「・・・あったわ、４件目の事件」
新聞の社会面を開いた蘭が声をあげた。
ビデオがＣＭに入っていたので、コナンは蘭の方を振り返った。
「被害者は、下校途中の小学生の女の子。いつもは友達と帰るけど、その日は一人だったんですって・・・この４件目や、この前に起こってる３件目の事件辺りから、同一犯の、連続ひき逃げ事件って位置づけられるようになったみたい。」

テレビではまだＣＭが流れていた。
『１２月２５日月曜日は、６時４０分から、『劇場版仮面ヤイバー　ジャガイモ女王の鎮魂歌』を放送！よい子の皆、スタート時間に注・・・』
恐らく、「注意しよう！」と続くのだろうが、映像はそこで途切れ、別のＣＭと不自然につながっていた。
続いてニュースの映像が流れ始めたが、同じく２件目のニュースだったので、コナンはあまり注意を向けずに蘭が新聞記事を読み上げるのを聞いていた。
先程と同じおばちゃんの声が聞こえてきた。こういうインタビューは使い回されているらしい。
『・・・次のニュースです。サッカー日本代表が・・・』
と、キャスターが言ったところで、再び映像が途切れた。
静かなＢＧＭとともに、電車や新幹線の映像が目に飛び込んできた。
『・・・旅に出かけてみませんか？　ＴＲ東日本』
別の局のニュースが始まった。

「これは・・・5件目の事件ね」
画面の右側で合羽を着たレポーターがマイクを持って立っていた。
『こちら現場です！えー、被害者の男子高校生は、今日の4時半ごろ、友達の家に遊びに行くと言って自宅を出ました・・・』
レポーターは手を横断歩道に向けながら歩いた。
『しかし、5時になっても来なかったため、友人や家族が探したところ、この路上で倒れているのを発見されました。』
レポーターが指し示した道路がライトで照らされる。
現場は、血痕を除けば、人通りの少ないごく普通の路地だった。
画面は、近所の人へのインタビューに切り替わった。
自転車に乗った女子学生や、こうもり傘をさしたサラリーマンらしき人が答えていた。
続いて、『家族は』という字幕が現れ、母親らしき人のインタビューが流れた。
『・・・血を流して倒れている息子を見た時は・・・頭が真っ白になりました・・・その・・・幸い、命は助かりましたけど・・・まだ、意識が戻らなくて・・・』
女性は、手に持ったハンカチを握り締めた。
『・・・犯人には、一刻も早く自首してほしいです』

「・・・ねえコナン君」
テレビ画面を見つめていた蘭が、語りかけるように口を開いた。
「・・・榊ちゃんも、待ってるのよね」
コナンは、蘭の方をちらっと振り返ると、
「うん・・・」
と、ゆっくりと答えた。

『わからねーもんだぜ、本当にその人の立場になってみねーと・・・

『

『いつ帰ってくるか分からない人を待つ気持ちなんて、なおさら・・・』

そうだ・・・あの時榊が自分の肩越しに見ていたのは、家族写真・・・

『いつ帰るか分からない』・・・

榊も含め、被害者の家族は、そんな不安を抱えているのだろう。

突然、『遠く』へ行ってしまった大切な人・・・

『帰ってこないかもしれない』

そんな状況と、今も隣り合わせだというのに・・・

『聞かれたらちゃんと話すつもりだったし・・・』

どうして、あの時すぐに気付かなかったのだろう。訊いてやれなかったのだろう。

『人って、そんなに変わらないものかしら?』

『人前では平静を装って、陰で泣いてた人・・・』

こんな状況に置かれていたとは、考えもしなかった。

榊の、前と変わらない態度を見ている限りは。

『・・・自首してほしかったからじゃねーのか？』
きっと、榊“も”待っているのだ。
犯人が自首する事も・・・
両親が『帰って』来る事も。

画面では、再びレポーターが現れていた。
『以上、ブシテレビのシオジがお伝えしました。』
『只今入ったニュースです。杯戸町のコンビニに押し入り白のワゴン車に乗って逃走していた強盗が、先程逮捕されました、繰り返します・・・』
蘭が、ソファに座るコナンの肩にそっと手を置いた。
「新一なら・・・捕まえてくれるかな？」
「・・・」
コナンは、蘭を見上げた。
また、寂しそうな顔をしていた。
「怖いよね・・・自分の大事な人が、確かに、すぐそこにいるのに、言葉も交わす事ができないなんて・・・」
榊と、意識が戻らない榊の両親の事を言っているのだろう。
けれど、「コナン」・・・「新一」にとっては、突き刺さるような言葉だった。
コナンは、何も言えなかった。
（―お前も、なんだよな・・・）

蘭も・・・と考えた時、ふと思い当たる事があった。

『家に電話かけても留守だし、どこに行きやがったって思ってたら・・・』

もしかして、榊は自分のことも待っていたのではないか、と。

もっと言えば、肝心な時にいなくなった自分を恨めしく思ってはいなかったか、と。

薄暗い廊下で、受話器を持ったまま電話の前で立ち尽くす榊の姿が目に浮かんだ。

『けっこー辛いんだよ、待ってるだけって・・・』

—すぐ側にいる自分は、蘭がどんな気持ちでいるか、分かっていたつもりだったけど・・・

—本当は、まだ分かってやれていなかったのか？

（・・・そうなのか？蘭・・・榊・・・）

—そんな、悲しい顔をするな。

―頼む。

蘭がふと思い立ったように話しかけた。
先程の表情は、もう消えていた。
「そういえばコナン君、1件目の記事が載った新聞が見当たらないんだけど、どこにやったか分かる？」
「ううん、知らないよ・・・ボクの分には最初から入ってなかったのかな？」
2人の後ろで、今しがた起きたばかりの小五郎が大きな伸びをしていた。
「ふあ～あ・・・そういえばまだ新聞見てなかったな・・・」
と言って、目の前の新聞をめくり始めた。
「えーと、『車上荒らし今月に入って多発　あなたの車は大丈夫？』・・・へっ、どーせ俺は車持ってねーよ・・・『最新ゲーム機でパ

ニック』・・・そこまでして買いたいのかねぇ」
ぶつぶつと独り言を言いながらたばこに火をつける。
「それから・・・？『地元きっての大富豪』・・・あのじゃじゃ馬の家とは違うのか・・・『車を1台盗難されるも被害届は出さず』？へっ、車1台どうって事ねーってか？いい気なもんだぜ・・・えーっと、テレビ欄は・・・『青い疑惑』・・・あれ！？ヨーコちゃんのドラマ再放送してんのか！？・・・って、これ2ヶ月前の新聞じゃねーか！」
「あー、お父さん、それよ！わたしが探してたやつ」
今日の新聞は休みよ、と言いながら蘭が新聞を受け取る。
手持ち無沙汰になった小五郎はまた寝入ってしまった。

蘭は記事を探しながら、榊のことを考えていた。

―どうしても、自分と重ね合わせてしまう。

（―ちょっと、自分勝手かな・・・？）

「・・・あった、1件目の記事・・・被害者は70歳のおばあさん・・・現場は人通りのない三叉路・・・」
「蘭ねーちゃん、こっちも一件目の事件だよ」
テレビの画面から、インタビューを受けていたOLの姿が消え、現場の映像が流れ始めた。
『事故の前後、猛スピードで走る不審な車が目撃されている事から・・・』
カメラは三叉路に沿って動いていた。車と同じ進行方向らしい。
手前から、くっきりと伸びたブレーキ痕。
右側の横断歩道にかけて、血痕も見えた。
『不審な車は、奥穂町で目撃されています・・・』

それから後、２人はしばらく資料に目を通していたが、今日中に全部は無理なので、また明日ということになった。

次の日、少年探偵団は帝丹中の昇降口にいた。
榊を待っている間、それぞれの成果について話し合った。
コナン以外の４人も、まだ全部は調べ切れていないらしい。
「想像以上に多かったですねぇ」
「疲れて肩凝っちまったぜ・・・」
「でも、榊さんはあれを全部見て、調べたんだよね・・・」
歩美がぽつりと言った。
５人は顔を見合わせて黙り込んだ。

「よう！待たせてごめんな！」
不意に、そんな雰囲気を破るような明るい声が飛んできた。
振り返ると、榊が手を振って走ってきていた。
「いやー、サッカー部の連中が助っ人になれってうるさくってよー！」
にこにことする榊に、元太達は少々呆気に取られていたようだった。
けれど、コナンは厳しい顔を崩さなかった。
そして、哀はそんなコナンの横顔から、榊へとゆっくり視線を移していた。

「・・・それで、今どんな感じ？」
６人は歩きながら話していた。
「まだ全部調べられてないの、ごめんなさい・・・」
榊は歩美の肩をぽんぽんと叩いた。
「もう、謝る事ないって！皆に調べてって言ったあたしが言うのもなんだけど、皆が真剣に調べてくれてるって分かっただけでも、あ

たしは十分嬉しい」
歩美の顔が、少し明るくなった。

しばらく歩いていた頃、哀が榊と並ぶように歩き始めた。
「？・・・どうかした哀ちゃん？」
「・・・是枝さん」
「ん？」
榊はにっこり笑って次の言葉を待っていた。
哀は一呼吸置くと、榊だけに聞こえるように言った。
「・・・この後、家に寄ってくれる？」

8．不安（後書き）

作者より　ああ、何とか1ヶ月以内の投稿成功。この回、かなりシリアスになりました。シリアスな話は、一行一行、深く考えながら書く必要があるなーと思っています。何しろ今回はモノローグ目白押しですから・・・（ー ー；）読みにくかったらごめんなさい。心理描写は大変で、どっと疲れました。
その反動なのか、このシリアスな話の中に2、3箇所ほど悪ふざけが・・・（さてどこでしょう？）（＾＾；）それから、原作からの台詞の引用も結構あります。コナンフリークの方は息抜きのつもりで探してみて下さい。
さて、この「ひき逃げ事件編」は、「タイトル2文字」に挑戦してます。・・・って、「悪夢」なんかは、「その1」とか付けちゃって、2文字じゃなくなってますが・・・
で、今回のタイトル。この回の、蘭と榊の様子を表したくて、「シンクロする」「ダブる」って言う意味のタイトルを付けたかったんですが、辞書を引いても、しっくりする訳語が見つからず・・・（ー ー；）と言うわけで、今回のは別の路線の妥協案です。哀と榊とコナンと蘭と、被害者の家族の気持ちという事で・・・
ちなみに、次回のタイトルはもう決めてありますよ。

それでは、書き始めたばかりの次話の投稿に向けて頑張ります。（作家の皆さん、どうすれば投稿スピードがアップするんでしょう？（T　T））
それでは、Mでした。

9．伝言

その日の夕方―先程の阿笠邸への訪問からしばらくして―、榊は事務所へやってきた。
一足先に帰っていたコナンは、早々に宿題を済ませたらしく、片手に新聞、片手にリモコンを持ってソファに座っていた。
画面に映し出されているのは、もちろん例のニュースだった。
ちょうど1件目のニュースが終わりかけていた。
『・・・続いて、気象情報です・・・日本列島は低気圧に覆われ、特に関東地方ではこれから1ヶ月ほど先まで、降ったり止んだりのぐずつく天気と・・・』
「・・・よお榊」
コナンは、頭だけ榊の方へ向けた。
「蘭さんは部活で遅くなるんだったっけ？」
「ああ・・・」
「じゃあ待ってろ、あたしが腕振るうからな！」
と言って、榊は腕まくりをした。
「・・・なあ榊」
「ん？」
「さっき博士ん家に行ったみてーだけど、灰原から、特別な話か何かあったのか？」
それを聞いた榊は一呼吸置いて、ゆっくりと口を開いた。
「・・・そっか、分かってたのか・・・実は・・・」
「実は？」
不意に、榊がカバンの中に手を突っ込み、『コレが目に入らぬか』と言わんばかりに、さっと何かを取り出した。
「哀ちゃんから、『ハンドクリーム』とかいうヤツを貰っちゃった☆」

―脱力。
ドタッ、という音とともに、コナンがソファから転げ落ちた。
ついでに、バサバサ、とか、ガタガタ、とかいう音とともに、テーブルの上の資料も崩れ落ちた。
「な、な・・・なんだよ、それ・・・」
「なんかさー、手荒れに効くんだって！」
「・・・じゃなくて・・・」
（そーいや灰原、そんな話してたけど・・・）
「じゃ、早速台所を拝借～」
ご機嫌な様子で台所へ歩いていく榊。
コナンはやっとの事でソファに這い上がっていた。

ビデオは、三件目の事件に入っていた。
『昨日の午後４時ごろ、米花町の路上で、近所に住む４７歳の主婦が倒れているのが発見されました。女性は病院へ運ばれましたが、未だ、意識不明の重体です。』

「いやー、哀ちゃんて、本当にいい人だよなー！」
『いい子』ではなく、『いい人』と言うあたりに、事情通振りが伺える。
もちろんコナンが話した事ではあるが。
「ああ、ちっともかわいくねーけどな・・・」

画面では、ピンクの傘を差した小さい女の子と、彼女に仰々しく差し出されるマイクが映っていた。
『あのね、赤い車さんが走るトコなら、見たことあるよ・・・』
『そう、じゃあこういう事故がお家の近くで起こってて、どう思う？』
『うん・・・怖いと思う』

女の子は恥ずかしがっているのか、たどたどしく答えていた。
「へぇ？かわいくないのは、そんな事言う兄ちゃんの方じゃないのかなー？」
と、からかいぎみに言って、榊はゲラゲラと笑っていた。
「ああ、ついでにお前も未だにかわいくねーって事が分かったぜ」
「・・・それ以上言うと包丁が飛ぶぜ」
台所で、榊が包丁の握られた右手を高々と挙げるのが見えた。
「おいおい・・・そこがかわいくねーっての・・・ってーか物騒だろ・・・」
と、そこまで言った所で、笑っていたコナンの表情が固まった。
―『いつもと同じような』榊のペースに乗せられている自分に気が付いた。

『人って、そんなに変わらないものかしら？』

ビデオが、7件目―『最後の事件』に入った。
コナンは、反射的に停止ボタンを押していた。
映像、音声が途切れたので、それは榊にも分かったようだった。
「・・・いいんだよ、気、遣わなくて」
再生ボタンを押すと、キャスターが事件の様子を伝えていた。
『今日の夕方、米花町で・・・』

『平静を装って、陰で泣いていた人・・・』

―榊に限って・・・と、そんな事は想像もしていなかった。
―でも、やっぱり・・・
―榊も、泣いているかもしれないのか？

ソファから見えるのは、榊の背中だけだった。
コナンは音を立てないようにソファから降りると、ゆっくりと台所へ歩き出した。

と、その時榊の右手が動いた。

「うわっ！？」
菜箸がすぐ横を掠めていった。
「な、な・・・」
床に落ちた菜箸と榊を交互に見て、うろたえるコナンに、榊は事も無げに言った。
「バーロ、気配ぐらい分かるっての！女の背後に忍び寄るとはいただけねーなぁ・・・まあ、菜箸は包丁より安全だろ？」
それから、ほんの少しコナンのほうを振り返った。

「・・・あたしが、泣いているとでも思った？」

「え？」
コナンは大きく目を見開いて榊の顔を見つめた。
榊はふっと笑みを浮かべると、また向き直って料理を始めた。
「心配すんなって言ったろ？・・・あたし、決めたんだ・・・父上

と母上が『帰ってくる』まで泣かない・・・涙は落とさないって・・・別に、願かけてるわけじゃないけど」
「・・・そうか・・・」
コナンはそう呟いて、ソファへ戻っていった。

「・・・なあ榊、オメー、人の気持ちなんて、その人の立場に立ってみねーと分からない、って言ってたよな？」
「・・・で？」
「あれから色々考えてみたんだけどさ・・・やっぱり、伝わってきちまうんだ、側にいると、痛いぐらいに・・・」

『新一がいなくなったぐらいで・・・夜も眠れないんだもん・・・』

『一人にしないで・・・』

『コナン君が新一だったら・・・よかったのにね・・・』

ぼーっと考え事をして遠くを見るような目をしたコナンに、榊は鋭い指摘をした。
「蘭さんのことだろ？」
「え？あ、ああ、まあ・・・」
図星を突かれたコナンは少し顔を赤くして答えた。
「・・・兄ちゃんがそう言うなら、そうかも知れないな」
「あん？」
「だって、兄ちゃんは蘭さんと幼馴染で、あたしよりずーっと付き合いが長いだろ？だから、お互いの事がよく分かる、っていうのも、納得できない事はないなーって思ってさ」

コナンは照れて頭を掻いていた。

「それよりさあ、あたしが言うのもなんだけど、あんまり無理するなよ？」

「分かってるって」

「本当かぁ？・・・それから、例の“カラス”の事も！」

「カラス・・・？・・・ああ、『真っ黒』だからか」

コナンは乾いた笑いを浮かべた。

「そうそう・・・あたしに協力できる事があったらバンバン言ってくれよ？」

「・・・別にお前がやる事ねーだろ？」

「あのなぁ、『毒を食らわば皿まで』って言うだろ？一度関わった面倒な事は、最後―けりがつくまでとことん関わり通す！」

「・・・オレは本当に『毒』を食らっちまったけどな」

「それ、面白くねーぞ」

「ハハ・・・」

「まあ、兄ちゃんの用心棒ならいつでも買って出るから！」

「・・・いらねーよ、んなもん」

「いーや、絶対要る！兄ちゃんもともと、運動神経はともかく、腕っ節はないだろ？今ただでさえ縮んでるんだから、気をつけないと『普通の』犯人にもやられちゃうじゃねーか！」

「また物騒なこと言いやがって・・・」

悪かったなー、と榊はニヤニヤ笑ってまな板に向き直り、野菜を切りにかかっていた。

ふと、考え事をしながら。

―そう、『帰ってくる』まで涙は落とさないと決めた・・・

―“それが、どんな形であっても”・・・とは、コナンには言えなかった。

榊は、今日哀に言われたばかりの言葉を思い出した。

―阿笠邸・・・

哀は、リビングに榊を通して、ソファに座らせた。
「あれ、博士は？そう言えば最近会ってないんだよなー・・・」
「ああ、博士なら新しい発明品を作るとか言って奥の部屋にこもってるわ・・・」

しばらくして、哀がコーヒーセットを持って戻ってきた。
「ごめんなさいね、あなたが好きな抹茶は切らしてるの」
と、皮肉っぽく冗談を言うと、榊は苦笑いした。

「ミルク入れる？」
「うん、ありがと・・・で、話って何？」
「そうね、色々あるけど・・・まあ、まずはコレ、受け取ってもらえる？」
絵の具チューブが巨大化したようなその容器を、榊は物珍しそうに見た。
「何これ？」
「使ったことないかしら？ハンドクリームよ、手に塗ると手荒れに効くの」
「本当！？ありがとう！手が痛くって困ってたんだよ」

榊はそれをカバンにしまうと、ミルク入れを手に取った。
「どういたしまして・・・さて、何から話そうかしら」
哀は先にコーヒーを口にすると、おもむろに話し始めた。
「・・・あれは、バレンタインデーの少し後だったかしら？」
「あー、バレンタインって、あの、女の子が男にチョコあげるってやつ？あたしだったら和菓子あげるけどな」
「そう・・・それで、工藤君はあの子が作ったチョコを貰ったんですって・・・もちろん、『工藤新一』宛のを、『工藤新一』として、ね」
「へえ・・・」
兄ちゃんもなかなか粋な事をするじゃない、と榊はニコニコと笑った。
「でも、その後工藤君は『何も言わなかった』んですって」
「へ？『何も』って言うと・・・その・・・告白とか、そういう事を？」
榊はミルク入れを握ったまま、素っ頓狂な声を出した。
「多分ね・・・博士が、『それ相応の言葉をかけたら良かったのに』って言ったんだけど、そうしたら工藤君・・・」

『ヘタな事を言ってみろ、あいつは今よりもっと会いたくなっちまうじゃねーか・・・』

『待ちぼうけをくらわさせているその憎々しい男は姿を現すことができねーっていうのによ・・・』

「・・・ってね」
「ふーん・・・？」
兄ちゃんらしい言葉かもなー・・・と、榊はやや怪訝そうな顔をし

てミルク入れを傾ける。
「・・・それで、その後更に続けて、工藤君はなんて言ったと思う？」
「ん？」

『もうあいつの涙は見たかねーんだよ・・・』

『たとえあいつの中から、オレの存在が消え失せることになってもな・・・』

榊の表情は、途端に固まった。
哀は一呼吸置いてコーヒーをすすり、榊の出方を伺っているようだった。

「・・・ミルク、こぼれてるわよ」
「えっ！？あー・・・！！布巾ある！？布巾！」

「・・・ホント、『彼らしい』言葉だと思わない？あなたも、付き合いは長いだろうから分かると思うけど・・・」
「・・・ああ、そうだな・・・」

「・・・確かに、変わってねーや」
榊は、哀の前でも言った言葉をもう一度小さく呟くと、力を入れて、包丁の刃が刺さったかぼちゃを叩き割った。

『今、私が言いたい事二つ・・・分かるかしら？』

―分かるよ。

『一つ目は・・・』

―昔からそうだったから・・・

『彼って、自分の事を構わないで、人の事ばっかり気にかけるタイプよね？』

『・・・彼が、無理をしていないかどうか、しっかり見ておいてほしいの』

『・・・例えば、典型的な例で言えば、組織の事や・・・あの子の事とか』

『勿論あなたの“事件”の調査を止めようとしてる訳じゃないって事は、付け加えておくわ』

「何が『自分がいなくなってでも泣かせたくない』・・・だ」

榊はコナンに聞こえないような小さな声で呟いていた。

「・・・兄ちゃんがいなくなったら蘭さんはもっと泣くに決まってるじゃねーか・・・バカ」

そう言って、苛立たしげに、まな板の上のかぼちゃを、音を立てて叩き切っていた。

間もなく、蘭が階段を駆け上がってきて、

「ただいまー！」

と勢いよくドアを開けた。

「お帰り、蘭ねーちゃん」
コナンが先程と同じようにソファに座ったまま首だけ回して答えた。
「まったくもう、お父さんてば、さっき電話したら『蘭ちゃ～ん、今日は麻雀仲間と食うから晩飯はいらにゃいよーん♪』とか言っちゃって・・・あれは、もう飲んでるわね、絶対」
（ああ、道理でいないと思った・・・）
コナンが机の方を見ると、確かにそこにいるはずの小五郎の姿は無かった。
散らかった机はちっとも変わっていなかったが。
「え？もう3人分作ってるんですけど」
台所から榊の素っ頓狂な声が飛んできた。
「あらそうなの？・・・待ってて、私も手伝うから」
蘭はてきぱきとエプロンを着けると台所へ急いだ。
「わあ！腕上げたわね、榊ちゃん」
「ええ、まあ、自炊してますから・・・」
榊は照れて頭を掻いた。
「・・・榊ちゃん、お父さんとお母さんの具合はどう？」
「特に変わりないです、まだ意識は戻ってなくって」
「そう・・・」
「それで、余った料理なんですけど・・・どうします？だれか呼びますか、来て、食べてくれそうな人。蘭さん、心当たりありませんか？」
蘭は少し考えておもむろに携帯を取り出した。
「・・・アイツ、近くにいるかなぁ」
「・・・誰ですか？それ」
「・・・『大バカ推理の介』」

その言葉があまりに端的に、強烈に『その人物』を表していたためか、榊は思いっきり吹き出して笑い出し、しまいにはむせて咳き込んでいた。

「あ・・・はーはー・・・兄ちゃん・・・ケホ、の、電話番ご・・・ひー、し、知ってるんですか？ははは・・・！」
「うん、そうなのよ、この前教えてもらってね・・・」
「へー・・・」
榊は咳き込みながらも、したり顔でコナンの方を見た。
コナンは顔を赤くして背けた。と同時に、自分の携帯の電源が切れていることを確かめていた。
「えーと、新一、新一・・・と」
蘭はメモリからその名前を探すと、ボタンを押した。

「・・・やっぱり、ダメみたい・・・」
蘭の顔に、寂しさが浮かんだのを、コナンは見逃さなかった。

「・・・ああ、そっか！榊ちゃんがここで食べていけばいいじゃない！」
蘭は携帯電話を握ったまま榊の方を向いた。
「え？いいですよ、この材料費は毛利家の家計から出てるのに・・・」
「遠慮しないで！」
「・・・じゃあ、お言葉に甘えて・・・」
と言いかけた所で、榊の目に、まだ切れていない蘭の携帯が留まった。
「・・・それって、まだ兄ちゃんの携帯とつながってます？」
「え？うん、留守電になってるけど・・・」
「じゃあ、ちょっと借りていいですか？」
榊は蘭から携帯を受け取ると、横を向いて咳払いをした。
それから、大きく息を吸い込んで・・・

「早く帰ってきなさいよ新一ぃーーーーーーっ！！！」

耳をふさぎたくなるような大声が部屋に響き渡った。

そう、榊の口から、『蘭の』声が。

「さ、榊ちゃん・・・」
呆気にとられた蘭・・・とコナンをよそに、榊は満足げに電話を切った。
「うーん、イマイチ迫力が足りなかったか・・・まあいいか！」
「そ、そこまでしなくていいのに・・・」
苦笑いする蘭に、携帯を返す。

「『馬鹿につける薬はない』っていうくらいだから、これくらいが丁度いいですよ！」
榊は事も無げにけらけらと笑う。
「これは、きっと効き目があると思いますよ！なんたって、今回の『ソーセージ』は・・・」
「『メッセージ』！」
コナンがすかさずツッコミを入れる。
「あ、そうそう、『メッセージ』・・・は、『2人』分の気持ちを込めたんですから！・・・な、コナン？」
と言って、コナンににっこり笑いかける。

「・・・」
コナンはしばらく目をぱちくりさせていたが、やがて、悟ったようにふっと笑みを浮かべた。

―分かったよ。

「・・・蘭ねーちゃん！ボク、上の部屋で宿題してくるね！」
「あ、うん！」
コナンは満面の『子供』の笑みを蘭に投げかけ、3階への階段を駆け上った。
3階のドアが閉まった音がすると、榊もおもむろに蘭に話しかけた。
「じゃあ、私も上に行ってきます・・・コナンが『宿題教えて』って泣きついてくるかもしれないし」
蘭はくすっと笑って榊を見送った。

榊は、足音を立てないように階段を登った。
もちろん、コナンが宿題をとっくに済ませていた事は分かっていた。
ゆっくりとドアを開け、部屋の中に入ると、コナンは携帯を取り出していた。

―期待通りの行動。

変声機も取り出したのを確認すると、榊は黙ってコナンににっこりと笑いかけた。
コナンもそれに応えるように笑みを浮かべると、一呼吸置いて携帯のボタンを押し始めた。

『・・・もしもし!?』
蘭の慌てたような声が聞こえてきた。
「よお、蘭・・・」

榊が、久しぶりに聞く新一の声。

榊は、またゆっくりと、音を立てないように部屋を出た。
階段を下りると、ほんの少しだけ事務所のドアを開けた。

「どうしたの?珍しく電話なんかかけてきちゃって」
『バーロォ!“どうしたの”って聞きたいのはこっちだよ!』
「なによ!」
『なんなんだ、あの留守電!?』
「・・・あはははは!びっくりした!?あれ、実はねぇ・・・」
言葉を交わす蘭は、とても楽しげだった。

榊は満足げに微笑むと、ドアを閉めてもたれかかった。

『それから、二つ目は・・・』

哀からのメッセージ・・・

「2つ目は、蘭さんを笑顔にするために、励ますこと・・・だったよな」

『あんまり沢山やることがあったら、彼、疲れるでしょ？』

―だから、あたしが協力する。

「言われなくても・・・」

と言って、背中をドアに預けたまま、ほんの少し部屋の方を振り返った。

「ここに来たのは、もともとそのつもりだったんだけどなあ」

榊は苦笑いをすると、また向き直って、空を見るともなしに見た。

9．伝言（後書き）

作者より　どうも、２００７年１発目の投稿！クリスマスプレゼントは知恵の輪と漫画とゲームとコナンのカレンダーでした、Ｍであります（＾＾；）

私の年末年始の様子は掲示板でも書きなぐってましたが（＾＾；）

１月３日、夢に新一と平次が、４日にはコナンを含めて少年探偵団（と、キッドがいたようないなかったような・・・）が出てきましたー。（ついでに言うと、榊もいたような・・・）初夢じゃなかったのが少し残念でした。・・・初夢には、笑点が出てきていたような・・・（なんでだぁ？）

えー今、「花より男子」を見ようかどうか本気で悩んでます（＾＾；）見始めたらテレビに拘束されちゃいますけど、あーでも、新一が～（違うけど）・・・

今更、実写ドラマのメイキング番組見たかったなーと思うこのごろ。こういう時ばかりは、東京に住んでたらなー・・・と思います。（だれか見た方がいらっしゃったら、ご一報を（＾＾；））

関係ない話ですが、ネット販売されているという帝丹高校のジャージ。サンデー誌上の紹介文に、「原作やアニメでも登場した」って書いてあったんですが、「出てきてたっけな？」と思ったので・・・（蘭の台詞の中でしか記憶が無いんですけど）こちらも、「ここに出てた！」と言う方がいらっしゃったらご一報を（＾＾；）

えー、近況はこの辺にしておいて、小説の話。前話の「悪ふざけ」の答え合わせ。

・「ジャガイモ女王の鎮魂歌」ｋｕｍａさんが見事正解されてました。

・「青い疑惑」小五郎がモロに言ってましたが、沖野ヨーコちゃん出演のドラマですね。

・「ＴＲ」東都環状線を運営してる会社らしいです。
・「フジテレビのシオジアナ」この女子アナ、「コナン」には１回も出てきてないんです、実は。「ＹＡＩＢＡ」や「まじっく快斗」に出てきた、強烈な脇役さんでした。（そう言えば、４４巻に出てきたメガネで真ん中分けの日売テレビのおじさん、見覚えある気がするんですが、どこだったかな？）

えー、この回実は、次の話と合わせて１話の予定だったんですが、長くなったので分けました。したがって、今回のサブタイトルは、前回の後書きで言っていた「すでに決めていたタイトル」とは違います（＾＾；）次回のサブタイトルが、予定していたタイトルになりますので、そのタイトルは今回の話ともつながってます。ちなみに、今回のタイトルは、「メッセージ」の訳語という事で。もうちょっと気の利いたのは思いつかなかったのかと、いまさら自問自答してますが（＾＾；）
ところで、毛利家の間取りにイマイチ自信がありません。特に、台所の位置。話の都合で２階に持ってきましたが、事務所に台所ってどうなんだろう・・・（＾＾；）３巻で、蘭が事務所の中でエプロンをつけている場面があったので、「大丈夫だろう」と高を括って、こうしたんですが、「いや、毛利家の台所はあそこだ！」という方がいらっしゃったら、これまたご一報を（またかよ！）

えー、長々と書きましたが、最後に１つだけ・・・

「今年こそ、カープはやってくれます！」

では、失礼します・・・（＾＾；）

１０．思惑

次の日―
またいつものように６人は帝丹中の下駄箱に集合していた。
「榊さん、全部調べ終わりました！」
「おーっ、本当か！？」
榊が見せる子供のような笑顔は、抱えている事情を感じさせなかった。
「オレ疲れちまったぜー・・・」
元太が首をぐるぐると回した。

「今日の休み時間、皆で調べた資料から分かった事をまとめてみたんです」
６人はゆっくりと歩き出した。
「へえ！仕事が速いじゃないか」
光彦が手帳のページを手早くめくった。
それに続いて、コナン達も手持ちの手帳を開いた。
「１つ目は・・・」
歩美がゆっくりと確かめるように手帳の文字を追った。
「７０歳のおばあさんが被害者。現場は米花町内の三叉路」
「２件目の被害者は２８歳の、帰宅途中の女性会社員です・・・米花町と奥穂町の境辺りで発見されてます」
２件目の報告をした光彦に続いて元太も手帳の文字を読み上げようとしたが、途中でつまづいた。
「えーと次は４７歳のおばちゃん・・・じゃなかった、えーと、・・・おい光彦、これ何て読むんだ？」
「『しゅふ』ですよ、『主婦』」
「・・・あ、そうそう、『主婦』だよ、主婦、うん」
「４件目は下校途中の９歳の女の子、次が友達の家に遊びに行くと

ころだった１８歳の男子高校生・・・現場は人気のない路地裏ね」
哀は元太と違って、すらすらと文面を読み上げる。
「６件目の被害者は、５２歳の会社員の男性、・・・そして、７件目が・・・」

コナンはそこで言葉を切った。あえてそこから先を言う気はなかった。
榊が、静かな声で沈黙を破った。
「・・・続けて？」

「それから、この７つの事件の共通点を探してみたんです。」
「何か分かった？」
「はい、被害者は、年齢、職業もばらばらで、ここには共通点はなさそうなんですが・・・」
「７件とも米花町内で起こってるんだよな？」
「それに、起こってる時間帯がみんな同じなの！」
「夕方の４時から５時にかけて・・・だったわよね」
「そして、毎回目撃されてる『赤い車』―榊も見たんだよな？」
「ああ、間違いない」
榊の言葉を聞いてコナンは手帳を閉じた。
「―しかし、見えねーな、ひき逃げ犯の『思惑』が」
「そうね・・・共通点はあるけど、それが何を意味するのか・・・」
「被害者に共通点はありませんし・・・」
「・・・何でなんだ？」
「そうだよね・・・どうしてこんな事するんだろう・・・」
「そもそも、こういう『同一犯』によるひき逃げ事件が短期間で連続して起こったこと自体が不自然なんだ・・・」
「どういう事、コナン君？」
「普通なら、１件目の事件を起こした時点で、家に閉じこもって息を潜めるか、もしくは安全運転をしようとするはずなんだ。目撃さ

れて通報されたり、交通違反で捕まったりしたらアウトだからな・・・実際、このひき逃げ犯は毎回目撃されちまってる」
コナンは頭の後ろで手を組むのをやめて、顎に手を当てて思案顔になった。
「リスクを背負ってまで、一体何のために・・・」
その時、話を黙って聞いていた榊が、やや強い口調で言った。
「あたしは、動機なんて知りたくない」

「・・・え？」
「確かに、動機を調べることは犯人を突き止める手掛かりにはなるかもしれないけど・・・」
じっと前の方を向いていた榊が、５人の顔を見据えるように向き直った。
「たとえ、どんな理由があったとしても・・・ひき逃げ犯が、こういう犯罪を犯したことには変わりない・・・あたしは、絶対に許せない」

榊の言葉を受けて、５人は黙りこくった。
「・・・そうだな。どんな理由があっても、犯罪は犯罪だ・・・」
コナンは、一言一言確かめるようにゆっくりと呟いた。

「・・・みんな、博士の家に来ない？『例の物』が出来たらしいから」
沈黙を破ったのは哀だった。
「『例の物』？」

「『みんなで来てくれ！見てのお楽しみじゃ』・・・って、今届いたメールに書いてあるけど」
哀は携帯電話の画面を見ながらそう言った。
「何でしょう？」
「早く行こうぜ！」
「待ってよ元太君！」
3人はいち早く走り出し、榊がすぐにその後を追った。
「『例の物』・・・か。まあ予想は出来てるけどな」
「でしょうね」
続いて、2人も元太達の後を追った。

コナン達は、阿笠邸にたどり着いた。
「お帰り、哀君！それから、みんなも、待っとったぞ！」
いつもの調子で博士が皆を出迎えた。
「おお、榊君！しばらく見んうちに大きくなったのぉ・・・」
その話しぶりはまるで親戚のおじさん・・・おじいさんといった方が正しいかもしれない。
「博士こそ、しばらく見ないうちに実年齢より老けてるんじゃないか？」
「余計なお世話じゃ」
挨拶代わりに皮肉を言ってのけた榊に博士は苦笑いした。
元太達は、榊の発言を「正論だ」と言って笑っていた。
「そう言えば、広島弁と博士の喋り方って似てるよなー」
「確かにそうですね元太君・・・何故でしょうか？」
「でも、博士は子供のときから『じゃ』って言ってた訳じゃないんだよね？おじいさんって、いつから、どうしてそんな喋り方になるんだろ？哀ちゃん、どう思う？」
歩美の問いに、哀は、
「さあ？私はおじいさんになった事なんてないから・・・」

と肩をすくめてみせた。
「あ、哀君・・・ワシはもう『おじいさん』なのか？」
「そう言わざるを得ないんじゃない？」
「・・・で、博士。『例の物』が出来てるんだろ？」
「おお、もちろんじゃ！」
コナンの言葉をきっかけに、博士はテーブルの上に乗った『例の物』を指差した。
「榊君用の新しい探偵バッジじゃ！もちろん、皆のと同じように発信機やトランシーバーの機能も付いとるぞ！」
「へーっ！」
バッジを手にとって物珍しそうに眺める榊を、歩美達が取り囲んだ。
「そのバッジは少年探偵団の証なんだぜ！」
「これで榊さんも完全に探偵団の一員です！」
「よかったね、榊さん！」
「おお、それから、忘れるところだったんじゃが・・・」
博士がぽんと手を叩いた。
「ぜひ榊君に使ってほしい、新しい発明品を作ったんじゃよ！」
「ホントー！？」
榊を含め、他の探偵団たちも期待に目を輝かせた。
「どんな発明品なんですか！？」
「早く見せてくれよー！」

「・・・作ったんじゃが・・・どこにやったかのぉ？」

頭を掻いて苦笑いする博士に、全員が脱力した。
「おいおいおい・・・・」
「えーっ！？忘れちゃったの？」
「・・・いよいよボケてきたんじゃない？」
コナンたちのブーイングの後、とどめの手痛い一撃を加えたのは哀

だった。
「・・・えーっと、そのぉー・・・すまんが皆で探してくれんか？」
「「えーっ！？」」
間もなく子供たちと、発明品のありかを忘れた張本人は阿笠邸のあちこちに散らばった。
哀とコナンは先程のところにとどまって、事件の事などを話したりしていた。
ただ、話しながらなので、『捜索』にあまり手がつかなかった。
「コナン君、哀ちゃーん！お願い、２人も手伝ってよー！」
奥のほうから歩美の声が飛んできた。
「おう！・・・そう言えば、灰原さぁ」
「何？」
「榊がオメーのこと名前で呼んでも、何も言わなかったよなぁ」
「・・・そういえばそうね・・・」
「元太と光彦には『あなた達はダメ・・・』とか言ってたろ？なのに、どうかしたのか、って思ってよ・・・」
コナンが肩をすくめて哀の口真似をしながらそう言った。
「さあ・・・よく分からないわ、自分でも、なんであの子に名前で呼ばせてるのか・・・」
哀も同じように肩をすくめた。
「ただ・・・誰かに似てる気がするのよね、雰囲気が、と言うか、何かが・・・」
「『それ』が、榊に名前で呼ばれる事を許してる、ってか・・・」
コナンは天井を見るともなしに見ながら、手を頭の後ろで組んだ。
「例えば、あなたに似てるとか・・・なーんてね」
「だから、一緒にするなって！・・・オレは、お前に似てる気がするけどな」
「そうかしら？」

「んー・・・まあ、茶髪だし、かわいくねーし」
「あら、失礼ね」
哀は皮肉っぽい笑みを浮かべた。
「オメーら、はたから見てると兄妹みてーでさぁ・・・気味悪いったらありゃしねー」
「『姉妹』って言ってあげないと、是枝さん怒るんじゃなくって？」
「どーせ今はアイツ聞いてねーからいいんだよ・・・告げ口はするなよ」
哀はもう一度くすっと笑った。
「まあ、それも悪くないかもね・・・」

―彼が、『姉妹』とあえて言わなかったのは・・・

―彼なりに、気を遣ってくれたからかもしれない。

「ああ、それから工藤君」
次の話題を切り出したのは哀だった。
「・・・是枝さんの事・・・ちゃんと見ていなきゃダメよ？」
「え？」
コナンは、『発明品』を探そうとしていた手を止めた。
「一昨日も言った事だと思うけど・・・」
「・・・」
コナンは真剣な顔になって向き直った。
「分かってるかもしれないけど、昨日、是枝さんを家に呼んで、いろいろ話を聞いたのよ・・・」
「それで？」
哀は、コナンの注意がこの会話に向けられている事を確認して、言葉を続けた。

「最近、よく夢を見るんですって・・・」

『最初の頃は、夢の中で、またあの事件が起きてたんだ・・・見たくもないのに、何度も何度も』

哀はその話を聞いた時、ＰＴＳＤという言葉を思い出したりもしていた。

―心的外傷後ストレス障害―

事故や災害に遭った人が、悪夢に苦しんだりする事があるという。

その可能性もありうるのかもしれない、と哀はコーヒーを口にしながら考えていた。

「―そうか・・・」

「あら、話はまだ続くのよ」

「あん？」

『でも、最近はそういう夢だけじゃなくって・・・』

あの時の、榊の表情が、いやに頭に残っている。

『あたしが、ひき逃げ犯の車をぶち壊す夢なんだよな・・・』

「・・・え？」
コナンはそれを聞いてしばらく呆然としていた。
「分かる？私が言いたい事」
コナンがそれに答える気配はしばらく無かった。

「・・・もし・・・もしもよ、彼女がひき逃げ犯と遭遇したとしたら・・・彼女、どんな行動をとるのかしら・・・？」
哀はコナンの返事が待ちきれずに、自ら口を開いた。

榊は前述の言葉を口にしたとき、自分の手を見つめていた。

そこにあったのは、「自分が何をするか分からない」という不安なのか。

目の前で起こった凶行・・・

悔しくないわけがない。怒りを覚えないわけがない。平然としていられるわけがない。

その悔しさ、憎しみ、怒りが誰に向けられるのかと考えた時・・・

―榊の性格から考えて―無関係な人に、脈絡の無い怒りをぶつけるとは思えなかった。

哀の頭に浮かんだ選択肢は、『榊自身』、もしくは『ひき逃げ犯』しかなかった。

哀は、そのような旨をコナンに洗いざらい伝えた。
「どちらにしても、『危ない』事には変わりないわ・・・だから、あなたにはできるだけ彼女を止める努力をしてほしいのよ」
そう言い残して、奥の部屋へ歩こうとする哀の背中に、コナンは疑問を投げかけた。
「なあ、灰原・・・」

「なんでお前、そんな事オレに話したんだ？」
哀は背中を向けたまま、ふと立ち止まった。

「・・・どういう意味？」
哀は振り返ることなく訊ねた。

「いや・・・水無怜奈の件があった時にも似たような事言ったけど・・・」
うまく言葉が見つからないのか、そこで言葉を切って一呼吸置く。
「お前、いつもなら『首を突っ込むのは止めなさい』とか言うだろ？」

「・・・それも、是枝さんがあなたに似ているような気がするから・・・」
哀は、コナンに聞こえるかどうか分からないような声でそう呟いた。

「あん？何て言ったんだ？」
「・・・だから、今回の事件は『いつも』と違うのよ・・・組織の事でもないし・・・何より、『他人事じゃない』。これに尽きるわね・・・是枝さんは探偵団の一員、なんでしょ？」
哀は振り返って、そう問いかけた。
「そりゃそうだけど・・・」
「ホラ、『発明品』を探すわよ」
「ああ・・・」
コナンが手近な所から『捜索』を始めたのを確認すると、哀も向き

直って、少し奥まった所の引き出しに手をつけた。
ただ、考え事のせいで、どうしても身が入らなかった。

榊の言葉を聞いたときに感じた『既視感』・・・

2日間しばらく考えた末、哀はその『答え』を確信していた。
―人前では気丈に振る舞って、陰で泣いていたであろう蘭―
最初はそれしか思い浮かばなかったのだが、それ以上の『不安』をかきたてる『もの』は何かと考えた時、1つの考えがよぎった。

―コナンと、似ている気がする。

言い換えるなら―『同じ臭いがする』と言えばいいのか。

そう、『清潔な香り』―

思い立ったらすぐに行動する。

自分の身に危険が起こるであろうと予想されても一向に構わない。
そして時に、心配させまいと、それを人に隠す。

そんな行動を榊がしたところを、実際に見たわけではないが―
榊が纏う空気―例えば正義感とか、そのようなもの―が、そのように感じさせてならない。

自分がいくらコナンに『首を突っ込むな』と止めても、よっぽどの事がなければ手に負えないだろうという事は分かっていた。

制止を振り切ってでも、それが危険な行動であっても、止めない・・・・そういう人物なのだ、「工藤新一」は。
これからもそうなのだろう、という事は容易に想像できた。
そして、もしかしたら榊もそうなのかもしれない―という事も。
幸い今回は、いくら『こちら』が首を突っ込んでも、『向こう』がそれを感知する事はないだろう。
こんなひき逃げ事件が組織に関わっているはずはないし―

ただ、問題は『これから先』の話―。

榊とコナンには、それぞれが言った言葉を、忠実に伝えたつもりだ。
そして、2人がお互いに気をつける―『牽制』―をしてくれる事を

期待した。

（そう、2人それぞれに突っ走られるよりはずっとマシだわ・・・）

『心配すんなよ！』

『やばくなったらオレがなんとかしてやっからよ！』

『・・・話してほしいんだ、抱え込まずに』

『まあ、大丈夫だから！お互い様って事で！』

『それよりお姉ちゃん大丈夫？なんかヤバイ事になってるって聞いたけど・・・』

『心配しないで、うまくいってるから・・・』

『お姉ちゃんは、大丈夫だから・・・』

―ちっとも『大丈夫』なんかじゃなかった・・・

―そうでしょ？

―いつもそうよ。

―人の事ばかり気にかけて、自分の事は二の次・・・

危ない目にあわせたくない。

本当のことを言えば、『遠く』へ行ってほしくない。

失いたくない。

―ねえ・・・そんな事を考えるのは、自分勝手かしら？

―お姉ちゃん。

１０．思惑（後書き）

作者より　どうも、更新は月１回が恒例になってきたＭであります。

さて、前回の後書きでも触れた今回のタイトル・・・『思惑』という事で。ひき逃げ犯の見えない『思惑』もあるけど、哀の２話にわたった『思惑』のほうが大きいですね。コナンたちを、これから先危ない目に遭わせたくない、という『思惑』だったわけです。またしても哀のモノローグが多くなったんですが、少しは書き方がましになったでしょうか？

ちなみにコナンの「どうしてそんな事オレに話したんだ？」は、２６巻の、「何でお前そこまでしてくれるんだ？」っていう新一の台詞を意識してみたんですが・・・雰囲気とか伝われば幸いです。

２月１日追記

この小説の読者数が２０００人を突破いたしました！２月１日１１時１７分現在、２０７９名です。ありがとうございます！ｍ（＿）ｍ

余談ですが、次回辺りからページのレイアウトを変えてみようかなと思ってます。ページの色が変わるという事ですね。目がちかちかしないように心の準備をしておく事をお勧めします（＾＾；）

11．他人

「あったぁーー！！これじゃねーか！？」
そう叫んで段ボール箱を引っ張り出してきたのは元太だった。
「おお！それじゃ、それじゃよ元太君！」
「元太君すごーい！」
「たまにはやりますねぇ」
「『たまに』って何だよ、光彦？」
「あー、いや・・・」
「・・・んで？何なんだ、発明品って？」
博士は、段ボール箱のふたを開けて中をのぞこうとするコナンを制止した。
「まあまあ、急かさんでくれ・・・」
箱の中に手を突っ込んで取り出したのは、かなりみょうちくりんな物だった。
「・・・何なの、これ？」
「一輪車・・・かなぁ？」
「でも、タイヤが2つ重なってますし・・・」
「これ、そんなに便利なのかぁ？」
『発明品』はお披露目早々、酷評を浴びせられる事になった。
博士は、気を取り直して咳払いをした。
「あー、おほん、そんな事を言っておれるのも今のうちじゃ」
「本当に？」
「よいかのぉ、これは一見ただの一輪車に見えるが・・・」
「見えねーよ」
コナンがすかさず合いの手・・・いや、ツッコミを入れる。
博士は聞こえていないのか無視しているのか、説明を続けた。
「ここのボタンを押すとじゃな・・・ほれ！」

まるでトウモロコシがポップコーンになる瞬間を見ているようだった。
ガシャッという音とともに、一輪車もどきは普通の大きさの自転車になった。
「す、すっげー！！」
「折りたたみ自転車だったんですね！」
榊を含め、元太達は感嘆の声をあげた。
「見た目は普通の自転車と変わらんし、走りやすさも同じじゃ！いやー、ここまでするのに苦労したわい・・・さらにこれには特別な機能がついておってのぉ」
「何？」
「坂道でも楽々、車に負けないスピードも出せる強力電動アシスト付きなんじゃよ！」
「あら、でもそんな大掛かりな装置くっつけてたら車体が重くなって、折りたたみ自転車には向かないんじゃない？」
「いやいや、動力源はライトのように、ペダルを漕いだ時のエネルギーを使っておるんじゃよ・・・しかも、従来の、その時に漕がなければエネルギーが働かないようなやり方と違って、エネルギーを溜めておけるようにできておるし、それに・・・」
「御託はともかく、ありがたく使わせてもらうぜ」
榊が自転車をたたんで担ぎ上げた。
「ちょっと待つのじゃ！今なら買い物の時に便利な、取り外し自由自在のカゴと荷台も付けて・・・」
「通販かよ・・・」
コナンが呆れた顔をした。
「ところで、なんでこれが『榊専用』の発明品なんだ？」
「あ、まあ・・・あまりにスピードが出るんで、運動神経がないと乗りこなせない代物じゃし・・・そもそも、最初は新、いや、コナン君に使ってもらおうと思ってたんじゃが、作り終わってから気が付いたんじゃ・・・」

「何だよ？」

「・・・コナン君が乗っても、ペダルに足が届かんのじゃ」

「「あはははは！！」」

「・・・・・・」

元太達は大いに笑い転げ、コナンは拗ねる事になる。

「とにかく、ありがとな、博士！」

「じゃあ、帰りましょう！」

榊はバッジを付け、自転車を抱えると、玄関の方へ歩いていった。

光彦達も続いて、玄関へ向かう。

「うむ、コナン君の分まで大事に使っとくれ！」

「一言多いんだよ、博士は・・・」

「おお、そうじゃ新一君」

「あん？」

「スケボーの修理が出来たから、これで我慢しとくれんか？」

「・・・へいへい・・・」

コナンは呆れた笑みを浮かべながら、スケボーを受け取った。

哀と博士は、玄関先でコナンたちを見送った。

「気をつけて帰るんじゃぞ！」

「わーってるって！」

「またね、哀ちゃん！」

「ええ、また明日・・・」
姿が見えなくなるまで、軽く手を振って別れを告げた。
5人の姿が視界から消えると、哀は手を下ろし、ふと考え事をした。

『似てるよな、オメーに・・・』
比護選手の試合を見ていたとき、コナンにそう言われたのを思い出した。

―『黒』を裏切った人・・・
観客からブーイングを受ける彼を見て、「ああ、やっぱり裏切り者に居場所なんて無いんだ」と思った。

『ブーイングは叱咤激励だったって訳だ！』
コナンには「そんなの気にしてない」と答えたが・・・
本当のことを言うと、ちゃんとファンに受け入れられている彼と、自分を重ね合わせて、幾分救われた気持ちになった。
ただ・・・

『お前ら見てると兄妹みたいでよー・・・』

―新しい兄弟・・・いや、姉妹か。

―姉か、妹か。

細かい事はともかく、そういう気分になってみるのは悪くなかった。明るい笑顔を絶やさない、そして、周りの人たちにも笑顔になってほしいと言っていた彼女。

けれど、彼女を取り巻く状況は、決して好転しているとは言えなかった。

むしろ―。

「わたしと『あなた達』は―これ以上『同じ』であってはいけないのよ、きっと・・・」

哀は誰にも聞こえないような声で、そっと呟いた。

「どうした哀君、入らんのか？」

「今行くわ・・・」

博士に促されて、哀は玄関のドアの取っ手をつかんだ。

―大切な人が『遠く』へ行ってしまったまま・・・

せめて榊を、自分と同じ状況に置かせたくはなかった。

―これ以上『同じ』になってほしくない。

―これ以上『同じ』であってはいけない。

『どうしてお姉ちゃんを・・・助けてくれなかったの？』

「あんな思いをするのは・・・もう、わたしだけで十分なのよ」

もう一度、コナンたちが帰っていったほうを振り返り、ゆっくりと

ドアを閉めた。

コナン達はしばらく歩いていたが、途中で、榊の姿が見えないことに気がついた。
「・・・おい、榊知らないか？」
「え？あ、そういえばいませんね・・・」
「まだ家までは先なんだろ？」
歩美達がぐるぐる首を回しながら辺りを確かめると、数百メートル後方に、立ち話をするおばちゃんたちの姿が目に留まった。

「で、加藤さんの奥さん、最近どうなの、子育てって？」
「そうねー、やっと手がかからなくなってきたって感じだけど、反抗期が怖いわよねー」
「あ、そうそう、反抗期って言えば、えーっと、ほら、あそこのお金持ちの家」
「鈴木財閥さんのところ？」
「違う違う、同じ米花町でも反対の方向・・・」
「あー、兼田さん！？」
「そうそう、そこの家の息子さん、もう成人だっていうのに、いつまでも親のすねかじって・・・」
おばちゃんたちの１人が、声を落として喋り始めた。
「あ、聞いたことある、どこの馬の骨か分からない若い女の子と付き合ってるらしいわね？」
「しかも、家のお金とか持ち出して！」
「そーなのよー！で、だいぶ前、勘当同然で家から出されたって・・・もっともその息子さんも『こんな家まっぴらだ』とか何とか言っ

てたらしいけど」
「あ、『若い女』って言えば・・・」
「なになに？」
「４丁目のアパートの大家さん、奥さんに浮気現場を押さえられたらしいわよ！」
「うっそー！」
・・・おばちゃんたちの会話という物は、「そういえば・・・」でさっさと次の話題に移り、そして延々と、とどまるところを知らない。
最初の話題からどれだけ脱線していようが、誰も気にしない。
会話にひと段落ついたかと思えば、「で、最初何の話だったっけ？」となる。
脱線していたものが環状線になってしまうともう手に負えない。
戻ってきた最初の話題から、また別の方向へ脱線していったりもする。
「・・・やっぱ、マイホームはいいわよね」
「でもローンがねぇ」
「そこは、節約していくしかないでしょ」
「あっ！節約で思い出した！今朝の折込チラシ見た？」

「見てないです！何かセールがあるんですか！？」

太い声のおしゃべりの中に、突如通る声が割り込んでいた。
「「・・・え？」」
一斉におばちゃんたちの目がそちらへ向けられる。
手帳とペンを持って、メモする気満々の榊がそこに立っていた。
「セールですよね？」
「・・・え、ええ・・・２丁目の米花スーパーって分かるかしら？」

呆気に取られたおばちゃんは、たどたどしく説明を始める。
「はい・・・」
そして、その説明を聞いた側から走り書きしていく榊・・・
「そこの野菜売り場でね、きのこ類のタイムサービスやるらしいわよ」
「なるほど、何時からあるんですか？」
・・・

「・・・榊ぃーーー！！！」
怒鳴り込むように、むきになってそこへ割り込んだコナンは、榊を引きずるように去っていった。

「おい、ちょっと待て！まだ何時からあるか聞いてないって！」
「バーロー！何やってんだお前！？」
肩で息をするコナンに向かって、榊はむきになって言い返した。
「聞き込み調査だよ！！」
「タイムサービスの情報が！？」
「そ、それはそれとして！」

言い合いが落ち着いた頃、５人はまたゆっくりと歩き始めた。
「・・・ああいう噂話の中にも、手掛かりがあるかもしれないと思って聞いてたんだよ・・・」
「それで・・・さっきの話から、何か分かったの？」
「いや、別に・・・最近はニュースや新聞にも、目ぼしい記事はないし」
榊は、足元に目線を落とした。
「・・・皆、忘れてるのかな・・・？」
「・・・」
誰もそれには答えなかった。

「そうだ」
と言える訳がないが・・・

「忘れていない」
と言い切れるのか？

「あたしは・・・多分心のどこかで他人事だと思ってたんだ」
榊は、普段よりずっと重い口調で喋り始めた。

１１．他人（後書き）

作者より　どうも、Ｍであります。
この間気がついたんですが、携帯画面には小説のレイアウトって反映されないんですね（＾＾；）
何はともあれ、背景を薄暗くしてみました。

さて今回の話、もうちょっと書いてからの投稿予定でしたが、長くなったので。
サブタイトル、「他人」。あおり文は「それは、他人事ですか？」・・・な感じです。
いろんな意味で、また、自戒も込めて・・・考えてみていただけると嬉しいです。

次話投稿までしばらくかかりますが、どうぞ宜しくお願いします。

12．遭遇

「なんか・・・今回のことがあって、思い知らされた感じなんだ」

―すぐ近く・・・自分の身の回りで起こった事件だったのに・・・

―他人事だと思っていなかったか。

―無関心ではなかったか。

―突然、大事な人を傷付けられた時の気持ちを、少しでも考えようとしていたか。

・・・否。

何も考えていなかったから、今回の事が、すごく突然に感じられて。

ぽつりぽつりと、榊は語りかけるように喋る。

コナン達は、黙ってそれを聞いていた。

「・・・茶道って知ってるか？」

突然、榊が話題を変えた。

「「え？」」
「茶道には色々、決まりというか・・・しきたりみたいなのがあってな。」
不思議そうな顔をする探偵団達をちらっと見て、榊は話を続ける。
「例えば、自分の後にお客さんが来る時・・・茶室の『にじり口』―入り口のことだけど―の扉は少し開けておく。それから自分の履物は揃えて、端に寄せる。」
「そうなのか？」
難しそうだな、という顔をした元太に向かって、榊は笑いながら答える。
「ああ・・・どちらも後の人が入りやすいようにする事なんだ。『入り口を開けやすいように』、『邪魔にならないように』。な？『茶道のしきたり』って言っても、もとをただせば理由はごく単純だろ？」
「へー・・・」
それまで流暢に喋っていた榊は、急に、言葉を選ぶようにゆっくりと口を開いた。
「そう・・・相手のことを考えれば・・・ちゃんと分かるはずの、簡単なことなのに・・・」
「・・・ひき逃げ犯のことですか？」
「大体はな・・・でも、あたしのことでもある気がする」
―分かってなんかいなかったのだ。
―心のどこかで、自分だけは大丈夫だと・・・そう思っていた。

―関係ない・・・と。

―そのしっぺ返しが来たのだろうか。

―今になって、すごく悲しい。怖い。

医者は、2人の容態を、『ぎりぎりの状態にある』と言っていた。

つまり、『どう転んでもおかしくない』。

―時折、最悪の事態を想像してしまう自分にも、嫌気が差す。

―何か出来ないのか。

―何も出来ないのか？

―何か―

コナンは黙ったまま、目線を榊の顔からそらした。

哀の話を聞いた後では、榊の言葉がひどく重くのしかかった。

『絶対に許せない』

その気持ちが、暴走しはしないか？

―そうあって欲しくないが・・・

哀が言いたかったのは、そういう事なのだろう。

「捕まえよう、みんなで」

歩美のその言葉をきっかけにして、光彦が口を開いた。

「捜査状況って、どうなっているんでしょうか？」
「ああ、あたしがその車の形も、番号も証言したんだけど・・・」
「じゃあ、どうしてひき逃げ犯は捕まってないの？」
その質問に対する答えは、コナンが引き継いだ。
「盗難車でもないのに、なぜか身元が割れねー、ときてる」
「なんでだよ？」
「さあな・・・すぐに警察が検問を張ったけど、米花町を出た赤い車は1台もないらしいぜ？」
スケボーを小脇に挟み、閉じていた手帳を再びめくった。
「じゃあ、ひき逃げ犯は、まだ米花町内にいるってことなの・・・」

「あのー、言いにくい話なんですが・・・」
「あん？」
「榊さんが嫌じゃなかったら、現場を調べてみたいと思うんです！」
光彦は、真剣な顔になって榊を見上げた。
「その・・・『現場百回』と言いますし」
榊は、少し考えた後、吹っ切ったように笑った。

「―よっしゃ、行こうか」

「・・・ここだよ、現場」

人通りも、車の通りも少ない横断歩道だった。
「あの日・・・あたしはこの横断歩道を歩いていって・・・そしたら・・・あの車が・・・」
道の中程より少し向こう側には、アスファルトに、やや黒ずんだシミがついていた。

（・・・血痕か・・・）

ただ、それ以外に目立つ事故の痕跡は無かった。

―忘れ去られたかのように。

しばらくの間、5人は黙って、じっとそこに立ちすくんでいた。

「ふう・・・」
振り返ると、買い物の帰りらしい若い女性が、スーパーの袋を抱えながらベビーカーを押して歩いてきていた。
「あ、荷物お持ちしましょうか？」
「オレもー！」
「歩美も、手伝う！」
「あらあら、ありがとう・・・」
その女性はにっこりと、優しい笑顔を浮かべた。
「わーっ、かわいい赤ちゃん！」

「ほんとですねー！」
コナンと榊も覗き込む。
目が覚めたばかりらしいその子供は、こちらを見つめると、きゃっきゃっと笑った。
「よしよし・・・」
母親は、そっと子供の頭をなでた。
その様子に、皆、顔がほころんだ。
それは、榊も同じだったが、ふと、寂しさが吹き抜けた。

―幸せそうだ。

―『一緒にいる』。

―神棚に、『家族写真』を乗せてまで、願った。

―せめて・・・笑顔で・・・一緒に・・・

―果たして、その願いは叶えられるのだろうか？

間もなく、信号が青になった。

買い物袋を提げた元太達が真っ先に渡り始める。

続いて、ベビーカーを押す母親、その次に、コナンと榊。

「オレが1番のりしてやるぜー！」

「待ってよ元太君てば！」

「転んじゃいますよー！」

「気ぃ付けろよー・・・」

そこだけを見れば、何気ない、微笑ましい光景だっただろう。

しかし、周りを見ていたコナンは、見つけてしまった。

向こうからやってくる、徐々に姿がはっきりしてきた『それ』を・・・

「榊・・・あの車、おかしくねーか？」

その『嫌な予感』を、口に出さずにはいられなかった。

「・・・え？」

―スピードも落とさずに走ってくる『それ』は―

―『それ』は、忘れもしない。

―血のように、『赤い』車―

「「逃げろ！！」」

とっさに、２人同時に叫んだ。

「え！？」

歩美達はもう向こう側の歩道に差し掛かったところだった。

母親は、まだ道の中ほどにいた。

「―！！」

母親は、子供を抱えるようにして庇った。

しかし、このまま車が突っ込んで来れば、どちらも怪我どころでは済まないのは明らかだった。

「―くそっ！」

コナンは２人に向かって駆け出した。

そして、向こう側へ連れて行こうとする。

「逃げて！」

そうしている間にも、赤い車は刻々と近付いていた。

「―！」

榊の脳裏には、両親の姿がよぎった。

―『あの時』、あの２人は―

―自分を庇って・・・

―そして・・・！

「だめ―！」

次の瞬間には、自分も駆け出していた。

「この―！」

空になったベビーカーは歩道へ蹴っ飛ばし―

コナン、母親、子供を丸ごと抱えるように、転がるように歩道へと動いた。

赤い車は、今更ながらブレーキをかけ始めたようだった。

けたたましい音を立てながら、すれすれのところを通り過ぎて行く車。

「―！」

先程、1メートルほどこちらが動いていなかったら、間違いなく直撃していた。

そんな事を考えると、背筋がぞっとした。

スピードを出していれば出しているほど、制動距離が長くなるというのは本当らしい。

道路に黒々とブレーキ痕を残し、横断歩道をかなり過ぎたところで、赤い車はやっと止まりつつあった。

「大丈夫！？」

歩美達が歩道から出てきて駆け寄った。

間違いない、あの時と、同じ車。

「―おい・・・！」

榊が立ち上がって、運転手に呼びかけようとした、その時。

再びアクセルがかかる音がしたかと思えば、ドリフトの要領で、車の方向が変わった。

「な！？」

エンジン音とともに、瞬く間にスピードを上げ、こちらに向かってくる。

「避けろ！！」

「わあぁっ！？」

やっとのことで避けたが、車は再び方向転換した。

「伏せろーっ！」

「わーっ！？」

3度目の襲撃。

集団が分断されたような格好になった。

それぞれがてんでばらばらの方向に転がって、起き上がるのには時間が必要だった。

起き上がれないでいるうちに、今度は、車はそのまま止まることなく遠ざかっていく。

「み、皆、大丈夫ですかぁ・・・」

光彦が肩で息をしながら呼びかけた。

「ああ、なんとかな・・・」

異変に気付いたのは元太だった。

「お、おい！この女の人、起きねーぞ！」

「え！？」

先ほどの母親が、子供を抱きかかえたまま気を失っているようだっ

た。

「救急車を呼んだほうがいいよね、コナン君！？」

歩美が、母親と、コナンを代わる代わる見た。

「ああ・・・あと、警察もだ」

コナンは、まだかろうじて小さい点ほどに確認できる赤い車を見やった。

「あれは、連続ひき逃げ事件を起こしたのと同じ車・・・そうだろ、榊？」

「ああ・・・」

その返事は、いやにぶっきらぼうだった。

「・・・おい、榊？」

振り返ると、そこには車を見据える榊の姿があった。

まるで、何かにとりつかれたように、意識をそれだけに集中させているかのように・・・

「・・・逃がすか」

「―！おい、榊！？」

２つ目の『嫌な予感』が的中してしまった瞬間だった。

榊は折りたたみ自転車を開くと、助走を付けて飛び乗った。

「榊ーっ！？」

再び呼びかけたときには、もう、常識では考えられない速さで、車の後を追っていた。

「さ、榊さん・・・！」

光彦たちは座り込んだまま、呆然とそれを見ているしかなかった。

榊の姿は見る見るうちに小さくなっていった。

「―くそっ！」

コナンは唇を噛み、スケボーを地面に置いた。

「・・・灰原も呼んどいてくれ」

それだけ告げると、コナンはスケボーに飛び乗った。

「え！？コナン君！？」

その歩美の声は、スケボーのエンジン音にかき消された。

そして、コナンの後ろ姿も、同様に小さくなっていった。

１２．遭遇（後書き）

作者より　・・・遅くなりました！！ｍ（＿　＿；）ｍ
やっと１２話です。Ｍであります。

ついに来ました、この場面。雰囲気が重いです。暗いです。背景も真っ黒です。大急ぎで書いたんで、文章がおかしくなっていないか心配ですが（ー ー；）

榊のモノローグ満載です。核心というか、大事なとこなので結構力入れました。連日ニュースで事件が報道される今日。前回も書きましたが、「他人事だと思っていないか」っていうのが、自戒でもあります。
前回、前々回は哀のモノローグが多かったような気がします。なんでしょう、なんか哀のモノローグは書きやすかったような。原作でモノローグが多いからかな？

話が飛びますが、探偵団の自宅の位置関係・・・４話では榊の家に最初にたどり着いてましたが、１０話では阿笠邸が最初。・・・自分で書いておいて「どうなってるんだろう？」と思ったりしてます（＾＾；）。

短いですが、ひとまずこの辺で。ｍ（＿　＿）ｍ

１３．始動

「・・・どこ行ったんだ？」
コナンはしばらく行った所でスケボーを止めた。
「１００メートルを１０秒で走ると時速３６キロ・・・自転車に乗って多少速くなるとして、時速４０キロ・・・」
そう呟きながら、四方を見渡してみるものの、赤い車はおろか、榊の姿も見えない。
「道交法の電動自転車の規定は、補助力５０パーセント以下・・・全速力で車並のスピードってわけか・・・」

ここまで早い段階で見失ってしまうとは思っていなかった。
スピードなら断然こちらの方が速いのだが・・・
見通しが悪いことが災いしたらしい。
どっちに行ったのか？
「しゃーねぇ・・・一か八か行ってみるか」
と、再び発進しようとした時だった。

「・・・！」
持っていた探偵バッジが音をたてた。
「もしもし！？」
すかさず応答すると、予想通りの声が聞こえてきた。
『兄ちゃん？』
「おい、お前一体・・・！」
『ちょっと待って』
「あん？」
『今、車を追ってた所なんだけど、曲がり角で見失ったんだ・・・』
「・・・」
『それで、兄ちゃんの眼鏡で車の場所を教えて欲しいんだ』

「え？」
『三度目に車が突っ込んで来た時に兄ちゃんの発信器をくっつけたんだよ！ほら、あのボタンに付いてたやつ』
「・・・お前・・・」
『で、どう？』
促されて、眼鏡のスイッチを入れる。
『映ってる？』
「ああ・・・」
レンズには二つの光る点。
一方は比較的速いスピードで移動し、もう一方は動いていない。
『車・・・どこ走ってるんだ？』
「えーっと・・・」
車の居場所を告げかけて、口が止まった。
『ん？』
「・・・」
下を向いた眼鏡が光っていた。
『どこ？』
「・・・梨善町だ」
『・・・分かった！じゃあ、何かあったらまた連絡するから』

「お、おい！？」
交信が切れた。
そして、眼鏡を確認すると、２つの光の点が１つに減っていた。
「ニャロォ、電源まで切りやがったな・・・」
バッジをポケットに仕舞うと、コナンは改めてスケボーのスイッチを入れた。
「・・・意地でも追いついてやる！」
そう呟いて猛スピードで進むのは・・・
「・・・榊の分まで」
―梨善町とは正反対の方向だった。

＊＊＊＊＊＊

『８件目』の現場。
探偵団の目の前で、母子は救急車に乗せられた。
外傷もなく、軽い脳震盪のようだが、念のため病院で検査をするということだった。
走り去っていく救急車と入れ替わりになるように、反対側の道から、哀が走ってくるのが見えた。
「おーい、こっちだぞー！」

元太が両手を振って哀に呼びかけた。

「・・・救急車と警察は呼んだの？」

息を整えながら、哀が尋ねる。

「はい、今、救急車が病院に向かったところです！お母さんも赤ちゃんも、怪我はありませんでした」

「多分、警察の人ももうすぐ来ると思うよ！」

そう、と相槌を打って、哀は３人の顔を見回した。

そして、歩道に投げ出されたランドセルと鞄に目線を落とした。

「・・・で、江戸川君と是枝さんはひき逃げ犯の車を追いかけていったのね？」

「うん・・・」

「コナンのやつ、また抜け駆けだぜ・・・」

「そんなこと言ってる場合じゃないですよ元太君！」

哀はふっと息をついた。

（まったく、『これ』を持っててよかったわ・・・）

冷静に、ポケットから『それ』を取り出す。

（もっとも、彼も、『これ』をまだ持っているとふんだから、私を呼んだんでしょうけど・・・）

「・・・哀ちゃん、それ何？」

哀は、ゆっくりと歩美を見て言った。

「これ？・・・予備の追跡眼鏡よ」

＊＊＊＊＊＊

コナンはなおも走り続けていた。
少しずつではあるが、確実に車との距離は縮まっていた。
（おーし、この調子でいけば・・・）

その時だった。
「・・・やっぱりなぁ」

「―な！！？」
突然横から呼びかけられてそちらを向くと―
「お前・・・なんで・・・」
遠ざけておいたはずの、自転車に乗った榊の姿があった。

「こんな事だろうと思ったよ・・・なんか様子がおかしかったから・・・」
榊はこちらを一瞥した。

「そういう所、全然変わってないんだから…」
以前にコナンの正体を見破った時の、勝ち誇ったような顔ではなく、一言で言うなら非難するような顔。
まるで手の焼ける子供を諭すかのような榊に、コナンはすかさず言い返した。
哀の言葉をふとよぎらせながら。

『人って、そんなに変わらないものかしら？』
「お前は変わったみてーだな…」
「はあ？」
『何のこと言ってんだ？』と言わんばかりに素頓狂な声をあげる。
「…お前は、前は嘘つくような奴じゃなかっただろ？」
訝しげな顔をして、『とぼけるな』といった口調でコナンは追及したが、それでも榊は不思議そうな表情をしたままだった。
「…まさかさぁ、」
数秒後、思い当たることをようやく認識したらしく、今度は榊の方が訝しげな顔をした。
「あたしが、本当は車を見失ってなんかいなかったのに、わざと嘘をついて、追跡眼鏡を持った恰好の案内役になる兄ちゃんをおびき寄せた…」
そこまで一気に言ってから、一息ついて榊は続けた。
「…なんて考えてるんじゃないだろーな」
道が少し開けてきていた。
赤信号を前に、二人は減速した。
緊急事態とは言え、パトカー等とは違い、自分たちは所詮「普通車両」なのだ。
あの赤い車はともかく、道交法違反をするわけにはいかないし、第一、交通量も多くて危険だ。
もっとも、これらの判断は無意識の物であり、いちいち考えたわけ

ではなかった。

…と言うのも。

天性の勘がなせる業か、見透かしたかのように返された榊の言葉を、コナンは身構えるように聞いていた。

先程述べたところの「意識」はそちらに向いていたのだった。

「…」

信号待ちの間、数秒間ほど横目でコナンの顔を伺っていた榊は、青信号を視認すると、勢いを付けてペダルを踏み込むと同時に再び口を開いた。

「もし本当にそう思ってるんなら、残念ながらハズレ」

「…？」

納得の行かない様子のコナンに榊はさらに続けた。

「だからさ、車を見失ったのは本当！それで、兄ちゃんが電話口で…これ、『電話口』って言っていいのかな…まあいいや、電話口でさ、何か変な事に気を回してる感じだったから」

一瞬、鳶色の髪をかき上げた。

「だから、嘘ついてるんじゃないかと思って、梨善町と反対側に行ってみたら、運良く予想が当たった。それだけ。」

「…けどよー…」

下り坂で、ペダルを漕ぐ足をほんの少し緩めながら、榊は横目で、まだ何か言いたそうなコナンの顔を睨んだ。

「あーもう、何も知らせなかったのはごめん！ごめんってば…でも、これを逃したら、あの車、捕まえられないかもしれないし・・・」

少し目を伏せて、唇をかんだ。

「それとも、まだあたしが嘘ついてたと思ってる！？」

少々なげやりな口調でそう言った。
「信用しろよなー…あたしは今まで兄ちゃんに嘘ついた事は一度しかないんだからさー！」

「・・・ん？」

何気ないその一言にも、コナンは違和感を覚えた。
「『一度』って・・・何をだ？」
緩やかな上り坂に入り、スケボーは出力を上げた。
「簡単には教えないっての！当ててみなよ、平成の『ホークス』なら！」
一瞬、今の緊迫した状況にはそぐわない悪戯っぽい顔をこちらに向けた。

コナンはその顔を、胡散臭そうな目でにらみ返した。
「・・・ったく、『ホームズ』だって言ってんだろ？それじゃあ球団じゃねーか」
「細かいなぁ、いいじゃん、この際」
そう言って、榊はサドルから腰を浮かせ、いっそう強くペダルを漕ぎ出した。

―何なのだろう？榊が一度だけついた嘘・・・

眼鏡の小さな光の点を頼りに車を追いながらも、コナンはその答えを探そうとしていた。

『大丈夫だから―心配すんなって！』

「――――――」

―今は、前と変わらないような明るい顔を見せているけど・・・

榊―

本当に―

『大丈夫』なのか？

＊＊＊＊＊＊

「コナン君たち、大丈夫かなぁ・・・」

「心配です・・・」

「あのひき逃げ犯、また何かやるかもしれないしよー・・・」

そう言う元太を、光彦は『縁起の悪いこと言わないで下さい』と、沈んだ声でたしなめた。

哀は一言も発さず、ただ地面を見下ろしていた。
「―？」
何かに気づいた様子でしゃがみこんで、アスファルトを指でなぞる。
（―血？でも、彼女の両親がここで事故にあったのは一ヶ月前のはず・・・）
他の、わずかに残る血痕は乾いていた。
（―じゃあ、これってまさか―）
哀の思考はそこで遮られた。
遠くから、サイレンの音が近づいてきた。
目の上に手をかざし、もう片方の手でそれを元太が指差した。
「おい、あれって・・・」
「ミニパト・・・」
そう呟いた哀に続き、光彦が、少し興奮した様子で声を上げた。
「由美さんですよ！」
「由美さーん！はやくはやくー！」
歩美に続き元太と光彦も、両手を振ってミニパトを急かす。
それは、現状を少しでも好転させたいという、『焦り』―それに似た感情の表れだった。
行動には出さないものの、それは哀も同様だった。

１３．始動（後書き）

作者より　お待たせしました・・・って、いつもこんな始まり方な気がします（ーー；）更新遅くて本当にすいません。ノルマの「１ヶ月に一回」、ぎりぎりクリア、といった感じです。

詳しいコメントはまた後日になりそうです。

６月９日追記

ＺＡＲＤの坂井さんの訃報はとてもショックでした。
家で新聞を読んでいた妹が、「たしかコナン（の主題歌）にＺＡＲＤの曲って一杯あったんだっけ？」と質問してきて、そこで初めて知りました。まさか訃報とは思ってもいませんでした。
「明日を夢見て」が好きで、よくＣＤを聞きながら口ずさんでいました。その歌声が聴けなくなるというのはとても残念です。ご冥福をお祈りします。

別の話になるのですが、数ヶ月前、祖母が亡くなりました。
電話で報せを聞いた後、いつもは泣かない母が声を上げて涙を落としているのを見て、なぜだか私も、声を掛けられないまま涙が浮かびました。

どちらも、人の命の重さを思い知らされた出来事だったように思います。
この話を書くに当たって、それだけは忘れないようにしよう、と思っています。

１４．懐疑

予想通り、運転席には由美が座っていた。
「由美さん！」
「現場保存、ご苦労様！」
窓を開けて、覗き込むように話しかけてきた。
「で・・・ぶつかってきたのは、例のひき逃げ事件の車なのね？」
「はい、間違いありません！」
「榊さんが覚えてたナンバーと、一緒だったもん！」
「榊さん？」
由美の問いに、光彦は沈んだ声で答えた。
「ええ・・・ひき逃げ事件の７番目の被害者・・・是枝榊さんです」
「・・・そう・・・あの子が・・・」
由美は前方を見つめて一息ついた後、言った。

「じゃあ、応援のパトカーがすぐ来るから、あなた達はそれに乗って送ってもらって・・・」
「えーっ！？」
「連れてってくれねーのかよ！？」
「当たり前よ！　ここから先はあなた達は関わらない方が安全だし、関わっても…」
「ところで由美さん…車の行き先はちゃんと分かってる？」
不意に、哀が注意を引く声を張った。
「ええ、大体は…」
「大体じゃ難しいわね。ただでさえ猛スピードで逃げている車を確実に捕まえるのは」
哀は、畳み掛けるように次々と喋った。
「もう一度聞くけど、私達は連れて行ってくれないの？」
「え・・・？　ええ・・・」

「それは・・・たとえ私達が、車の居場所が完璧に分かる『カーナビ』を持っていたとしても・・・かしら？」
哀は不敵な笑みを浮かべて、眼鏡をちらつかせた。
「・・・！？」
「あ、そうそう、運転中カーナビの注視は危ないから、運転手以外に画面を見ておく人が必要よね？」
「・・・！！」

哀の弁論にあんぐりと口を開けた由美と、手品でも見ているかのような、何とも言えぬ、わくわくしたような顔で哀を見つめる3人。

「・・・――あ～っ、もう、しょうがないわねぇ！！」
眉をひそめたり、口をぱくつかせたりした後、やや投げやりな口調で、由美は腕を伸ばして歩道側のドアを開けた。
「参った！　・・・乗ってちょうだい」
「「やったあ！！」」
「・・・あなた達も乗るのね？」
「あったりまえだろー！？」
「コナン君と榊さんが心配なんだもん！！」
「・・・邪魔はしないでね？」
「「はーい！！」」
呆れ顔の由美の不安を吹き飛ばそうと言わんばかりに、元太たちは威勢よく答えた。
哀は、横目で道路を見ながら最後に乗り込んだ。
「さあ、しっかりシートベルトするのよ！」
「ミニパトの姉ちゃん、運転うまいのか？」
「誰だと思ってるの？　これでも警視庁交通課の刑事なんだから！
・・・まあ、美和子のテクにはかなわないけど」

そう言って、由美はアクセルを踏み込んだ。

現場が、遠ざかっていく。

＊＊＊＊＊＊

コナン達は相変わらずスケボーと自転車とで車を追っていた。
緩やかな上り坂に入り、榊が立ち漕ぎをしようと腰を浮かせたときだ。
「・・・おい、お前」
榊が腕も足も、擦り傷や打撲だらけだったことに気付いた。
「ん？ああ、大したことない」
「んなわけねーだろ！？　お前、車が来たときに飛び出したりなんかするから・・・」
「だって！」
声を張り上げて小言を制した。
「あのままだったら兄ちゃん絶対に病院行きだったろ？」
口を閉じて憮然としているコナンに、榊は続けた。
「あのさぁ、例えばの話、兄ちゃんが轢かれそうになってて、で、それを蘭さんがかばって大怪我したとしたら、どう思う？」
コナンは目を見開いた。
「・・・大したことないっていうのはさ、確かに怪我したのは痛いよ？　痛いけど・・・『あの２人』の、命に関わるような怪我に比べたら、こんなので泣き言言ってる場合じゃないと思うんだ・・・」
もう、どれだけ走っただろうか。立ち並ぶ家々が、あっという間に通り過ぎてゆく。
「あたしは・・・あの後どれだけ後悔したか知らない・・・『どうして、自分はもっと早く車に気付けなかったんだろう』・・・『自分をかばおうとしなければ、２人はこんな事にはならなかったのに』

・・・って」
垣間見えた榊の横顔は、あまりにも悲痛だった。
「どっちも助からなきゃ、意味無いんだよ・・・少なくとも、あたしにとっては」

「・・・乗れよ」
「は？」
「乗れって言ってるだろ、スケボーの後ろに…怪我したまま自転車漕ぐのはきついだろーが」
それを聞いた榊は呆れたような表情を浮かべた。
「はいはい」
タイミングを見計らってスケボーに飛び移り、自転車はたたんで小脇に抱えた。
「全くしかたないなぁ、世話焼きなんだから」
「何だよ、その言い方」
「いや、こっちが大丈夫だって言ってるのにさ？」
コナンはまた眉をひそめた。
「お前、本当に・・・本当に大丈夫なのか？」
「しつこいね」
「気が済まねーんだよ」
「怪我なら後で消毒すればいいし」
「そっちじゃねーよ・・・おじさんとおばさんが入院して・・・今オメー一人だけでいるっていう、その状況が、だ」
「・・・」
「灰原も言ってたぞ、家事も大変そうだって」
「哀ちゃん、が…」
声のトーンは急速に落ちた。

その後は少しの間、答えを探しているのか沈黙を保っていた。
「あたし…は、大丈夫だと、自分では思ってたんだけどな…無理してるように、見えた？」
二重人格ではないかと思える程、いつもとは違う調子で、ぽつりぽつりと零す。
「間違えてた…かな…ちょっと、考えさせて」
その声は、自信がなさそうに消え入った。
―自覚はないという事か？
こちらの思考も、まるでつられて断片的になっているようだった。
…いや、今考えるべきはこの事ではなく事件のはずだ…

「おい兄ちゃん、前！」
たたき起こされたような感覚だった。進路には電柱。
「…っと！」
障害物を避けること自体は何でもなかった。重心移動に従い、スケボーは危なげなくスラロームをする。
ほんの少し上を見遣ると、青い看板に『０．５ｋｍ』とあるのが一瞬見えたが、地名を読み取る前に、標識は灰色をした裏側を見せていた。どこまで『あと０．５ｋｍ』なのかはともかく、そのような標識があるような大通りにまで来てしまった事は確かだった。
「全く、しゃんとしなよ…自損事故なんて洒落にならねーぞ！」
そう背後から檄を飛ばす榊の声は、さばさばとした、『コナンがよ

く知っている』ものに戻っていて。

やはりそれが、コナンの思考にわだかまりを残してならなかった。

１４．懐疑（後書き）

反省会　ぎゃー！ごめんなさいごめんなさい！１００日以上更新してなかったみたいです・・・ｏｒｚ

期末が終わって戻ってきました。久々の更新なのにいつもより文字数少ないです・・・この先がまだ完成してなくて、分けちゃいました。携帯での執筆に慣れたいです・・・

さて、どーにか探偵団も動きましたが・・・あの・・・ひき逃げ事件って交通課が担当したりします？・・・すみません、成り行きで由美さん出す前に自分で調べろって話ですよね・・・ｏｒｚ　無知です、自分。

ところで、第１話をぼちぼち修正していこうかなと思ってます。もちろんストーリーに影響のない範囲で、ちょこちょこ描写を入れるとかして。そのー・・・やっぱり１番最初に読者の方をお迎えする部分なので、もうちょっとましにしたいなと思いまして（＾＾；）そんなわけで、自分でも今「うーん・・・」と思ってる１話を通過し、この１４話までお付き合いくださってる皆様は、本当に心が広い方々だなぁと思います、ありがとうございます！（ＴＴ）

更新遅くてごめんなさい・・・頑張ります！

15．忘却

「あのさあ、一言いっていい？」
頭のすぐ後ろから榊の声が飛んだ。
「状況が逆だったら、あたしに任せてくれたんだろうな？」
「はあ？」
「だからー、さっき兄ちゃんがあたしを無理矢理スケボーに乗せたわけだけどさ。もし兄ちゃんの方がケガしてたら、その時は自転車に大人しく乗ってくれるのかって聞いてんだよ」
「バーロ」
「…なんだよ」
あからさまなしかめっつらが、その拗ねた口調から容易に想像できた。
「自転車の2人乗りは違反だろーが。それに、ケガをしてようが、スケボーに乗るのに支障はねーよ」
その言葉を聞いて、榊は頬を膨らませたようだ。肩に置かれた手に力が入った。
「あーあ、いっつもそうだ…不公平じゃねーか、それ。兄ちゃんばっかりいいかっこしやがって」
コナンはその言葉に苦笑を浮かべかけたが、今の状況にはそぐわない気がして途中でやめた。
我ながら、今自分は奇妙な顔をしているのだろうなと想像したが、背後にいる榊にはどっちみち見られることがないのは幸いというべきか。

「…変わらないね」
数秒の沈黙の後、また榊が切り出した。
先程からずっと、感情が浮き沈みしているような感じだった。
今は、どこか遠くへ、語りかけるような口調。歌を、惰性で口ず

さんでいるような、空っぽの。
「オレが、か？」
先程も似たような事を言われたから、その事だと思った。
「ああ、まあ兄ちゃんの推理馬鹿は死んでも治らないだろうなぁ」
言葉の端に、少し笑みが混じったのが分かる。
「今はそれと別の話。なんていうか…街が、変わらないなぁ、って。さっき…ほら今も、車や通行人とすれ違ったけど、あの人達はきっと、ついさっきあたし達が死にかけた事なんて知らないんだろ？」
声の飛ぶ方向が前から右、後ろへと変わる。小さくなってゆく対向車を振り返って見ているらしい。
「天気だって…『あの時』とは全然違ってて―」
空虚が、再び榊の口調を支配する。

「みーんな、もう忘れちゃってるのかなって思うんだ。同じ街で、1ヶ月前に起こった事を」

空っぽのままの、張り上げてもいない声が、びゅうびゅうと耳元で風が切れる音に遮られることなく、はっきりと、刺さるように聞こえた。
それは―突き付けられた現実は―どこか、無邪気な子供の残酷さに似ていて、コナンは息を飲みそうになった。

返事に困っているうちに、榊は『あ、』という呟きをこぼして、幾分生気の戻った声で続けた。
「ちょっと語弊があったかな…勘違いするなよ？　別に、いちいちみんなに可哀相にねって言ってほしいんじゃなくてさ…」
何となく、その言葉には納得できた。榊は、自らすすんで経緯を語

った訳ではなかった。『聞かれたなら話そうと思っていた』、と。

―それなら…

「全部を覚えてろ、なんてのは無茶だっていうのは分かってる。」

―どうして自分は…

「覚えるのは『自分に関係ある』事だけにしとかないと、そりゃ、やっていけないんだもんな」

―気付いてやれなかった？

「それに、人の事言えないしな。実際、あたしは、『あの時』まで―…」

―そうだ、自分も…

「『関係ない』って思って、忘れてた。」

その言葉に、唇をきつく噛み締めた。コナンがそうして押し黙っているのを見て、榊はふうっとため息をついた。

「…あ～っもう、ごめん！」

「なんでいきなり謝るんだよ」

「えー、何となくっていうか…だから、つまり…勘違いするなよ？」

うまく言葉を継げずに髪を掻きむしりながら、もう一度、念を押す。

そう、この目の前にいる顔なじみが、小さくなった背中に既に色

んな物を背負っているのは分かっているのに。少し、喋りすぎた気がした。この重苦しい空気に責任を感じたのだ。
「忘れられる事がいやだとか、そういう事じゃなくて…ただ、人間ってそういうもんなのかな、って少し思っただけ。」
だから、今言った事はそんなに気にするな、と、明るい声で締めくくった。
状況が状況だけに、この件の話題は避けられないだろうから、気休め程度ではあったが。

少し経って、コナンのバッジから電子音が聞こえた。
「もしもし？」
『あっ、コナン君…！　よかった、つながったよ！』
最初に飛び込んできたのは、歩美の嬉しそうな声だ。
続けて、『全く…』というため息や、『抜けがけは許さねーぞ』といった呟きも小さく聞こえ、コナンは苦笑に似た表情を浮かべた。
「なあ、そっちは今どうしてる？」
子供達に聞いたつもりだったのだが、急遽大人の声が返ってきた。
『私のミニパトの車内よ』
「由美さん！」
博士の車かとも思ったが、顔見知りである彼女と合流したのなら心強い。おそらく哀を呼んだ目論見は当たり、パトカーで発信器を追ってきてくれていることだろう。
『江戸川君？』
問いかけてきたのはその哀。
「あん？」
『あなた達、怪我してるんじゃない？』
「あ、ああ、榊が…」
『是枝さん、大丈夫？』
つい先程『全く…』と呟いたのと同じような感じがする口調だった。
「…うん、ありがと。まあかすり傷だからさ！」

『大丈夫か』と聞かれるのは何度目だろう、と榊は苦笑した。

『さて…今追ってる、ひき逃げ犯とおぼしき車だけど』

お互いの状況が一通り分かったところで、由美が切り出した。

１５．忘却（後書き）

反省会　１０６日間更新されていません、と赤い文字で表示されるとすんごい危機感ですね…ｏｒｚ　やっと更新です。そのくせ場面があまり進んでませんねごめんなさい…いろいろ書き込んでしまいましたが、これは書いておきたい事だったので。次回はもう少し進展がある…はず（おい）　話が変わりますが、最初のころ３点リーダを統一できてなかったので修正したいのですが、最近なかなかＰＣに触れません（ずっと携帯投稿）…ｏｒｚ　修正はもう少しお待ち下さい…　あー中間試験がすぐそこに！（＞＜）取り急ぎ、これで失礼しますー。

16．氷解

『乗ってたのはどんな奴か分かる？』
「二人組」
「若い男の人と女の人だったよ！」
榊に続いてコナンがそう告げた。
二人とも、動体視力は人並み以上である。
『車種は？』
『フェラーリ・テスタロッサです！』
答えたのは車内の光彦だった。
『ふぇ、フェラーリぃ！？　嘘でしょ！？』
由美は思わず叫んでいた。
『ねえ、それって何？』
『イタリアの超高級車よ…！　一体なんだって、そんな車でひき逃げ事件なんて…』
始めは歩美に向かって、そして後の方は半ば独り言のように、哀が低く呟く。
　確かにそうだ。
そんな高級車でひき逃げを続ければ目立つし、修理代もばかにならない。

―それしか車がなかった？

それにしたって、7件も事件を起こす理由は…

　三叉路に差し掛かった。見覚えのある道。
―ああ、そうか。
　発信機を頼りに左側に進路をとった時、ここが1件目の現場だと

気付いた。榊もそれが分かったらしく、歯をきつく噛んで、手に力が入っていた。

その時、由美は無線で他のパトカーと連絡をとっていた。
『こちら宮本！　車両は奥穂町方面へ逃走中！』

「―え？」
コナンは思わず聞き返した。
「奥穂町…なのか？」
『ええ、そうよ。方角と距離からいっても、きっと間違いないわ。あなたの眼鏡でもそうでしょ？』
眼鏡と広げた地図を見比べながらそう応答したのは哀だった。

何かが、おかしい。

だって、あのビデオでは…

『あっちぃなあ、この車！』
『悪かったわね！　この暑さでクーラーが壊れちゃったのよ！』
そう言われて、元太は『それじゃあ意味ねーじゃんよ…』と送風口を覗き込んだ。
『ここ1ヶ月、ほとんど雨が降らずに猛暑でしたからねー…』
『そうね…雨らしい雨といえば、この間の夕立くらい』
バッジから流れてくる向こう側の会話を聞いていたコナンの目が、徐々に見開かれた。

あの『矛盾』…

使われた高級車…

『赤い車が目撃されていることから…』

「―榊」

「な…に」

突然の、凄みのある声に榊は戦慄を感じた。中身はちゃんと新一のままなのだと、今更思い知らされる。

「お前が話してくれた、1ヶ月前の状況説明…『見たものと聞いたもの』…あれで『全部』か？」

「…待って」

榊はぐっと目を閉じて、強張った表情のまま念入りに自分の記憶を探った。目の前の『探偵』の最終確認に対して、間違いがあってはいけないから。

目が、開いた。

「…『全部』だ」

全てが、繋がった。

だけど…

――そういう、事かよ…！

コナンの歯軋りの音を、榊は聞き逃さなかった。

「悪い…トンネル入るから、一旦切るぞ」

『え？　ちょっとコナンく…』

コナンはバッジをポケットに入れ、意識を『こちら側』のみに集中させた。

風洞が迫ってきた。

一瞬にして、闇と轟音に包まれる。連なったオレンジ色の電灯が、次々と音を立てて通り過ぎていくような錯覚。

じっと前方を見据えたまま、コナンは口を開いた。

「…なあ榊」

そう来ると思った、と言うように、榊は間髪入れずに言う。

「みんなには聞いてほしくない話なのか？」

交信を切った意図を問われたが、首は縦にも横にも振らなかった。

「分からねぇけど…一応だよ」

「用件は？」

「…お前は、『動機なんて知りたくない』って言ってたよな？」

「…ああ」
「けど、時には動機が、単なる『犯罪の理由』だけじゃなく、犯人像を特定する重要な手がかりにもなる」
「それも、あたし言ったなぁ」

数秒間、間を空けた後、榊は次の言葉を促した。
「で…つまり？」
「ああ言ってたお前には酷な話かもしれねーが、今回の事件は動機が全ての鍵と言わざるを得ない」

「…それすなわち、犯人像は動機と切っても切り離せない…真相にたどり着くにはどうしても動機を知らなくちゃいけない、って事か」
逡巡した後の、平静を、装った声だった。震えそうになるのを、こらえた声。

その、今にも壊れかけそうな問いをはっきりと肯定する事もできずに、言葉を続けた。

「榊、お前は…」

逡巡。

「『真実』を受け入れる覚悟はあるか？」

その瞬間、たまらず榊は眉間にしわを寄せた。

『動機』という言葉が出た時点で、嫌な予感はしていた。

なにか、重大な宣告のような。

そして、『真実』…

榊の頭の中には、この単語を聞くだけで、蘇ってくる一文があった。

１６．氷解（後書き）

反省会

やっぱりパソコン編集はいいですね…！全文一気に表示して、編集できるから…と思いました今日。あ、それと後書きで改行できる事（笑）

というわけで、割と早めに投稿することが出来ました。ほっとしてます（＾＾）と言っても今回はだいぶ短いですが…ちょっと次回は一気に解決編、ではなく…色々うだうだ書く予定なのでまた間隔があくかもです…ｏｒｚ

読んで下さってる画面の前の皆さん、本当にありがとうございますｍ（＿＿）ｍ

17．混迷

コナンには、背後にいる榊の表情は、伺いようがなかった。
急いではいけない。無茶な質問なのは分かっていた。だが、明らかに―今までに見た事がないほど―不安定な彼女が、どう答えてくるのか、気にかかって仕方がなかった。

数秒の沈黙の後、ぼそっと榊は背後で呟いた。
「『不可能なものを除いていって残ったものが、』…」
コナンは一瞬怪訝な顔をしたが、その言葉には心当たりがあったので、止める事はしなかった。
「『たとえどんなに信じられなくても』…」
息を吸い直し、しっかりと確かめるように、自分に言い聞かせるように。
「『それが、真実』」
言い切った。

ちょうどトンネルを抜け、視界が開けた。轟音は後方へ散っていく。
「…それは、覚えてたんだな」
『ホームズの名前は忘れるくせに』と、薄氷を踏むような心地で、コナンは言葉を選ぶ。
「ああ、しょっちゅう聞かされてたから」
それだけではない。彼が…新一がこの言葉を持ち出す時は、いつも、何かしら重要な時だったから。
これが真相なのだと。受け入れるしか…いや、向き合うしかないのだと。
「それで…どうだ？　オレの質問の、答えは」

「…分からない」
「分からないってオメー、」
さっきの引用が決意表明にとれたので、つい、そんな言葉を発してしまった。
「あーごめん、おちょくってる訳じゃないから怒るなって」
なだめるように榊が弁明した。
「…分からない…か」
その言葉をなんとか自分で分析しようとしているのだろう。そうやって思案する時の口調になったコナンを、榊は一喝する。
「こら、考え込んでたら電柱にぶつかるだろーが！　…本当に、分からないんだよ」
榊は、そう言った自分の唇が寒くなっていくような感覚を覚えた。
—今まで、家族がいなくなる事なんて、考えてもいなかった。
—怖くて、考える事を避けていた。
—いつ、本当にいなくなってしまうか分からない…
—そんな状況になった時の自分の心情すら、予想できなかった。
「情けねーや、自分で自分が分からないんだもんな、兄ちゃんと蘭さんはちゃんとお互いの事が分かってる感じなのに」
口調は発する内容と違わず自嘲的だった。
「そりゃあ人の気持ちも分からない訳だ、天罰も下るさ。あ、なのにこないだ兄ちゃんに偉そうな事言ったな、ごめん」
榊が洗いざらい言うのに、任せるしかなかった。
「…これまでの兄ちゃんの質問に結論を出すとすれば…今の自分も分からない。ただ靄みたいで。だから『大丈夫』っていう自分の限界を、多分あたしはよく分かってないんだ。人から見たら無茶に見

えるのかも知れない。…それと、これからの事。全部知った時、あたしはどう思うのか、真実ってやつを受け入れられるのか、犯人に手を出さずにいられるかも、分からないんだよ」

背後から恐ろしい台詞を聞かされ、コナンは一瞬ひるんだ。

『ひき逃げ犯の車を壊す夢を見た』

そう榊がこぼしたと、哀が伝えたのではなかったか。

許せない、という気持ちが暴走しはしないか。

それが、哀の懸案ではなかったか。

それが、今、本人から突き付けられた。

「どうなんだろ…『罪を憎んで人を憎まず』って、できるもんかな？」

「…榊…」

「いけない事だとは分かってる。…うん、そうならないように努力はする」

まるでたいしたことないというような口ぶりだ。

そんなもんじゃないだろう、とコナンは心の中で問い掛けていた。

榊なりに思っている事を正直に打ち明けてくれたのだとは思う。だけどその締め括りとしては、最後の一言の口調は明るすぎた。

嘘をついている訳ではない。だが、まだ言わないで心の内にしまっている事が山ほどあるのではないか、と思えて仕方がなかった。

そして、今回の事があるまで、自分はその事に全く気付いていなかったのだ。それは、榊を人として甘く見ていたという事か。

こいつなら平気だと？悲しいと思ったり、寂しいと思ったりして

いる事はないと？
ばかげている。
唇を軽く噛んだ後、瞳は逡巡して少し右へ動いた。
目に入る光景はすでに、大通りのものではなくなっていた。並ぶ建物は民家の割合が増え、商店もいくつかがさびれて見えるが、多分まだ米花町内だ。
そして、町並みの上を覆う空は依然として青かった。
「…最近は、色々な事が起こりすぎてんのかもしれねーな」
できるだけ何げなく、コナンは自ら口を開いた。前髪が、風に煽られている。
「あ？」
『なんだ、いきなり』と、背後からの声は問う。
「さっきのお前の質問に対する、オレなりの結論だ。言い訳みたいだったら、悪いな」
「あー…」
何となく聞いてはいるのか、榊の返事はずいぶんと間が抜けていた。
「オメー、自分が喋るだけ喋っといて、オレの話に興味ねーのかよ」
不満げにこぼすと、『すーみーまーせーんー』と、もう分かったから、といった趣旨の返事があった。
その、かつてと―何もなかった時と―変わらないたわいない二言三言だけが、今の状況から乖離しているようだった。
そうして会話が途切れたところへ、ちょうど耳に届く電子音。
「あ、やべ、忘れてた…もしもし？」
『おい、何やってんだよコナン！』
探偵団バッジから流れた第一声は元太のものだった。
『なかなか折り返しの連絡が来ないから心配したんですよ？』
「悪い悪い…」

表情は見えないと分かっているが、苦笑が漏れる。
『ずいぶん長いトンネルだったのね』
皮肉にもとれる哀の言葉には『まあな…』と濁しておくだけにした。

「こっちは…もうすぐ車に追い付きそうだ」
『そうみたいね』と哀が言った。
あらためて追跡眼鏡を確認する。
明らかに相手のスピードは落ちて、間は確実に詰まってきている。
もう、赤いフェラーリをいつ視界に捕らえてもおかしくない。
車がスピードを落としているのは道幅が狭くなって走りにくくなっているからだろう。そもそも向こうはこちらが追っている事に気付いていないだろうが。

もしかしたら、犯人の家が近いのかもしれない。米花町ばかりで犯行を行ったのは、つまりそういう事なのだろう。
いよいよ建物もまばらになり、空き家や廃ビルまで見える。そんな場所へ高級車が入ってゆく不釣り合いな状況も、この推理が正しいならば全て納得がいく。点在するボロアパートを横目に、確信が強まっていくが、高揚感はなかった。ただ、鬱積。

―どうする？

自分でさえ、この犯行にはヘドが出る思いだ。
何が最善なのか。榊の判断力を信じるしかないのか。どうしてやれば―…

「…あ」
不意に後ろから声が上がった。
前方に目を凝らすと、彩度の低い町並みから浮いている、真っ赤な車体。

「―見つけた」
由美達に聞こえるように、コナンが低く呟いた。
全員に緊張が走る。
『…どうするんですか？』
光彦から、自信のなさげな声で問いが来た。やや間があって、
「まあ…とりあえず引き止めるしかねーだろ」
とコナンが返事をすると、すぐさま由美が口を挟んだ。
『応援も来てるし、私達もすぐ追い付いてあげるから無理はしないで、っていうか気をつけて！　いい？』
「…うん、分かった」

車の後ろ姿が、少しずつ近付いている。
その時、助手席の窓から腕が出て吸い殻を落とすのが見え、榊は顔をしかめて舌打ちした。
もう完全に、道ゆく人影はない。
「…この辺でいいんじゃねーか？」
感情を抑えているような低く押し殺した声で榊が問う。コナンはちらりと周りの状況を確認し、小さく顎を引いた。
「―ああ」
一拍おいて、背後で大きく息を吸ったのが聞こえた。

「止まれ！！」
腹の底から吐き出された声が、閑散とした風景を通って車までどっと押し寄せていく。
叫びの反響が止む頃になって、フェラーリは目に見える程に速度を緩めた。

赤い車が止まったのは、土手近くの空き地の側だった。
「なんだガキか…」
とため息をつき運転席から下車する若い男。その手に律儀にも抜か

れた鍵が握られているのを、コナンは目ざとく見つけていた。もし逃げ出そうとしても止める隙は十分あるという事だ。
「何の用よ？　新手のイタズラ？」
助手席の女は、くわえ煙草で苛立たしげに下りてくる。
「お兄さん達、現行犯だっていうのに白を切るつもり？」
コナンがスケボーを脇に抱えて言った。台詞は子供のものだが、口調は落ち着き払っている。榊はその後ろで押し黙ったまま、若い男女から視線を動かさない。
　男の表情は強張り、明らかに狼狽しているのを抑えきれないまま口が開いた。
「おい…お前何言ってんだ…変な言い掛かりつけるってなら、け、けい」
「警察は呼べないよね。捕まるのはお兄さん達の方なんだから」
有無を言わさずコナンは続ける。
「警察はもう呼んでる。もうすぐ来ると思うよ？」
男の顔が、悲観的なものになった。引きつった口で今にも『嘘だ』と言いたげだ。

　息を一つつき、コナンはあらためて男を見据えた。
「…あんたは」
もう『子供』として対峙する必要はない。そう判断したのだろう。声は、一段と低くなっていた。
「ついさっき、オレ達にそのフェラーリで突っ込み、そのまま逃げた。…『8件目』って事になるか」

　由美のミニパトの中で、子供達はバッジから聞こえるその会話に息を飲んでいた。

「観念しな。連続ひき逃げ犯…兼田さん？」

驚きではなく、恐怖感が男を襲っていた。
ただの子供だと安心していたのに…さっき突っ込んだ内の一人だと？
どうやって追ってきたというのだ。
いや、それどころではない。
なぜだ。
なぜこんな子供が。

「なんでオレの名前を…あ！」
恐怖で絞られていたはずの喉から声が漏れてしまった事に、男は自分で驚き、慌てて手を口にやったが、どうしようもない事を悟ったのか、手は中途半端な所で止まった。
女は、男を横目で見遣ると、コナンに視線を移して煙草を指に持ち替えた。男よりは気丈な態度だったが、口はわなわなと震えていた。

「…何？　何なのよあなた！」

卑劣な二人を釘付けにするように睨み据える瞳は、微動だにしなかった。

「江戸川コナン…探偵さ」

17．混迷（後書き）

反省会　長期更新停止の警告が出る前には更新できました…が、ちょっと間隔が開いたかなと思います。犯人を追い詰め真相を語るまでの部分に、いろいろ書いておかなきゃいけなかった（そして書きそびれていた）事を拾って詰めたら結構長くなりまして。でもやっぱり「探偵さ」で次回へつなげたかったし（笑）、それより短い所で切ってまた場面展開なしというのは私にとっても息苦しかったので。数話ずるずる引きずってすみませんでしたm（＿＿）m
コナンと犯人を対峙させ、「探偵さ」と言ってもらった事で踏ん切りがついたので（笑）、次回で真相の大部分を書きたいと思います。実は次回のラストをここにしたいというのは決まってるので、そこまで書けるよう頑張ります。では。

１８．追及

「た…ん…？」
目の前の男は、未だに『探偵』という言葉を結び付けられていないようだった。
「…連続ひき逃げ犯ですって？」
男よりもずっと流暢に喋り、気丈に振る舞ってみせるのは女。眉間に皺を寄せながら作り笑いで続ける。
「一体、何の」
「そ、そうだ！　何の根拠があるんだよ！」
女の言葉がちょうど助け船のような形になり、男は慌てて引き継ぐ。
コナンは若い男女と背後の榊とをそれぞれ一瞥した。

―どっちみち、時間稼ぎも必要だろうしな

長口上は覚悟の上。その準備運動とばかりに、一つ大きく息をついた。

「まずは、その車の事から話そうか」
コナンは視線で、男女の背後にある赤いフェラーリを示す。
「…めったに買えない高級車だ。盗んだのか？　ところが届けは出ていなかった。」
すぐに調べがついたのなら、これ程事件が長引いたはずがない。
「しかも、フェラーリを購入した人々を警察が洗っても手掛かりがつかめていない。…残る可能性は一つだけ。盗まれた側が、わざと盗難届けを出さず、なおかつ購入ルートをも隠したんだ」
男の顔に視線を移すと、たじろぎ、息を呑んでいるのが分かった。
「刑法第２２４条によれば、配偶者・直系血族または同居の親族間における窃盗は刑を免除される」

眉一つ動かさず難解な文章をそらんじる少年への女の眼差しは、化け物を見ているかのようなものだった。
「…兼田家の当主がそれを知ってたかはわからねーけど…あんたが盗んだ事が分かっていたから届けなかったというのは確かだ」
それまで黙って背後で聞いていた榊が、少しして呟いた。
「兼…田…！」

―1件目の報道と同じ日の新聞に載っていた、『米花町の富豪が車を盗まれたが、警察には届けなかった』という記事。

―そして、『米花町の富豪の息子が素性の知れない女と交際し、さらには金を持ち出すなどして家を追い出された』という主婦達の噂話。

―その家の名前は…『兼田』。

なおもコナンは続ける。
「そしてあんたは盗んだ車を持ったまま、人気の少ないこの辺りの安いアパートと駐車場を借りて米花町に留まり続けたんだ。それは、持ち出した金だけでは行くあてがなかったから…だけじゃ、ねーんだろ？」
何もかも見透かしているような瞳と口ぶり。いや、実際何もかも分かっているのだろう―榊は、ぼんやりとそんな事を考えていた。
コナンは目を伏せ、また一つ息をついた。
「引っ掛かってたんだ…2件目から7件目の現場には、あるべきはずのものがなかった。」
―それは、ニュースの映像でも分かった事。

「―ブレーキ痕…」
ミニパトの車内でバッジ越しの会話を聞いていた由美が呟いた。

「急ブレーキをかけた時に道路に付くタイヤの痕…ですよね」
光彦の言葉に軽く相槌を打ち、由美は続ける。
「それが、私達警察も気になったのよ…」
「…そして、1件目の現場にはくっきりとブレーキ痕が残っていた…けど、それも、明らかにおかしかった。」
―進行方向から右側に向かってついていたブレーキ痕。そして車は奥穂町方面へ逃走するのを目撃された。
―だが、奥穂町へ向かう道は、左側。
「これが何を意味するか…あんたがついさっき再現したおかげで、何も考える必要はなかったよ」
コナンは再び男を見据える。男は、ただおびえた目でその推理を聞いていた。
「家からフェラーリを持ち出し逃げる途中、あの三叉路で人をひいてしまったあんたは、被害者がまだ生きている事を確認すると…もう一度、ひき直した」
―ひき直した…
その言葉の響きに榊は言いようのない寒気を覚え、思わず左手をコナンの肩口で強く握った。
「アパートに転がり込み、ニュースを見たあんたは焦った。僅かながら目撃情報が出ていたからだ。…『どうして、ひき逃げ犯は目撃者が出ていたにも関わらずあの1ヶ月間、米花町で、同じ時間帯に犯行を行い続けたのか。』これが一番の疑問だったけど…本当は、『目撃者が出たから』、犯行を続けたんだろ？」

「…口封じだっていうのか。」
震える榊の口から、抑えた声が漏れた。
コナンは、詰まりそうな喉をこじ開けて『ああ』と返し、続ける。
「同じ時間帯だったのは、そうすれば目撃者と同一人物が近辺をうろついていると考えたから。目印は、『傘』」

―1件目と同じ日、『1ヶ月天気がぐずつく』と告げた天気予報。

―実際、そのような天気だった。ニュースの映像に出てきた人々は『皆傘を持っていた』。

―『猛スピードで走る車を見かけた』と言った、2件目の証言者は、『派手な傘』を持っていた中年女性。

―そして3件目では中年の主婦が犠牲になった。

―さらにその3件目の映像では『ピンクの傘』を持った『小学生の女の子』が映り、数日後9歳の女の子が…

―6件目のインタビューは、『親子連れ』のもの。その子供はごく幼かったが…

―榊が持っていたのは、『小学生がよく使う黄色い傘』だ。

「そうやって、『目撃者と思われる』人物を狙って犯行を重ねていった。7件目の後ぴたりと犯行が止まったのは…」

「雨が…やんだから」
歩美が、シートベルトを握り締めながらおびえた顔で呟いた。
光彦はそれを聞き、はっとして手を打った。

「そうか！　たしかにこの1ヶ月、雨がほとんどありませんでした！」
「この間夕立があったけど…あれは時間帯が違ったから犯人には関係なかった、って事か？」
「…それと」
元太達の言葉に、哀が付け加える。
「1件目から6件目の被害者は全員意識不明の重体だけど、是枝さんだけはそうじゃなかった。被害者本人からの、確実性の高い証言が警察に渡った事になるわね。恐らく彼らは、7件目の後下手に動けば、恐れていた捜査の手が及んでしまうと考えたんじゃないかしら？」
「…」
ハンドルを握る由美の顔は、険しくなっていった。
「やがて、ひき逃げ事件の報道がされなくなり、十分にほとぼりが冷めたと思ったあんたは—今度こそ別の場所へ逃亡しようとしたのかは知らねーが—また車を走らせ、偶然にもオレ達をひきかけ…」
その時突然、電子音がコナンの言葉を遮った。
フェラーリの車内の、携帯電話だった。男も女も、目線を動かしはするものの、何もできず突っ立っている。
数秒待っているうちに、メッセージが吹き込まれ始めた。
『もしもーし、オレだよ、何で出ないんだ？　さっきは運転中でも出たじゃんかよ。』
ギリ、という音に、男はびくりと震えて振り返った。榊が、歯を食いしばっている。
『またかけるからなー。』
電話が切れて一拍のち、コナンは続けた。

「…『携帯電話での会話に気をとられて』オレ達をひきかけ、1件目の時と同じ行動に出た。1件目から8件目まで、ただの傷害事件じゃねえ。殺人未遂だ。…もしかすると、これが新たな『1件目』になってたかもしれねーな」

女は苛立たしさに耐え切れず再び煙草を口にくわえ、男の目は現実逃避をしようと焦点を失い始めていた。

日が傾き始め、風に乗った草いきれが鼻をついた。
「お前らは、あたしを覚えてねーのか」
コナンの肩に手を置いたまま、榊は唸るように言った。
「『ほとぼりが冷めた』だ？　皆がお前らを忘れたと思ったら大間違いだ。たとえどの新聞でも、どのテレビで報道されなくなっても…あたしは―あたしを含めて、被害者の周りの人は…絶対に、死んでもお前らの事を忘れやしない。ああそうだ、忘れてたまるかよ！」
僅かに、語気が強まっていた。再び、声を抑える。

「絶対忘れない。どんなに怖かったか…どんなに、お前らが憎いか…」

上気し始めた榊の顔とは対照的に、男の顔はまた一段と青ざめていった。

再び、コナンが口を開いた。
「道路交通法第72条、交通事故が発生した時、運転者等は直ちに車両等の運転を停止して、負傷者を救護し、道路における危険を防止する等必要な措置を講じなければならない」
「…ちゃんと法律に書いてあるから、いけない事だ、ってか」
冷や汗をかきながら、引きつる口角を無理矢理上げた男がようやく発した言葉はそんな物だった。子供らしい論理だな、と。

虚ろな目で、震える声で喋り始めた。
「怖かった…怖かったんだよ…盗んだ車でひいたあの婆さんを生かしておいたら、ずっと強請られ続けるんじゃないかって…」
始めはぽつりぽつりと、そして段々と、ヒステリックな口調になっていく。
「親父もあの後、携帯に電話してきて言ったんだよ…『我が家の名誉を守るために、車を盗んだ事は隠してやる』…『お前も捕まらないようにするんだ、兼田家の名誉のために』って…だから、だから…」

「馬鹿か」
コナンの口調はどちらかと言えば冷めていた。
浅はかな男を突き放しているようでもあり、愚かさを哀れんでいるようでもあり。
「法律じゃ『救護義務』って言うけどよ…怪我をした人を、させた人が助けるなんて、当たり前の事じゃねーか…そんな、人として当たり前の事を…お前らみてーに、てめえの身勝手で無視するやつがいるから、わざわざ法律や、罰則を作らなきゃいけねえ」
再び男は情けない顔になって黙り込んだ。
「それを、お前らは捕まりさえしなきゃ、罰から逃れさえすればいいなんて勘違いしてやがる…兼田家の当主が守ろうとしたのは『名誉』なんて大層な物じゃなくて、くだらねえ『世間体』だろ…そんな…そんな問題じゃねえんだよ。」
苛立たしさをこらえ、喉から声を絞り出す。

「…最低だ。」

コナンはせめて、榊の言いたい事を出来る限り代弁してやろうと思った。
それで少しでも榊の気が楽になれば、と。

―その時、視界にミニパトが飛び込んできた。
「コナン君！」
車が停止するやいなや、ドアを開けて飛び出してきたのはカチューシャの少女。
「あ、歩美ちゃん…！」
―死んだようだった男の目に、狂気が宿った。
コナンと榊しか入っていなかった歩美の視界が、突如横から揺さぶられる。
「…！」
その場に走る戦慄。
「う、動くなぁ！！」
歩美を腕に抱えた男は、闇雲に叫びながら慌ただしく目線を動かし、遅れてパトカーから出てきた由美達を牽制する。
「来るな、来るなよ…」
「あ、歩美…！」
元太達が見守る中、由美は険しい表情で、ドアの陰でゆっくりと拳銃に手を伸ばした。
男はおびえきった顔で、声を裏返らせた。
「こいつがどうなってもいいのかぁ！！」
吹き抜ける風に流されていきそうな、見苦しい叫び。

次の瞬間、その風までもが止まった。

「何をふざけた事言よるんなら！！」

びりびりと、空気も物体も何もかも震わせる声。

全員が、動けなくなった。

がしゃり、と、抱えていた自転車を地面に倒した音が響く。

そして肩で息をする音。

榊の、２度目の怒号だった。

１８．追及（後書き）

反省会　ちょっと時間がかかってしまいました…やっぱりパソコン編集さまさまです。

今回刑法と道交法は、手近にあった資料から引用しました。資料っていうのはコナンのシネマガイドの、犯罪に関連する項目と、保健の授業のプリントです（苦笑）多分合ってると思いますが…

前回まで想定していたこの回のラストですが、伏線（というほどの物でもないですけれども…）を必死に回収しまくったら思っていたより長くなったので少々ずれこみました（笑）次回とその次くらいで「ひき逃げ事件編」を完結させる予定…です。

では、失礼しますｍ（＿　＿）ｍ

19．愕然

その場の全員が、榊を見つめたまま、何も言えずにいた。
コナンの麻酔銃を構える手も、止まっている。

やがて、榊の右足が一歩前に出た。
「榊…」
それを見て無意識に小声で斜め後ろに呼び掛けたコナンに、榊は首を動かさずに視線を移し、小さく頷いた。
「大丈夫」
硬い表情のまま、やはりごく小さな声で。

そして、また一歩踏み出し、ゆっくりとコナンの横をかすめていく。
榊が近づいてくると見るや、歩美を抱えた男の口はまたわななき始めた。
「く、来るな…それ以上来るとこいつを…」
「黙れ！！」
男とは比べものにならない、有無を言わさぬ一喝。
「さっき言うた事が分からんのか！」
男は黙り込み、ただ青ざめるだけだった。
「自分がそうなるまで気付けんかったあたしが言える事じゃないかも知れん…でも！」
榊の足取りは、速さこそ変わらないものの、確実さを増してきていた。
「お前が知らんだけでなぁ、その子を必要としとる…その子が傷ついたらいけん思うとる人はよぉけぇ居るんじゃ！」
不意に、榊が前傾姿勢をとった。
『あ』と男が短く叫んだ時には、榊は一気に間合いを詰め、左手

で男の手首をきつく掴んでいた。
コナンは、榊のもう片方の手が、体の横で制服のスカートを握り締めているのを見た。
まるで自分で、見えない糸でそこへ縛り付けているかのように。
「…お前なんかに、この子をどうかされてたまるか」
僅かに、声と拳とが震えた。
―ひき逃げ犯が怖いのではない。
―大事な人が傷つけられるのを想像するのが、寒気がする程怖い。
榊の目が、きっ、と男を見上げた。
「『どうなってもええ』わけなかろうが！！」

「ひっ…」
次の瞬間、榊の左手がぎりぎりと動いたと同時に、男の顔が大きく歪んだ。
男の腕から滑り落ちるように歩美がアスファルトに降り立つ。榊は空いている右手で、ガラスを扱うようなそっとした動作で歩美を後ろへ遠ざけた。
「う…あ…」
恐怖の色が濃い表情で、男はおぞましい程に力強い手を引き剥がそうとする。
「逃げるな！」
榊は文字通り手を緩めなかった。
「あ…ぁ…わ、るかっ、た…悪かった！　悪かったから…」
「だから何じゃ！！」
体を折り曲げるようにして、渾身の力で叫ぶ。
―お前は間違っている。間違っているんだ。
男はとうとう、気圧されたのか、絶望したのか、眉を八の字にしたまま崩れ落ちてしまった。懇願するような目で榊を見上げて。
「ただの責任逃れの謝罪なんて聞きとうない！　今そんな風に謝る

くらいじゃったら、どうして…どうしてあの時！」
そして女を睨み据える。女の眉がぴくりと動いた。
「お前も同罪じゃ！　なしてこんな馬鹿な真似を止めんかった！
こんな事せんかったら…」
榊の右手が目元を横切り、すぐに体の横に戻った。その言葉を口にする事をためらうように、唇が震えた。
「今何人もの人が死にかけちょるような事もなかった！！」
悲痛な表情に、僅かに後悔をにじませ、榊は座り込む男に向き直った。締め上げていた手首を、無造作に投げ落とす。
「どうして…！」

やがて再び沈黙の時間が流れ始めた。
由美は小さく息をつき、無言でポケットの中の手錠に手を伸ばしながら歩み寄ろうとした。

―ジャリ。

パンプスで煙草を踏み消す音が、静寂を破る。全員が、はっとして顔を上げた。
「なんでこいつを止めなかったか、ですって？」
開き直った高慢な口調と共に、ゆっくりと響く靴音。

―シャリ。

そして冷たい金属音。
それは、女の腕のブレスレットの音ではなかった。
「―決まってんじゃない。」
靴音が、止まる。
「ひっ！！」
たった今まで呆然としていた男が、息を吹き返したかのように声を

上げ、身じろいだ。
コナンも、誰もが、目を見開かずにはいられなかった。
由美も、とっさに腰に手を伸ばす。
「あたしが、『ひき殺せ』って言ったのよ。」
榊と男の視線の間に割り込んできたのは、白々と光るナイフだった。
―戦慄が、走った。
「お、お前そんなの持ってたのか…」
「全く…ガキ共にビビッてぺらぺら喋るなんて、やっぱり使えないわねアンタ。久々にいい金ヅルだと思ったのに」
共犯関係だったはずの女にまでおびえなければならなくなった男を、女は嘲笑した。
「ほら、キー出しなさいよ、あたしが運転するから」
右手でナイフを弄びながらもう一歩男に歩み寄り、空いている左手を突き出す。
「皆殺しにして逃げる気か」
「…あら、よく分かったわね？」
「え…」
コナン、そして女の言葉に男は縮み上がり、女は振り返りながら狂気の笑みを浮かべた。
「ククク…そーよぉ…大人しく親に食わせてもらえばいいものを、勝手に暴れて事故った挙句、『どうしよう、どうしよう』って泣きついて…ほんと、役立たずだものこの男」
「ナイフを捨てなさい！！」
由美がそう叫んで拳銃を向けても、女はナイフを榊と男の目の前でちらつかせて笑うだけだった。
「でもねぇ、あたしの頭は我ながらよく回ったわ。あのオジサンは予想通り、『修理代と口止め料』って言えばいくらでも金を振り込

んでくれたわ…何百万でもね！」
「親父から何百…！？　そ…そんな金、知らないぞ！」
「当たり前じゃない、アンタの通帳はあたしが握ってた。最低限の経費だけアンタに渡して、あたしは残りを全部いただいてたのよ」
女の口調は高揚していた。歌うように高らかに。
「そして回数を重ねるごとに、金額は跳ね上がっていった！　アンタがこいつをひき損ねて、息を潜めざるを得なくなるまではね！！」
『こいつ』と言ったのと同時に、ナイフの切っ先が、榊に向けられる。
「そして今日、へまをしてとうとう警察に嗅ぎ付けられた…もう付き合ってらんないわ。取れるだけの金は取ったし、アンタは用済み。」
絶望感がにじむ男の顔を鼻で笑い、そして視線が榊に移る。
「アンタ、7件目の死に損ないですってね？　ちょうどいいわ…」
榊は目を見開き、口を真一文字に結んだまま、微動だにしない。
「そう、あのオジサンもあたしがどこの誰か知らない…後はあたしが目撃者であるアンタ達を潰せばいい。あたしは絶対捕まらない！」
響き渡る高笑いは全員を苛立たせるものだったに違いない。けれど、榊の目の前をかすめる刃を前にしては、動けずにいた。
「他の死に損ないも、さっさとあの世に行ってくれれば万々歳だわ！」
叫んだ女が右手を振り上げる。
「！！」
榊はそれを見て急に現実に引き戻されたかのように、素早く身を一歩引いた。
空を切るナイフ。
僅かに聞こえる女の笑い声。
女は長い髪を振り乱し、右手に左手を添えてもう一度ナイフを振り上げた。

「死んで！！」

—女は気付かなかった。

—榊の顔が、憎悪渦巻く夜叉のそれになったのを。

「————！！」

次の瞬間、全てが動いた。

「危ない！」

そんな声を聞いた直後、榊は自分が仰向けに倒れているのを感じた。

そして同時に。

２つの鈍い音。

女が、右から左へと薙ぎ払われるように、視界から消えた。

「あ…！？」

倒れ込んだ感触がやけに柔らかいのに気付き、尻餅をついたまま首を回すと、元太達４人がいた。

そして、慌てて視線を左前方に移す。

車の脇でやはり座り込んだままの男…と…
もと立っていた場所から数メートル離れた草むらでのびている女。
そこへ由美が手錠を手にして駆け寄る。
その反対側…一瞬、コナンの赤いスニーカーから青白い火花が散っていたのが見えた。

「…は…ぁ…」
そして、今まで呼吸を忘れていたかのように、榊は大きく息をついた。
それは、悪い夢から醒めた直後のようでもあり。
もう一度、自分にぴたりとくっついて座り込む子供達に顔を向ける。
「…助けようとしてくれたのか」
「え、ええ…今にも犯人が、切り掛かりそうだったので…」
息を切らしながら光彦が答える。
「だから…みんなで思いっきり榊さんを引っ張ったの！」
「ま、まあオレがこけちまったんだけどよ…」
榊の真後ろにいた元太は、どうやら背中から両肩を抱え上げるようにしていたらしい。
「でも…よかったじゃない。小嶋君はいいクッションになったわ」
荒い息の中、哀は皮肉を言って僅かに笑みを浮かべた。
「よかった、無事で…」
そう歩美に言われた直後、榊の目には自分の右手が写った。
振り上げかけた、固く握られた拳。
「…」
―実際は、悪い夢から抜け出せたわけではなかった。
やり切れない目でそれを見て、ゆっくりと開き、だらりと地面に下ろす。
―自分は助けられるべきだったのだろうか？
―殺されたかった訳では、もちろんない。

―むしろ、傷つけようとしていた。この手で。
―それを遂げられなかった事が悔しい？　そうではなくて。
―そんな事をしようとした自分は、この子達に顔向けができるのか。

急に、風が擦り傷にしみた。
「…ありが、と…」
小さく消え入りそうな声に、複数のサイレンの音が追い打ちをかけた。

コナンは、ボールを蹴り飛ばした余韻の残る右足に視線を落とし、それから、アスファルトに座ったまま俯く榊を見た。
やがて、近づいてきたサイレンが止む。
モノクロの群れの中に独特の黄色い影を見つけ、回転灯と反射する西日の眩しさに目を細めた。

「じゃあこの後、みんなで事情聴取に来てもらえるかしら？」
由美が、他の警官と共に若い男女を立たせながらコナンに言った。
コナンはちらりとビートルに目をやる。
「うん…人数が多いから、パトカーと博士の車で分乗してもいいかな？」
「ええ、構わないわ。ちゃんとついて来てね。」
「あ、それと…その二人に、榊姉ちゃんの代わりに伝えてもらえる？」
「ん？」
よく聞こうと屈み込む由美に、コナンは一歩近づいて言った。
「『忘れるな』…って」

低く放ったその声は、パトカーに乗り込む男をまた身震いさせた。
警視庁に向かうビートルには、博士と哀、コナンと榊が乗っていた。
「…全く、たいした状況判断だな、兄ちゃん」
ひじをついて窓の外を眺めながら榊が呟いた。
「あん？」
「サッカーボールで大の大人を吹っ飛ばすとはな。」
「ああ、それは博士のメカのおかげなんだけどな。オメーがあの女から距離をとってくれたから、確実に狙えた」
それを聞きながら、榊は口元に僅かに笑みをこぼした。
「直前まで妙な時計を構えていたのに、兄ちゃんはサッカーボールの方を選んだんだろ？　…そうして…女があたしを刺すのを防ぐと同時に、あたしが女を殴るのも防いだ。なおかつあたしの気持ちがある程度納得する方法で。」
その言葉に『え？』と動揺した声を上げたのは博士だった。助手席の哀が、少し目を伏せる。
コナンは横目で榊を見て口を開いた。
「そのままオメーが自分で殴ってたら…相手が大怪我じゃなかったとしても—後味が悪くなるんじゃねーかと思って、な」
「…ぜーんぶ、」
そう言って一呼吸おいた榊の目は淋しげだった。
「やっぱり兄ちゃんは全部分かってるんだな」
「バーロ…」
コナンが目を伏せて呟く。
「オレにだって分かんねー事はいくらでもあるさ。分かる事と、分からない事がある。みんな、そんなもんだろ…分からねー事に首を突っ込みたくなるのが探偵っていうだけだよ」
それを聞いて、榊はふふふと声を漏らした。

「『分からない』っていう事が分かってるじゃねーか。」
「『無知の知』…ソクラテスか」
コナンもその返事に応酬する。
「横文字を出されても分からないって言ってるだろ…」
どこか、無理をしているような苦笑い。
そしてまた、数秒の沈黙。

「…あいつらにも、」
榊は、はっと顔をあげた。突然の話題転換に動揺しながら、落ち着こうとする。
「あいつらにも…あいつらを必要としてる人がいるかもしれねえ…そういう考え方は、どうだ？」
そう呟き、窓の外を見ていたコナンが、また車内に視線を戻す。
そして、榊と目を合わせた。
「—答えになったか？」
「…」
榊は一瞬大きく目を開き、すぐに戻して視線を僅かに落とした。
何もない場所を見つめて、逡巡。
やがて、小さく頷いた。

それから、榊の口から出たのは驚く程震えた声だった。
「…ごめん…」
そして、勢いよく顔を上げる。
「さっき…あの女の人と、赤ちゃんが…怪我しとったかも知れんのに！　年長のあたしが、ちゃんと救急車を呼べばよかったのに！あたしは…！」
「心配すんな」
できるだけ優しく、自責を遮る。
「残ったあいつらが、ちゃんと救急車も警察も呼んだし…たいした怪我じゃないらしいぜ？」

それでも榊は顔をしわくちゃにして、何度もしゃくり上げた。
「みんなに…っ、迷惑かけて…！」
顔を両手で覆い、そのまま上を向く。
「…ごめんなさい…ごめんなさい…！」

榊はしばらく泣くように声を上げ続けていた。
『泣く”ように”』。

—上を向いて歩こう

脈絡なく、その一節がコナンの頭をよぎった。

—涙がこぼれないように…

榊の様子にうろたえているのは、ちらちらとバックミラーで後ろを伺う博士だけのようだった。
コナンは—僅かに動揺は、した。こんな弱気な様子は、めったに見たことがなかったから。
けれど、自分でも不思議なほど、驚きはしなかった。初めてではない、と思ったから。
その泣きそうな表情に、やはり見覚えがある、と。いつの事だっただっただろうか。

どうしてそこまで、ぎりぎりの所まで来て我慢するのだろうか、と思わないわけではない。
ただ—恐らく、泣かない事が、榊が決めた、榊なりのけじめ。
そうする事で何か変わるかといえば、そうではない。験かつぎでもない。
けれど、それがせめてもの彼女の『意地』なのだ—何となく、そう思えた。

全ての気持ちが折れてしまいそうな中の、せめてもの自分へ戒め。

気がつくと榊は手を下ろしていた。車の天井を睨みながら少しずつ息を整えているようだった。

頬に涙の跡はない。それでも目は赤かった。

その上気した横顔を見ながら、コナンは今日起こった事を整理しようとした。

１９．愕然（後書き）

反省会　遅くなりましたー！（汗）期末試験のごたごたからやっと脱出です。

榊の喋り方ですが…広島弁、分かりにくい部分があったらすみません。われながら妙な設定を作ったものです（苦笑）

そろそろひき逃げ事件編、完結間近です。もう少しお付き合いくだされば幸いです（＾＾）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4744a/

介入

2010年10月28日07時34分発行